

和敬塾の再定義

乾文學

八月特別號

乾坤舎

乾
文
學

和敬塾再定義のために

伊勢 康平

卒業生特集を組んだ三月から今までの間に、和敬塾の状況は大きく変化した。数年前、新入生に大きな声を出させることをやめた乾寮を猛烈に批判した各寮が、今年度は次々と大声での挨拶や自己紹介を廃止して、今春の和敬塾は随分と静かになった。それでも入塾生の数は年々過去最低を更新しているし、新入生を痛め付けて「脱落しなかったやつだけが俺たちの仲間」みたいな元気で無茶な考え方もできなくなってきた。新入生を脅かそうとして、上級生が俄かにスーツを着散らかしたり、髪を金髪に染め出したりするという滑稽な情景も殆ど見られなくなった。こうして一部の人の言葉を使えば「ゆるくなった」和敬塾の諸制度は、かつてない速度で根底から瓦解しつつある。誰が何と言おうと和敬塾は変わってしまった。

和敬塾の「伝統」は、そして「和敬右翼」は遠からず滅びることになるだろう。

和敬右翼だけではない。「伝統」という制度から距離を置いてこれを批判し、時に冷ややかな視線を向けることによって、和敬塾内で（インテリ風としての）立場を確保して来た「和敬左翼」たちもまた、「伝統」の急速な瓦解により、意味を失いかけている。「和敬の『伝統』は虚構だ」という批判は、もはやむなしさしか与えてくれない。無論、これらの思想が全く消滅するとは思わないし、「滅びる」という言葉の誇張であることもまた当然である。しかし、「伝統」を巡るある種の二項対立は成立しなくなってしまったのだ。以後、行き詰まりを見せている「伝統」を無邪気に奉じたとしても、それは「伝統」の縮小版であり、「伝統」の陳腐な模倣にしかない。（本来の「伝統」が好かったという意味では決してない）反対に、「伝統」に対してこれまでと同じような問題意識を持ち、同じような批判を続けたとしても、せいぜい「指示対象なき言説の連鎖」（*1）に終わるのが関の山である。

では、来るべき「伝統」なき時代にあつて、僕たちはどのように和敬塾生として生きていけばいいのだろうか。いや、そもそも和敬塾とはどのような場所なのか。いま、和敬塾は再定義されなければならない。

僕は最近、漢詩と人工知能の関係をテーマにものを考えて来た。その暫定的な成果は本號に論考として掲載してあるので詳細はそちらを参照してもらいたい。人工知能の領域から再定義ということを考えると、少し興味深い点に気付くことが出来る。

近年よく耳にするディープラーニングという技術は、入力されたデータの特徴を自ら発見出来る点で画期的だとされている。いわば、世界のどこに注目すればよいかを自ら判断出来るようになったということだ。これに対して人間がしてやることは、人工知能が抽出した抽象的な特徴の集積＝概念に対して「それはねこである」、「それはどらやきである」と名付けてやることであり、これを定義付けという。

この定義付けの過程を念頭に置くと、再定義とはすなわち抽出する特徴を変更することだと言いうことが出来る。換言すれば、目の前に広がる世界に関して、これまでとは別の部分に注目しておくながら、一方でこれまでと同じように「これが○○である」と言つてのけることにほかならない。つまり、これまで和敬塾に関して注目されてきた要素（東京、男子寮、体育祭、厳しい上下関係など）とは全く別の要素に注目——それは往々にして発見を伴うだろう——して、特徴として取り出しておくながら、しかも至って恬然たるさまで「これが和敬

塾だ」と言い切ること。これが和敬塾の再定義であり、今回の特集の概要である。

さて、僕たちはこのようにして少し変わった角度から再定義ということそのものを定義してみたのであるが、それでは、これを和敬塾で行うということはどういうことを意味するのだろうか。これはつまり、「和敬塾の再定義」という議論が、これまで和敬塾で繰り返されて来た「新歓」や体育祭、もつと言えはいわゆる「伝統」に関する議論の数々に対してどのような位置づけを持つのか、と言い換えることが出来る。そして、それを明らかにするためには、僕たちはあらかじめ少し迂回しなければならない。

かつて「和敬塾の『伝統』は三年で形成される」と言った塾生がいたそうだと。僕はその人のことを知らないし、発言の裏も取れない。だけど僕は、それはまったくその通りだと思うから、これを自分なりに解釈して話を進めていこうと思う。

和敬塾（／各寮）の「伝統」が三年で形成されるということは、新潮流が三年で自明化することだと言い換えることができる。これはどういうことかというところ、和敬塾（／各寮）——以後略）で何か新しいことを始めた場合、当初は塾生全てが当事者であり、言わば「改革者」であ

る。しかし次の年には四年生が卒業し、新入生が入塾してくる。そもそも新入生にとっては、二十年の継続がある事柄であろうが昨年始まった試みであろうが、（先人が取り立てて問題にしない限り）新たな共同体に入るにあたって与えられた環境という点で同じものでしかない。こうしてある新潮流が三年の継続を果たした時、和敬塾内は、それをいわば環境として自明化する塾生がおよそ四分の三を占めることになる。（個人がそれを肯定するか否かは別問題である）環境に生きる者が環境の創造者を上回る。かくして「改革」は「伝統」となるのである（*2）。またもう一年経てば「伝統」がますます強固なものとなることは、もはや言うまでもない。

和敬塾のこの一連の流れは一見とても流動的だが、その実さほどさらさらしておらず、たまにじれったいまでの停滞性をみせたりもする。と言うのはつまり、和敬塾は構造的条件として塾生が絶えず入れ替わるものであるけれども、どういうわけか時折和敬塾で流動性が機能しなくなることがあるのだ。これは、経済学者の安富歩が言うように、社会Ⅱ共同体の構成要素が人間そのものではなく、各人間をつなぐコミュニケーションであることに起因している（*3）。つまり、「酒！ 筋トレ！ 合コン！」と耳にするが早いか身体が反応してしまうような（素質を持った）学生が毎年少なからず入って来るようでは、確かに人間は流動的に入

れ替わっているものの、そこで交わされるコミュニケーションのパターンは全く変わることはない。こうして個人の流動的な交換が行われるにもかかわらず、共同体が流動性を失っていくこと。ここでは、これを「流動性の固体化」と呼ぼう。昨今のように、「伝統」が伝統そのものであるかのように錯覚されていてしまった仕組みはここにあったと言っている。

和敬塾の構成要素としてのコミュニケーションがひどく固体化してしまったために、その流動性が異様に長い期間に渡って機能不全を起こしてしまったのが、「伝統」をめぐる和敬塾の諸問題の原理的な要因であった。そうであるならば、いまここにおいて塾生の意識を変えようと制度をあれこれいじってみた所であまり意味はない。和敬塾を変えるには、むしろ、これまで主流であった人々とは全く異なるコミュニケーションや発想のパターンを持つ人を大量に取り込むしかない。そうやってはじめて制度改革が意味をなすのだ。

こうして僕たちは、共同体の条件的な流動性と、それが固体化⇨機能不全を起こすことによる「伝統」の定着という現象を確認したわけだが、すでに述べたように「伝統」もまた可変的であり、まさに今瓦解しつつある（ゆえにこの流動性は、流動と固体化を交互に繰返す半固体的流動性と換言してもよい）。では、逆に和敬塾において不変である要素は存在するのだろうか。

これを考える時に最も鍵になるのは、塾の理念である「共同生活を通した人間形成」である。

この理念はどういうことかという点においてこの理念の重要性和普遍性を強調する。なぜなら、よく分からないという点においてこの理念の重要性和普遍性を強調する。なぜなら、よく分からないことによつてそこに無限に、解釈の可能性が生まれるからだ。

当然ながら、世代も故郷も考え方も異なる全ての大学生に普遍の目標なんて存在するはずがない。このよく分からない理念が真に理念たり得る所以は、まさに塾生それぞれが「共同生活」を通して自由に「人間形成」を考え、解釈し、実行することを受け容れるその寛容性にある。換言すれば、和敬塾生は（時に意識しない形で）「人間形成」の名の下に、教養講座や学問を行い、酒を飲み、激しく暴れ、セミナーや講演会に参加し、騎馬戦で闘い、ナンパや合コンで浮付き、尚且つ「文學し」て来たのである。この点は決して変わることがない。和敬塾の中心概念である「和敬」も同様に分かりづらい上に重要であるけれども、僕はこの解釈自在性と文化の全体性の担保という二点から「共同生活を通した人間形成」という理念が一番重要であり、最も意識して奉じて行くべきだと考える。「和敬塾の理念はよく分からないから無視していい」と無邪気に叫ぶ者は、理念を「無視して」行つたはずの行為ですらその「良く分か

らない理念」の内に併呑されてしまうという厳然たる事実を前に慄然としなければならない。曖昧な理念を奉じて随意に思考解釈、創意工夫して塾生と相交わり、時に「伝統」を形成しようと試みつつ、それが決して恒久の確立をみないこの半固体的流動性——言い換えれば、理念と塾生（同士のコミュニケーション）の衝突による、「伝統」という制度の自律的生成——これこそが和敬塾の文化的特性にほかならない。

「こゝで最も重要なのは、理念と塾生の衝突という基盤の上に成立する「伝統」が本質的に可変的であると同時に、常に複数であるということだ。厳密に言うと、僕たちが「伝統」と呼んでいるものは、流動的な和敬塾の中で、何となく伝統であるかのように見なされたものもろの要素の集合をぼんやりと包摂する概念にほかならない。それは、和敬塾の伝統とはなにか、という問いに対して決して統一的な解答が得られないことが如実に物語っている。

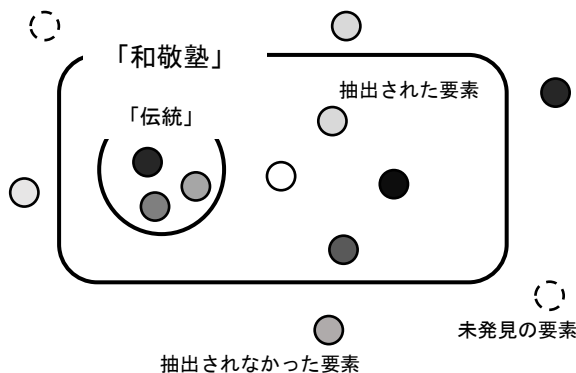
ちかごろ和敬塾では、閉塞的な現状を受けて「新しい伝統をつくろう」だとか「和敬塾は生まれ変わるのだ」だとか、そう言いたいさましい言葉が安易に叫ばれることがしばしばある。しかし、こういう時、「伝統」とはそもそもどういうものなのか——何が「伝統」を構成

するのではなく——ということが思考の対象となることはまずなく、多くの場合「新しい伝統をつくる」ための方法自体がきわめて曖昧なままに議論が進められてしまっている（これは、少なからず僕自身への自戒をも兼ねているのだが……）。

もう一度言うが、「伝統」とは複数の「伝統的」要素の総称である。してみれば、「新しい伝統」をつくることとは、とりもおさず「伝統」という語のもとに包摂されて来た各要素の一つ一つを批判的に検証し、それを全く別の要素に交換してやることにほかならない。（そして、その交換の契機となるのが、ほかでもなく不定期に作用する半固体的流動性なのであった）

ここで僕たちは、「新しい伝統」をつくることが、さきほど確認した再定義という行為と全く同じ過程を要請していることに気付くことになるだろう。つまり、「新しい伝統」を作ることは、単に「伝統」の再定義の言いかえでしかなかったのだ。では、和敬塾の再定義と「伝統」の再定義とはどのような関係にあるのだろうか。

ここでは、次頁の図にある通り、「伝統」もまた和敬塾を構成する特徴的な要素の一にすぎないことを確認すれば事足りるだろう。すなわち、「伝統」の再定義の先に和敬塾の再定義がある。「和敬塾の再定義」を標榜する僕たちの議論と従来の和敬塾での議論との関係は、大体



(図1) 定義すること。それは抽出された特徴要素の集合に名前を付けることであり、再定義とは、いわば要素を包摂する外枠を描き直すことである。

このように把握してもらえればよい。

これまで見て来たように、和敬塾の再定義とはすなわち、和敬塾にある無数の要素を包摂する範囲(の枠)を変えながら、もう一度「これが和敬塾だ」と言うことであり、「伝統」の再定義もまた、その範囲の中で行われるものにほかならない。今回の特集の目標は、和敬塾で見過ごされて来た要素の発見と抽出を通して、同様に余り注目されていなかったり、そもそも発見されていなかったりした諸問題や矛盾を暴き出すこと、そしてそれらを議論の俎上に載せることである。今回特集で収録した諸論考や、ある種の思考実験とも言える小劇場設立計画の提案は、そのようなものとして読んでもらいたい(*4)。

序文で述べるべきことは主に以上の点に尽きるのだが、最後に和敬塾を再定義するためにもう一つ論点を加えておこう。

さきほど「伝統」の再定義の先に和敬塾の再定義があると言ったが、これは必ずしも両者の明確な順序関係を意味しているわけではない。端的に言えば、和敬塾の再定義という問題が、「伝統」およびそれを構成する個々の要素に対してあれこれ議論するようなことは全く異なる地平に存在しているというだけのことだ。ゆえに、今回の特集では「伝統」に関してはほとんど触れられていない。（序文でやたらと「伝統」に触れたのは、それゆえでもある）

とはいえ、『乾文學』は今回新たに西寮の学生一名と北寮の学生一名を迎えることとなり、いふなれば乾寮内での小さな試みから徐々に和敬塾の「伝統」へとなりつつある。従って、僕たちは『乾文學』が「伝統」となることによる可能性を、換言すれば、『乾文學』はいかに「伝統」を再定義しうるかということを考えなければならない。

何度か初代編集人の那須優一や僕が言ってきたように、『乾文學』とは「公園」のような言論空間である。公園とは、少年が友人同士で野球をしたり、男女が愛を深めたり、家族が憩い^{のどか}を求めたりする長閑な場所でありながら、同時に知らない人にボールを拾われたり、犬の

散歩仲間がふと出来てしまったりするような、唐突さと偶然性——無數の要素が有機的に連鎖した結果としての偶然性——に満ちたスリリングな空間でもある。『乾文學』は、どういう形であれ、そこに足を踏み入れる全ての人にそうした唐突で偶然性に満ちた出会いや発見をもたらす場所であり得るし、そうでなければならない。

大切な人と交わりながら、時に一人ふらりと立ち寄った時——その「時」はしばしば無自覚に訪れるだろう——突然思いがけない出会いや発見を果たしてしまうような空間。そこには闘技場の熱狂^{コロッセオ}——一体感はないが、公園の分散——随意性がある。これまでの「伝統」的な諸要素は、ほぼ例外なく全ての塾生を強制的に巻き込み、闘技場型の熱狂によって人々をつなげていくことを目指す「大きな物語」として機能していた。ここでは、「物語」を称賛するか拒否するかによって塾生の中で大きく線引きがされており（個人の仲の良し悪しは必ずしも一致しないが）、自他共に「物語」への距離感を明確に意識しながら生活することが要請された。

しかし『乾文學』によって再定義されうる「伝統」では、毛色の異なる個人を包摂する共同性は、闘技場型の熱狂とそれに対する絶えざる嫌悪——批判の二項対立ではなく、公園型の分散、そしてそこに由来する偶然の遭遇という、ゆるやかであり、時に唐突なつながりに求め

られることになるだろう。公園のようにゆるやかで曖昧でありながら、その内に戦慄的な瞬間を秘めた共同性を実現すること。そのために今必要なのは、塾生間での偶然の出会いや発見を生み出す場であり、従来の枠組みではつなげなかった人たち——例えば各寮に現状少しはいるであろう、「文學する」という言葉に反応してしまうような人びと——をネットワーク化する枠組みである。当然『乾文學』はその中心たり得るが、唯一絶対の手段ではない。『乾文學』を起点として様々な派生的要素（日華交流会の企画などを散りばめることで、知らず知らずのうちに巻き込まれてしまうような、ゆるくてスリリングなネットワークが和敬塾内に張り巡らされること。これが『乾文學』が実現し得る公園的な「伝統」の可能性である。

ここで最も重要なことは、公園は管理人の一存によって一色に塗り固められるほど単純な場所ではないということだ。つまり僕の言葉は、それが公園で発せられたが故に、発せられたその瞬間忽ち公園に取り込まれ、そこを構成する一部分——いわば公園に飛び交う一球のボール——へと相対化されてしまわざるをえない。今回の特集および本號そのものは、出発点に僕の思想が色濃く反映されていることは言うまでもないが、その全貌を見れば、それがいかに偶然性に満ちた雑多な空間であるかに気付くことができるだろう。そこで僕たちが投

げたボールがどこに向けられ、どういう軌道を描くのかは、編集側はもちろん想定しているが、読者のみなさんによって僕たちが全く予想しなかったことが発見され、思わぬ所へボールが届けられることも充分あり得るし、僕たちはむしろそういう事態を強く望んでいる。

塾生及び関係者には、当然ながら和敬塾の今後と「伝統」とを考えながら本號を読んで、ボールをあちらこちらに投げたり受けたりしてもらいたいが、矢張り和敬塾関係者でない方にもぜひとも同じ様に読んでもらいたい。なぜなら、既にお気づきの方も多いと思うが、あの程度の流動性を孕む共同体における「伝統」（慣習と言い換えてもよい）の形成とその再定義という問題は、何も和敬塾に限ったことではなく、むしろ和敬塾の例は、社会に少なからず存在するそうした諸問題の象徴的な縮図であるとも言えるからだ。

それでは、ようこそ僕らの公園へ。これが、僕らの夢見た和敬塾だ。

敬

平成二十八年七月三十一日 東京目白台にて

1…メデア史研究家で文芸批評家の大澤聡は『批評メデア論』(二〇一五年 岩波書店)の中で次のように述べている。

「もはや問題は誰がその言辞を提出したのかではない。人物の実在／不在ですらない。小林(秀雄——引用者註)の立論を誤釈した人間が一定数存在する事態を前提とした言説が流通し、それによって現時点で『批評無用』が活発に論議されているという共通了解が立ち上がった、そして実際に膨大な発言を呼び込んだ、この構造こそが重要なのだ」(九十二頁)

例えば、これを和敬塾に当てはめると次のようになる。つまり「現在和敬塾には『伝統』と呼ばれる諸制度があるが、これは和敬塾の歴史に比べると比較的最近に出来た慣習でしかなく、とても伝統と呼べるものではない」という時、

人々はそこに強固な「伝統」の存在を前提として想起する。しかし、今やその「伝統」そのものが急速に解体されつつあるために「和敬塾には『伝統』があるが」ということを前提に出来なくなってきたのだ。前提となる対象が喪失されてもお、それを指示対象として展開される批判的な言説が本質的に空虚であるのは当然で、(少なくとも今後の和敬塾に関しては)この手の議論を重ねても大して意味はない。これが「指示対象なき言説の連鎖」である。

2…「伝統」をより明確に理解するために、僕たちは以下のように考えることができる。つまり伝統的であることと、「伝統」があることとは全く別である。例えば、和敬塾が伝統的だとされるのは、それが六十年以上の継続を持つからであるが、和敬塾の「伝統」つまり伝統であるかのように思われているものは、本質的にはたった

三年程度で形成されてしまう制度ではない。
してみれば、歴史は浅いが、「伝統」はある、
という事態が何の逆説性も持たずに成立するのだ。

3…安富歩『複雑さを生きる』（岩波書店 二〇〇
六年）一〇二頁。

4…特徴的要素の抽出と、それを包摂すること＝定
義することという構図があまりピンと来ない人
のために、これを少し具体的に考えてみよう。
例えば、今「和敬塾」という言葉を聞いて人々
が想起する要素は、だいたい騎馬戦、体育会系、
飲酒などであり、これらが「和敬塾」という範
囲の中に包摂された特徴的要素であると言える。
一方で、避難訓練という要素はどうだろうか？
これは、確かに和敬塾内に存在するものの、そ
れによって和敬塾が特徴付けられることはない。
避難訓練自体、毎年行われているのにもかかわ
らず、おそらく「和敬塾といえど？」と聞かれ
て避難訓練を特徴として挙げる人はまずいない。

これこそが、特徴的ではないが、しかし和敬塾
に存在する要素であり、図で言うところの「和
敬塾」の範囲の外にあった「抽出されなかった」
要素にほかならない。従って、和敬塾そのもの
と「和敬塾」という範囲は別物だと理解しても
らいたい。

また、ここで再定義、すなわち範囲の描き替え
ということを考えてみよう。例えば、もしも和
敬塾の避難訓練が、どういうわけか地域ぐるみ
のとてもなく力のこもった一大イベントとな
ってしまい、「和敬塾といえど？」と聞かれた際
に「いや、避難訓練でしょ！」という言説が多
く生まれるようになってしまった場合、人々は
それが和敬塾の特徴だと見做さざるを得なくな
る。つまり「和敬塾」という範囲に包摂されて
しまうわけだ。こうしてこれまで「和敬塾」と
いう範囲に包摂されていなかったものの、つまり
人々が和敬塾の特徴的要素として注目してこな
かったものが新たに特徴となってしまう時、和
敬塾は再定義されるのだ。

乾

文

學

八月特別號
平成28年
乾 坤 舍

乾文學八月特別號

目次

4 和敬塾再定義のために／伊勢康平

24 『大いに結構な叙事詩（無題）前編』（自動邦訳）／田中朔也
28 幻想／黒瀬修（徳久達志）

特集

和敬塾の再定義

提案 小劇場設立計画

38 企画主旨・和敬小劇場／伊勢康平
44 民泊×和敬／那須優一＋野中高亮
46 バイト×和敬／伊藤圭基
50 学習塾×和敬／齊藤和輝＋鈴木啓介

54 各寮間のつながりのために／清田凜太郎

56 広告と広報／野中高亮

62 和敬塾を考え直すに当たって／伊藤圭基

68 (コラム) 久しぶりに福岡に帰って／井手孝信

論考・随筆

70 豊かさとは何か——YAP島プログラムを終えて／草原広樹

80 俺の駅／中村慧

86 温泉／野中高亮

92 素数のカルテット／齊藤和輝

100 系に注目する／福西吾郎

110 指導された者の観点から見る教育論／米井滉太

114 人工知能は万古絶唱の夢をみるか？／伊勢康平

168 編集後記・お知らせ

掌篇

『大いに結構な叙事詩（無題）前編』（自動邦訳）

田中 朔也（西寮四年）

アノマロカリスが初めてリリースされたとき、それはそれは大変な衝撃だったそうで、地球上で初めて動物が動物を食べるという画期的な試みに対し、賛否両論ありながらも、生物たちは大変恐怖したという。原始脊索動物のピカイアも、現在非常に著名な三葉虫も、そんな一種だったのか、きつと現代では想像もつかないようになってんやわんやがあつたに違いない。おおよそ五億年前のことだ。

昨今、長く伸ばした髪の一部をふたつに束ねて前に持つてくる髪型を、アノマロカリスと呼ぶらしい。前に垂れた髪がまるでアノマロカリスの触手のように見えるからそういう名前がついているそうで、少し前まではただ単に触手、とだけ呼ばれていたと、信用おける文献には記載されている。きつと、ここ数年のうちに、触手という語感自体から、これまでなかった異様な気持ち悪さが醸されてきたことが関係しているのだろう。第一髪の毛は触手のようにうねうね動いたりはしない。あばば。

髪の毛がうねうね動いたりしないのはきつとちよつと前の常識なんですわ。僕の知るところでは既に、髪の毛さえ確かに動く。それも明確な意思を持つてね。僕のはつて？ それは答えられません、詮索は禁止。アノマロカリスの話からだいぶ飛躍してしまったみたいですけど話を戻していいでしょうか。アノマロカリスの触手はうねうね動

くタイプじゃない。ガシガシ掴むタイプです。

アノマロカリスの触手、最初はエビに間違えられたそう。当時の常識じゃ考えられない大きさの化石。間違えたやつにはエイヒレ食わせとけばいい。さて、前座の話もだいぶ長くなって趣旨がいまいになつてきたところで、今回のテーマ『ひどい部屋に住む肩パッド氏のコント』：じゃなくて『ヒト類に学ぶカタツムリ類の今後』に移行したいと思う。

ヒト類から学ぶことなんてありはしませんや。オオレイゾウコモドキという生き物を知っていますか。彼らはすごいですよ。きつと今だにあの森の中にのさばっていることでしょう。言葉なんて喋りつこないくせに、あれは、確かにレイゾウコに見える。そして、開けてみて中の牛乳を取り出したくなる。開けてみたが最後、食われちゃう。アノマロカリスのガシガシからはおおよそ想像もつかない捕食の進化だ、そうでしょう。しかし、思考を停止させるのもよくありませんし、こちらへんで一つ、かしわでを打つこととしたい。(パンパン。しばしの沈黙) さて、どうですか、皆さん。

僕はカタツムリなんかじゃないからね。もちろん「七万年の栄華を誇った人間さま、ここに有れり」なんて言うつもりもない。七つの彗星、五つの隕石、それから少しのアルグレイでしょう。なんであそこでアルグレイにしたのか。僕はあの匂い、無理なんだ。

黙らっしゃい、ティーバックでしか飲んだことないくせに。それに彗星も隕石もひとつずつだ。それもあんまり大

きくない。さつき話題に上がったオオレイゾウコモドキが、やはり決定的だと思うね。レイゾウコモドキは家庭用だが、こいつは業務用の大きいやつなんだ。晩年大いに祈り、働いたヒト類は、こぞって「業務」という言葉に食いついて、入っていったんだ。その中に。

社畜論、ですか。極めて人間的な用語の連続だ。しかし、ヒト類について語る上で人間的な用語を用いるのはいかなものでしょう。同じてつを踏むことになりかねない。もちろん、そんなこと断じて許されざるべからんことだ。ん？ ゆるされざ、る？ べか？ んん。文法構造がつかめなくなってしまうたぞ。おらおら。まいっか。

あまり言葉で遊び過ぎないように。粘膜をやられる。ときに、さつきから議長の色が見えないように思う。皆、どうだろう。全く突然姿を消した。見ていたものはいないか。カワヤだろうか。

カワヤは危ない。今の時期、カワヤノシロヒトリが出るよ。ちょうどいい、少し小休止としよう。私は疲れた。君、すまないがそのレイゾウコから牛乳を人数分とつてきてくれないか。四リットルだ。

(一匹、最も若いのがドアを開ける。たちまち中からガシガシした触手が二本伸びてきて、若いのをレイゾウコの中に引きずり込む。後に残った者たち、何事もなかったかのように会議を続ける。そうせざるを得ない。)

終

詩
幻想

黒瀬 修
徳久 達志(乾寮職員)

解題にかえて

深夜のトラブルが嘘のような快適な目覚めだった。

京急線の記憶は、松山からの異動で初めて羽田に降り、南北の逆転した方向感覚の頭で、別世界の広くて混雑した品川駅で初めて乗った時の混乱の記憶と、その後の京急平和島駅から毎日通勤で乗っていた満員電車の記憶しかなかった。

品川駅で山手線から乗り換えて、ほぼ待ち時間無しで乗れた一五年ぶりの京急線は、二人掛けのゆったりとした青い座席の快特で、運良くドア近くに座れた。

二つ目の停車駅である京急川崎駅で乗り換えた普通電車は、当時乗っていた時と同じ車両ではあったが乗客が少なく、また座れた。ほっとした。やがて、乗り換え案内でイメージしていたよりも早く京急鶴見市場駅に着いた。

友人の黒瀬君の住んでいた家は、予めグーグルマップで検索しておいたのだが、念の為構内の案内地図でも確認してみたが、やはり近くだった。駅の階段を降り、地面を踏みしめた時、なんとなく温かい感覚が伝わってきた。

街並みは大学時代の頃と変わらない雰囲気で、市場

通りを歩くとすぐに彼の住んでいた家に着いた。彼が案内してくれたような気がした。

ベルを押すと奥様が出迎えてくれた。奥様に初めてお会いしたのは、六年前に下関で開かれた何回目かの同窓会に行く折り、彼と品川駅で待ち合わせした時だった。左半身付随の彼を車椅子に乗せて見送りに来たのだと仰っていた記憶がよみがえった。奥様はあの時と変わっていないかったので、戸惑いはなかった。

丁寧に掃除をされた玄関から上がってすぐ右側にある彼の部屋に案内された。座布団に座り、ご仏前にお線香をあげて手を合わせた。彼の命日は彼の詩集の中にある「信濃追分にて」に書いてあった、彼が好きな詩人建築家立原道造さんが亡くなった日と同じ三月二十九日であった。

彼の部屋で冷たいお茶を頂きながら、奥様とひとし

きり想い出話しに耽った後に、彼が遺した詩集のタイトルについて伺うと、彼が好きであった宮澤賢治の詩集から拝借したのだと嬉しそうに話された。以下掲載するのは、そんな彼が遺した詩集の抜粋である。(徳久)

幻想

1994.2.8 礪波美術館前
穂高 比



黒瀬 修

はじめに

ここにある詩は、僕が一九才から二五才までの間に書き留めたもので、大きく分けると後半の信州を読んだ詩は、大学を卒業してからのもので、前半のものは大学二回生頃から卒業するまでの三年間に書き留めたものだ。大学では四年間、親元を離れ下宿生活をして

いた。下宿は二度引越しをしたけれど、二回生から卒業するまでは、一個所にとどまり落ち着いた生活を送った様に思う。学生ばかりの下宿で、皆楽しく下宿生活を送ることができた。部屋は四畳半で、地域的には京間なので関東の四畳半よりは広く、ゆつたりとした部屋であつたように思う。

この部屋は僕の生活の場であり、勉強の場でもあり、遊びの場であり、そして思考の場でもあつた。時には友人と夜を徹して議論したり、酒を飲んだりもした。

はちやめちやな楽しい下宿生活の思い出もいっぱいあるけれど、これから書く文章は、僕の書いた詩に関するの事なので、青臭いけれどもどちらかと言えば思考の場としての下宿部屋ということになるのかと思う。

僕は自分の部屋を「宇宙の一角」と称して、夜寝る時などに色々と考えを深めました。なにしろ誰一人として僕の生活を邪魔する者はいないわけで、考える事には、自由にそして深く、長い時間を使えた。誰もがその年頃に思う事を一つ一つじっくりと考えました。当時は剣道部仲間以外に、気の会った友人十一人で「友の会」という会を作って同人誌を作っていた。一か月一回お金を出し合つて、簡単な製本を町の製本屋に頼んで発行していた。そこに高校時代から好きだった詩を書き始めたのが、そもそもの僕の思考の原点だった。童話も書いた。書くことによって、自分の考えを一つづつ^{ママ}ほぐしていく作業が思考のほとんどだった。もと

もと歴史が好きで、特に古代史を中心として、よく本を読んでいた。詩も自分の心情を書けるので好きだった。

僕は夜寝る時には、部屋を真っ暗にしないと寝られないので、いつもそうしていた。そしてある時ふと思ったことがある。真っ暗な部屋の真ん中に、布団を敷いて寝るのだけれど、目をあけても、瞑つても、回りは全くの闇で、四方にあるべき壁も天井も床も意識の中ではなくなってしまう、まるで幽体離脱をして宇宙に浮いているような気持になった。そうすると頭の中の思考だけが、遠い宇宙のかなたに飛んでいつて、そこから今の自分を客観的に眺めるもう一人の僕がいるように、僕の思考は今までよりもはるかに視野の広がりを感じた。もう一人の僕との対話が出来るという不思議な部屋であった。

当時は今までを通じて一番、哲学的（と言っても系統

だったものでは、決してないけれど）な事に頭を使った時期でもあった。まだ語彙の不足もあり、考えたことをうまく表現できなかったり、何を伝えたいのかをうまく文字にできなかったりで、青臭いままの文章が多けれども、これらの詩も僕の大切な生きた証になるものだと思っている。今、読み返ししながら当時の想いや、自分の考えのまとめとして、新たに文章を継ぎ足している。

自分自身の生きている理由、何をしようとしているのか、自分と人との関わり、そんな難問に対しての僕なりの考えであり、答を得る為の、まだ基礎固めみたいな時期の色々な思いである。当時の僕の思考回路がどういうものであったか少しは分かると思うし心情が伝われば良い。

時

時の重みも忘れてしまった頃に

なぜかふと思いつく風景

思いつくこと、それ自体が

時の流れの速さを感じていること

時の重みを感じている時

ふとした事の繰り返しを時の流れに乗せて

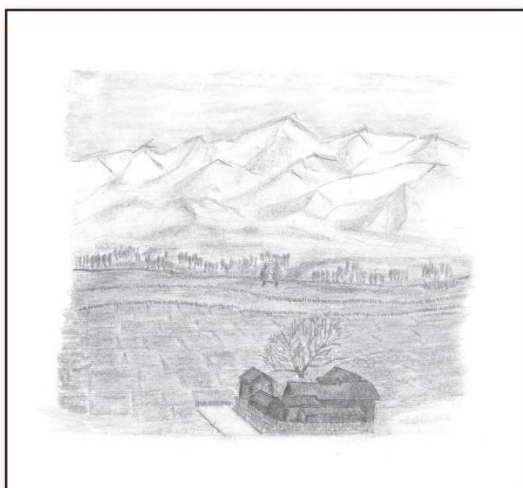
そうやって生きていく

——大学を卒業しサラリーマンになるであろう自分の人生の中で、何でもいから何か一つ自分自身が生きた航跡を残したいと、下宿の部屋で深夜放送を聞きながら、ふとそんなことを考えていた。僕という人間が形を変えて、一人でも多くの人の心の中に何かを残したいと。それは僕自身の言葉であつたり、動作であつたり、考えであつたりと、どんな形でも良いと思つた。と同時に自分は何をこれからやつて行くのか、何をしたいのかを考える。でも答えは出てこない。そしてあせる。そんな事の繰り返しだった。予感として、この時期に僕は、これからの自分の人生は、こんな事の繰り返しでほとんど過ぎていくのだという想像はしていた。そして事実そうになっている。ただ、あきらめの気持ちはない。一生涯、自分をみつめ、自分とは？という自分への問いかけだけは忘れずにおこうと。その為の努力は一生続けて行こうと決心した。「無知の知」と

という言葉があるけれど、自分は何も知らないのだ、ということを知ることから出発することが、この大きな問題を少しでも前へ進めて行ける、只一つの思考方法だと思った。さすがに哲学者の言葉は、的を得ていると思う。興味のあることは、とにかく本を読む、これが一つの方法である。堅苦しい勉強は別として、ちよつとした趣味でもかまわないと思う。僕の人生は、限られた時間しか与えられていないということをいつも頭の隅に置いている。そして自分の考えや、あの頃はこんなことを考えていたのだと、思い出し思い出し、しながら、その想いを未来につなげて、生きていく。出会った人たちの中で同じような価値観や生き方、あるいは考え方を持つ人が、どれほどいるのだろうか。そしてなおかつ、何人の人々と人間として、お互いを理解し同じ時代を生きて行けるのだろうか。一人だけであるかも知れないし、もしかしたら一人の人とも分かり

合えず死んで行くかも知れない。ただ一歩づつ歩くしかない。これが僕の学生時代の下宿哲学だった。

終



1993 12・2 安曇野
O. KUROSE

松本から街道沿いにひらがる
松本平は、オセロの背景に
水田、ワザ田など美しい
田園である。

あ と が き

夫は文学と旅が好きでした。スケッチブックを持ち、美しい風景を描き、
時には詩を作りました。ゆかりの地を訪れては、思いを寄せて。
遺された作品は若い頃のものですが、当時の考えや思いがあふれています。
今回 まとめることが出来て感慨深いです。

平成 28 年 5 月 6 日

黒瀬 由美子

特集

和敬塾の再定義

◎小劇場設立計画

企画主旨

伊勢 康平

和敬小劇場

伊勢 康平

学習塾×和敬

齊藤和輝＋鈴木啓介

民泊×和敬

那須優一＋野中高亮

バイト×和敬

伊藤 圭基

◎論考・提案

各寮間のつながりのために

清田 凜太郎

広告と広報

野中 高亮

和敬塾を考え直すに当たって

伊藤 圭基

企画主旨

伊勢 康平（乾寮第六期）

共同体とは、常に複雑さを条件とする。しかし和敬塾は、複雑さと共同性の高水準での共存が強く要請されている点で、いささか特異な場所である。というのも、ここでは、一方で五百人前後の男子学生が不断に流動することで高度に複雑な様相を呈しているが、一方で「共同生活を通じた人間形成」という理念からも分かる通り、ことさらに共同性が前面に押し出されてもいる。これらの融合を試みた結果生じたのが、ほかでもなく全塾生を強制的に巻き込み、ある種の熱狂によって「一体感」の共有を目指す「和敬塾の伝統」という物語であり、それによって発生した現象は、序文でも確認したように、共同体の構成要素であるコミュニケーションのパターンが硬直することによる複雑さの機能不全であった。

ここで問題は、複雑さの機能不全といった抽象的なものに留まらない。例えば、出願者の減少や中途退塾者の増加（*1）、それから広く和敬塾を取り巻く社会（大学、OBや保護者などの関係者、あるいは近隣住民）との不和など、枚挙にいとまがない。こうした諸問題に対して、和敬塾内では「新歓」なら「新歓」、体育祭なら体育祭、飲酒なら飲酒と、それぞれ問題を分けて個別に対処していくのが堅実であるかのように、思われているし、実際そのような対策は講じられてきた。

しかし、本当にそうだろうか。和敬塾が複雑であることと同様に、和敬塾の諸問題は互いに離れがたく連鎖した複雑な構造を持っている。(例えば、コミュニケーションパートナーの硬直が原因の one となって起こった飲酒の強要によって発生した早大との不和によって、同大に関連した広告活動が制限され、それが入塾生の減少の要因の one となっている) それならば、これらの解決策も同様に連鎖的かつ多面的であるべきではないだろうか。

従って、僕たちはここに小劇場設立計画を提案する。詳細は以後に譲るが、この計画の目的は、和敬塾の諸問題への既存の諸策に関してオルタナティブを提示することであり、同時に、それを通して従来あまり和敬塾で注目されて来なかった要素の発見と抽出を行い、それらを議論の俎上に載せることである。それは、単に小劇場に求められるのみならず、小劇場設立のための戦略の数々にも見出されることになるだろう。

小劇場設立計画と聞いて、絵に描いた餅に過ぎないと一笑に付す人がいるかもしれない。だが、いま和敬塾に決定的に不足しているのは、まさにこうして大胆に風呂敷を広げ、同時に繊細に議論する力である。

だから、僕たちは全力で餅を描く。和敬塾に新地平を開くために。

終

1…塾生の減少とまとめられるこの二つの問題は、和敬塾の年間の経常収益の約八割が塾費——つまり塾生の生活費や家賃として支払われる費用——によることから、文字通り死活問題といえるだろう。なお、詳細は和敬塾「平成二七年度決算報告書」三頁参照。

和敬小劇場

伊勢 康平

◎趣旨

現在和敬塾には、約八百人規模の大講堂、総面積二百㎡弱の西寮ホール、それからほぼ同規模・機能の巽寮ホールの三つのホールがある。この内西寮ホールを改修し、大講堂に著しく欠如している遮音・照明機能を充実させた「**和敬小劇場（仮）**」を設立する。

和敬小劇場は、従来の西寮ホールに要請された塾生間の交流の場としての機能（*1）を残しつつも、首都圏の大学の学生および近隣住民を始め広く社会に開放し、演劇、ライブ、漫才、展示会などの文化的交流の一大切な点とすることで、和敬塾の文化資本を増加させるのみならず、塾を取巻く社会（市民、大学、OB等）との関係改善、ひいては斬新で魅力的な広告戦略の要となることで（*2）、塾生の質・量の大幅な向上が期待出来る。

また、和敬塾の近隣には、二〇一五年にこけら落と

しをした早稲田小劇場どらま館（以下どらま館）などがある。本劇場はどらま館に舞台・客席スペースの高さ（四m）や総階数（三階）などの点で劣る。しかし、和敬塾の所有する宿泊・飲食設備を安価で提供することで、宿泊型の劇場（あるいは稽古場）としてその特異性を発揮することが出来るだろう。その時、広く学生の利用を促すために学生は劇場費免除などの優遇措置を用意する必要がある。

最後に、当計画の基盤となる改修・運営の財源に関しては、主に以下の数点が期待出来る。すなわち、これから提案する和敬塾の諸資本を用いたビジネスによる収益、塾生の増加による収益の上昇（*3）、それから全五千人以上を誇るOB・塾友からの基金などである。また、劇場設立後は、使用者の滞在費や一般の利用者からの劇場費などがこれに追加されることとなる。

◎事業計画

事業開始前

和敬小劇場は、設立前後に専門家の助言をもとに柔軟な改変を行う「やわらかな劇場」(※4)を目指すことで初期投資の削減を図る。ここでは桜美林大学小劇場の実績から工費および運営予算として約一億円を予定している(※5)。五年間をかけて改修予算を稼ぐ傍ら、その活動を宣伝して塾生の増加につなげ、塾全体の収益を増加させる。

初年度

初年度の目標は年間一〇公演である(詳細は下記参照)。また、設備の柔軟な改良のために、利用者からフィードバックを受ける枠組みを設けなければならない。

二年目以降

ビジネスや塾生増加、塾友基金などの収益も用いて設備を改良し、さらなる事業拡大につなげる。目標は五年以内での年間三〇公演達成。

※その他のオプション例

- ・運搬用バンの貸与
- ・異地下を作業場として提供、塾生によるスタッフの補助

◎収益の概算

滞在費：一泊二食千円(十人以上での利用時のみ)

※女性の利用も考慮して、宿泊場所は本館和室にするのが理想的。難易度は高いが、実現すれば環境及び宣伝材料としてこの上なく強力になる。

劇場費：四万円/日 あるいは 二五万円/週(※6)

どらま館の初年度の稼働状況(演劇のみ)：二七公演九二日(※7)。ここで各公演の小屋入り日数を平均五日と仮定すれば、年間使用日数は

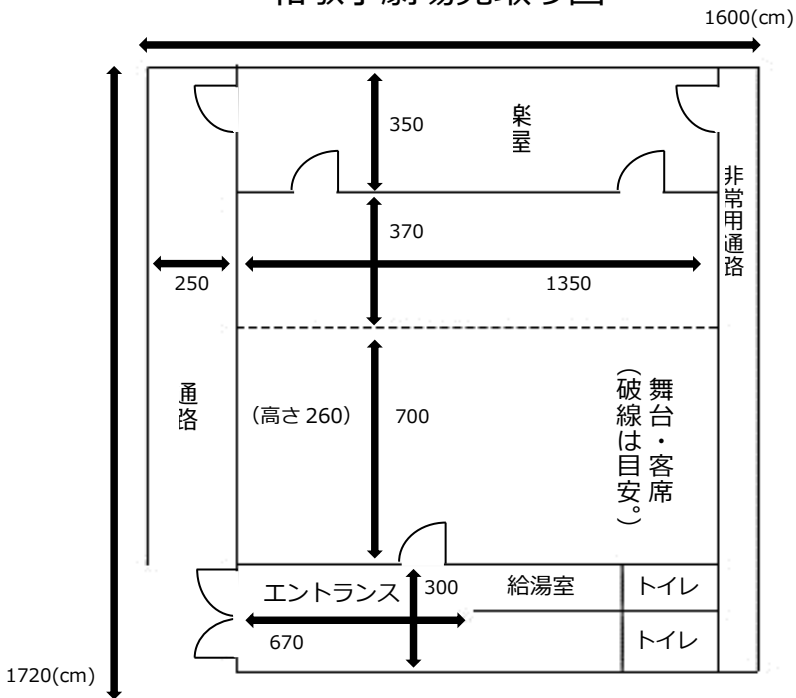
$$27 \times 5 + 92 = 227 \text{ (日)}$$

これから、設立五年後の目標を全ジャンル合計で年間三〇公演とする。そのうち二〇公演を学生団体、一〇公演を一般利用と仮定して、一回当たりの利用者平均一五人、利用期間を一週間とすると、収益見込みは

$$20(15,000 \times 7) + 10(250,000 + 15,000 \times 7) = 5650000 \text{ (円)}$$

そこから逆算して初年度は年間¹⁰公演を目標とし、七公演を学生、三公演を一般と仮定すると、収益見込みは
 $7(15,000 \times 7) + 3(250,000 + 15,000 \times 7) = 1,800,000 \text{ (円)}$
となる。

和敬小劇場見取り図



※現在の間取りをそのまま利用した場合。客席は目安の状態で 50～60 席を予定。

収益見込み



- 1 : 例えば、西寮ブログの二〇一五年十二月三日の記事
(<http://blog.livedoor.jp/westwake/archives/55438620.htm>
三) などにある通り、地下ホールは例年宴会場として使用
されている。こうした用途に関しても、遮音・照明完備の
小劇場では従来より一層交流が深められるものと考ええる。
- 2 : 現在、ネット上で和敬塾の情報を入手するためには「和
敬塾」あるいは「騎馬戦」といったキーワードを入力せね
ばならず「乾文学」も可だが、現状あまりに知名度が低い)、
そうして得られる情報は往々にして和敬塾の「伝統」を面
白おかしく特集したメディアの番組や、騎馬戦の動画とい
った和敬塾のごく一部を切り取った偏りの強いものとな
る。和敬小劇場の発展によって将来的に期待出来るのは、
例えば「早稲田 演劇」と検索することで和敬小劇場、あ
るいは和敬塾本体のHPに辿り着くといった現象であり、
そうした偶然によって本来和敬塾を全く知らない——従
って絶対に「和敬塾」というワードでは検索しない——人
々に和敬塾のことを知ってもらえるようになるということだ。
- 3 : 塾生は塾費＝寮費として年間平均百万円前後を支払って
いる。平成二二年から二六年までの間に入塾生は約五〇人
減少しており、小劇場設立計画やその一環である塾生の

ビジネスが注目されることで五、六年先に入塾生の数を同
程度まで回復出来れば、それだけで年間五千万円前後の収
益増が見込まれることになる。

- 4 : 山崎泰孝『劇場の計画と運営』(鹿島出版会 二〇〇〇年)
- 5 : 平田オリザ「公立ホールの諸問題―特に演劇部門について―」
(http://www.jafra.or.jp/j/library/investigation/015/01/dafta/02_7.pdf) 五頁参照。
- 6 : 劇場費に関し「とうとう、例えば王子小劇場の場合
(<http://www.en-geki.com/service.html>) は七日間の利用
で五〇万四三〇六円(税込)であり、ぐらま館の場合
(<https://www.waseda.jp/student/dramakan/facilities/nothouse.html>) は、仕込み・稽古は一日六万五千元、公演は
七万五千元で、仮に小屋入り五日、公演二日としても四七
万五千元かかる計算になる。和敬小劇場の強みは、劇場運
営自体が黒字とならなくとも、それによる塾生の増加およ
び関連ビジネスの収益などによって総合的に利益を上げ
ればよいことである。ゆえに劇場費は他の劇場に比べてか
なり安く設定した。
- 7 : 詳細は「CoRich 舞台芸術―Beta」の「早稲田小劇場ど
ろま館」の項参照。
(http://stage.corch.jp/theater_detail.php?theater_id=251)

民泊×和敬

那須優一＋野中高亮

◎趣旨

和敬塾には幸か不幸か多くの空室があるが、それらは全く活用されていない。一方、東京は今後、オリンピックに向けて観光客の増加が予想され、宿泊施設不足は大きな課題となっている。実際、都内のホテルの稼働率はピーク時には八〇%を超えている。そこで、和敬塾の使われていない部屋を民泊に用い、利益を得ようというのがこのプランの趣旨である。外国人観光客はもちろん、受験期の宿泊等の需要も見込める。また、外部の人に和敬塾の施設を利用してもらうことで、和敬塾を知ってもらい、間接的な宣伝効果が期待される。現在の和敬塾は非常に閉鎖的なコミュニティであるが、この民泊の制度によって外部から人が来ることで、和敬塾は社会的によりオープンなコミュニティに変わるであろう。これは寮生にとっても非常に大きな意義があると思われる。

◎事業計画

事業開始前

和敬塾内でのルール作り（外部から人が出入りするようになるので、厳格なルールが必要になる。）

一年目

- ・和敬塾民泊用のHPの作成。
- ・宣伝広告
- ・和敬塾各寮の施設整備（清掃、一部修繕など宿泊場所としての最低限をクリアする。そのためには寮生の協力も必要である）
- ・年間利用者数五〇〇人を目標とする
- ・二年目以降
- ・稼働率アップを目指し、最終的には年間利用者数三〇〇人以上を目標とする。
- ・宣伝広告から、利用者の口コミや記事に取り上げてもらうことによる広報による情報発信を目指す。

◎収益の概算

食事無しワンルーム六畳：三〇〇〇～四〇〇〇円（東京の相場）

ここでは二食付きで三〇〇〇円で提供する。ここから経費（部屋の清掃、広告費など）を差し引き、二〇〇〇円の利益があると仮定して、一年目の目標人数である利用者五〇〇人で計算すると
 $2,000 \times 500 = 1,000,000$ （円）

の収益がある。

二年目以降、広告・広報活動が成功し利用者が徐々に増え、最終的に年間利用者三〇〇〇人達成されたとすると
 $2,000 \times 3,000 = 6,000,000$ （円）

の年間収益である。

※その他オプション例

- ・和敬塾生による都内観光案内
- ・教養講座体験（例えば、座禅体験や剣道体験など外国人顧客をターゲットとする。）

訪日外客数の推移



（日本政府観光局 発表資料をもとに作成）

バイト×和敬

伊藤 圭基

◎趣旨

和敬塾にいるのは、学歴もそこそ高く、かつ概ね健康な男子約三百人である。このヒューマンリソースを以てすれば、求人への仲介をすることでお金を稼ぐことは十分可能なのではないか。これがこのプロジェクトの発想の原点である。またこのプロジェクトは、塾側がお金を稼げるというだけではなく、求人側や寮生にとってもメリットとなることが多い。順に説明していこうと思う。

まず、和敬塾が求人への仲介をするにあたって、求人側のメリットとしては、多くの男子学生を一度に集められる点が挙げられる。そのため、塾側は力仕事や大量募集などの求人を積極的に集め、寮生に紹介していくことから始めると良いだろう。また、高学歴な人が多いため、力仕事だけではなく、家庭教師などといった学習関連の仕事の派遣から、コンピュータなどとい

った専門的な知識を要するような相談に対応することもできるだろう。「和敬塾に仕事を依頼すれば、必ずその仕事にふさわしい男子学生が来てくれる」という状態がこのプロジェクトの理想であり、目指すところである。これが達成されれば、求人側としてとても求人しやすい状態であり、多くの依頼が来るようになるに違いない。

またこのプロジェクトは、寮生にとっても大きなメリットがある。まず、自分でバイトを探さなくても良い。実際バイト探しは厄介であり、ようやく見つけた先がブラックで中々やめられないということも少なくない。それよりは、手軽に参加でき、様々なバイトに手を出せる和敬バイトの方が条件は良いだろう。また、後述の損益の概算のセクションで料金について詳しく述べるが、和敬バイトは仲介料を請求する。そのため、

求人元が人件費をとことん削らなければやっていけないような貧しい場所である可能性は低くなる。人件費に余裕を持っているバイト先であれば、たとえ高い技術や専門性は要求されたとしても、労働環境が劣悪であるということはほばないのではないかと予想できる。また、バイトで要求されるとあれば、普段から体を鍛えたり、勉強したりしようと思う人も出てくるであろう。このプロジェクトは大学生活を有意義に過ごすための着火剤にもなるに違いない。

さらに、このプロジェクトはさらなる寮生の呼び込みにもつながるはずである。まず、バイトをして稼いだお金は、「自分の手元に入る」または「寮費から差し引く」のどちらかを選べるシステムにしておく。この制度により、たとえ実家が貧しかったとしても自分の努力次第で和敬塾に住めるようになるわけである。今まで比較的世帯所得が高めの層に向けた寮であったが、所得に関係なく多くの学生の呼び込みが可能になる。また、自分の寮費は寮内のバイトで稼ぐことができる。というのは新鮮であり、話題性が生まれるに違いない。これにより、和敬にバイトを目的として入塾する人が

現れ、さらにこのプロジェクトを加速させることだろう。また、その話題性によりさらなる求人の依頼が来るかもしれない。

このように、このプロジェクトは多方面にメリットがあり、かつ先見性も見込めるのである。そのため今すぐにでも着手すべきなのではないかとさえ思われる。

◎事業計画

一年目

- ・バイト仲介業としての広告を大々的にうちだし、受注の仕組みを確立させる。
- ・仕事は主に十人以上の募集または家庭教師に限定して仲介を行う。
- ・次年度の入塾生募集に際して、和敬バイトの有用性を強調し、このプロジェクトの戦力となりそうな学生の募集も行う

◎ 収益の概算

二年目

- ・ マイナビバイトや **an** といったバイト仲介業を確立させている企業との提携を図る
- ・ パソコン相談などといった専門的な知識を必要とする仕事の受注に応えるため、塾内での勉強会を開催する

三、四年目

- ・ 事業を拡大しより多種多様な仕事の受注に取り組む
(例…家の掃除請負、引っ越し関連のお手伝い、Webデザイン、アプリ開発等)
- ・ 事業拡大に対応するため、勉強会の充実を図る

五年目以降

- ・ 事業の安定化を図る
- ・ 労働環境を整える

求人元への時給の設定金額

専門性の低いもの(力仕事、軽作業) …… 一五〇〇円
専門性の高いもの(家庭教師、PC) …… 二五〇〇円

そのうち塾側の仲介料

専門性の低いもの …… 三〇〇円
専門性の高いもの …… 五〇〇円

案件(五年後の目標値)

平日一日平均

専門性の低いもの …… 二人の派遣
専門性の高いもの …… 四人の派遣

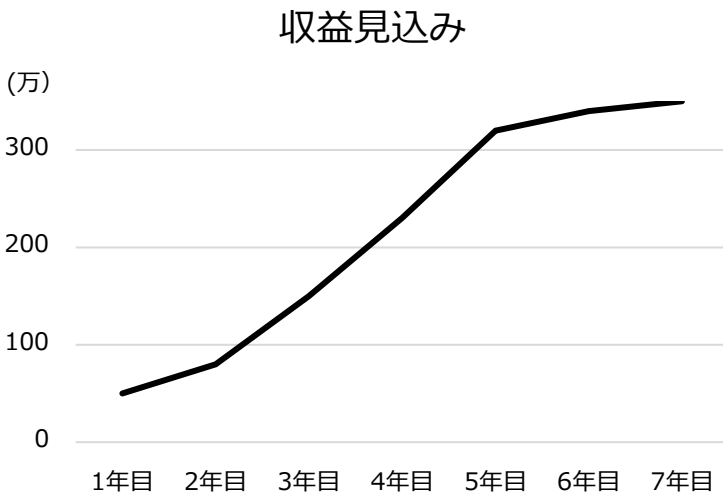
休日一日平均

専門性の低いもの …… 八人の派遣
専門性の高いもの …… 五人の派遣

一人当たりの一日平均実働時間

専門性の低いもの …… 四時間
専門性の高いもの …… 二時間

これより五年後の収益、つまり塾側の仲介料見込みは
$$((300 \times (2 \times 5 + 7 \times 2) / 7 \times 4)) + (500 \times (3 \times 5 + 5 \times 2) / 7 \times 2) \times 365 = 3,191,143 \text{ (円)}$$
となる



学習塾 × 和敬

齊藤和輝＋鈴木啓介

◎趣旨

我々が提案したいのは、和敬塾で学習塾を開くことである。我々学生を先生とし、小中高生を相手にした学習塾（兼家庭教師幹旋会社）を開く。使われていない空き部屋等を用い、和敬生が小中高生に勉強を教えるのである。この学習塾の長所は、受験生だろうが、内部生だろうが、どんな生徒にも対応している点である。特に、近隣に多く存在する付属校に通う生徒に対して、成績アップのお手伝いとしての塾が経営できる。こうした塾は現在極めて少ないため、集客に期待が持てる。私たちは先生として現場に立つだけでなく、より多くの学生を巻き込んだムーブメントの中心となるため、学習塾の経営も行いたい。ここで大事なものは、この

計画を和敬塾事務所が管理することに意味はないということである（ここでいう管理とは経営のすべてを寮事務が握るということである。和敬の施設を使つ以上、当然塾事務の方々に一定以上の発言権は存在すると考えている）。なぜなら、学生が主導となつて計画を進めることで、学生の自由で自律的な活動になり、この計画に賛同する学生が徐々に集まってくれろと期待できるからである。

◎事業計画

一年目

- ・HPの開設、チラシの配布等、広告費を使い生徒募集に尽力する。

目標としては平均して月々二人の契約で、一年間で四人の生徒を確保する。

- ・先生は乾寮の生徒を中心として、六〜八人募集する。

二年目

- ・引き続き広告費は使い、事業拡大を図る。生徒数の目標は倍の四八人。

- ・労働環境改善、成績アップ等の実績作り。

- ・先生募集も他寮の生徒を積極的に採用し、一二〜一六人採用する。

◎収益の概算

月謝等は学年等によって上下することもあると思うが、一時間二〇〇〇円と仮定して計算する。

そこから、講師の時給一二〇〇円、経営費四〇〇円を引き、残った四〇〇円が和敬塾への収入となる。

生徒の授業を仮に一日九〇分、週二回通ってもらうこととすると、一人当たり月に和敬塾へ

$$400 \times 1.5 \times 2 \times 4 = 4,800 \text{ (円)} \text{ 入るとなる。}$$

一年目での目標獲得生徒数は二四人。

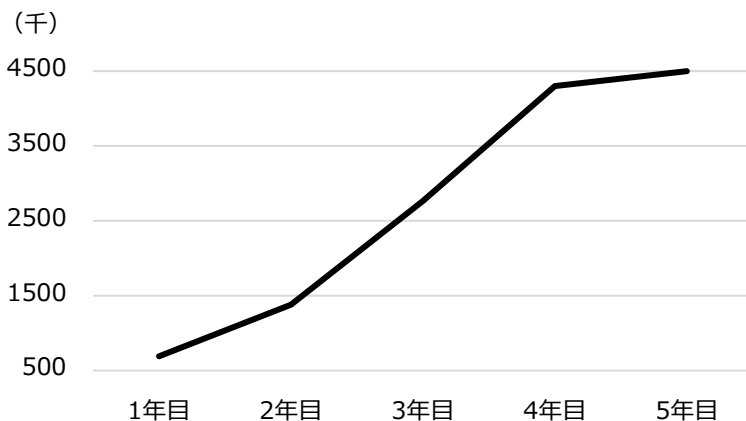
これをクリアしたとすると、二年目の時点で既に年間
 $4,800 \times 12 \times 24 = 1,382,400 \text{ (円)}$ 和敬塾への収入が確保される。

◎塾の制度

塾の制度は、個別指導を採用する。それは、物事の本質を理解させるには集団塾よりも個別指導の方が向いているのと、スタート時に必要となる教員および生徒の数のハードルを下げるためである。とはいえ、集団塾には集団塾の良さがあるため、いずれは両方に対応してゆくべきであると考ええる。

その個別指導だが、和敬塾に生徒が来て、寮の空き部屋で指導を受ける「**個別指導型**」と家庭教師として塾生が生徒宅へ訪問する「**家庭教師型**」の二つのコースを考えている。利用者が自身の事情を考慮した上で、自由にサービスの種類を選択できるシステムとなっている。

収益見込み



提案 各寮間のつながりのために

清田 凜太郎（乾寮第七期）

二〇一六年七月に行われた日華交流会は非常に楽しかった。台湾の学生をもてなす為、一部の和敬塾生がすべての寮（東、西、南、北、乾、それから院生向けの異寮まで）からグッツと身を寄せ団結したのだ。このようなつながりは、入塾して初めて見る光景だった。

そもそも、台湾と日本という「あっちとこっち」的な感覚は、和敬塾における各寮の感覚に近いのではないだろうか。というのも、塾祭や体育祭は勿論、食堂での座り位置など全てが寮ごとを対立させる構造になっている。これでは四〇〇人を超す学生が在籍しているメリットが全く活かされていない。

当然ながら、自分と話が合う（かもしれない）他寮の

塾生と交流する機会が増えてくれば、和敬塾で得られる体験がより充実したものになる。では、現在どのような交流が塾生間であるのか、これらをどう膨らませるのか、という点から解決策を模索したい。

いくつか挙げられる交流の場が、たとえば教養講座、各寮代表の会議、全塾飲み会、日華交流会などだろう。とはいえ、各寮代表の会議は短期的な問題を解決する為の場である上に、各寮より若干名しか集まらない。全塾飲み会の盛り上がった雰囲気では、知らない者同士が互いに共通の話題を見つけ、さらに話を深めることは容易では無い。日華交流会等はどうした交流には

最適なのだが、如何せん年に一度しか行われない。よって、現時点で塾生同士が、各寮の単位を越えて最も交流を深めることができるのは、教養講座だと言えるだろう。

唯一各寮間の壁を超えて定期的な活動が行われている教養講座だが、少々活動の敷居が高いためか、塾生の参加率が非常に低い。講師を招いている「講座」という場に緊張感を感じてしまい、足がすくむ塾生もいるだろう。更に全ての教養講座に「文」と「武」というお

堅いテーマを感じてしまう為、気軽には入り込めない空気を感じる。ならば、これらの教養講座的活動に、よりカジュアルで幅の広いものを追加することで、各寮生間の交流を深めることができるようになるのではないだろうか。

例えばフットサル。チームスポーツである為、参加

者同士の会話が期待される、学生に人気のスポーツだ。この程度の活動なら、多くの塾生が遊び感覚で入れるだろう。大学で既にフットサルをしている塾生を中心に据えれば、コート確保等の知識も、講師や監督に頼らなくてすむ。つまりは教養講座という枠を拡張し、「和敬塾内サークル」という塾生のみで行う活動を確立する。大学のサークルに入るほどではないが、少しは興味があるといった程度の人も集められるサークル活動を和敬塾で出来れば、各寮間の壁は簡単に無くなるだろう。

和敬塾の在り方を再考するにあたって、塾生が各寮の単位を越えて、今以上に会話をする事が必要不可欠だと思っている。軽い気持ちで明日からでも始められる塾内サークルがその第一歩になれば、和敬塾の再定義はさほど難しくなるのかもしれない。

48

今年の六月一日に和敬塾の Facebook が開設された。

開設二か月程度で投稿された記事は三十を超えており、結構な頻度で更新されている。入塾する学生数が低迷する中で、募集活動を強化する一環として塾事務所がおこなっており、これ以外にも、受験雑誌への広告掲載や高校・大学への募集活動、和敬塾ホームページの拡充など様々な募集強化活動を展開している。

こうした活動は性質の違いから二つのものに分けることができる。それは、「広告(Advertising)」活動と「広報(Public Relations)」活動である。日本語ではよく混同されがちな二つの語であるが、これらの概念は異なるものであり、Wikipedia による二つの違いは以

下のようになっている。

「広告が新聞や雑誌、テレビなどの広告枠を買って商品や企業の宣伝を行うことであるのに対し、広報とは情報を受発信することで、新聞や雑誌などの媒体に記事として取り上げてもらうなどして、従業員や株主、消費者などのステークホルダーに活動内容などを理解してもらうことを含む。」

つまり、和敬塾の募集活動に当てはめて考えると、受験雑誌への広告掲載や高校・大学への募集活動は広告活動であり、Facebook の開設とその更新は広報活動ということになる。また、ホームページの充実は広告活動と広報活動の中間に位置すると思われる。

表1

| | 広報PR | 広告 |
|---|--------|-----------|
| 掲載方法 | 記事・報道 | 広告・CM |
| 掲載の決定権 | メディア | 企業(広告主) |
| 情報の特性 | 客観的 | 主観的 |
| 情報の説得力 | 高い | 記事に比べると低い |
| メディアに支払う掲載費 | 無 | 有 |
| メディア側の担当者 | 記者・編集者 | 広告部・広告局 |
| 「Anety (http://www.anety.biz/pr/about/difference/)」の表より一部改変 | | |

表1は広報と広告の違いをまとめたものであるが、この表によると、広告が伝えようとする情報は主観的なものであり、広報活動によって伝わる情報は客観的であるとされている。実際、和敬塾の学生募集用のパンフレットを見てみれば分かるように、その中身は基本的に広告主（ここでは和敬塾）が思ったり考えたりしている和敬塾を、広告主が伝えたいように伝えている。一方で、各寮がブログなどで発信している情報やTwitterで流れる内容に基づいた和敬塾に関するインターネット上の記事には、記事を書いた人、つまりは和敬塾の外部の人からみた「和敬塾」が描かれている。これらの記事のタイトルには例えば、次のようなものがある。

・「日本一「男臭い」学生寮！？ 六〇年の歴史を持つ「和敬塾」の生活に迫る！！」(*1)

・「五〇校、六〇〇名！！男子大学生オンリーの学生寮「和敬塾」が話題！！」（※２）

左の画像は一つ目のページの一部分であるが、見ての通りこのページ内には、筋骨たくましい上半身裸の男

性の画像がある。そして、その画像の下には「開催期間一か月！オリンピックより長い体育祭」との見出しが書かれており、この記事を書いた人の和敬塾に対するイメージ、そして伝えたい内容がそのようなものであることを示している。また二つ目のページには、和敬

人と会ったら大声であいさつ！厳しい新歓期

和敬塾では、新寮生に寮規則と礼儀を叩き込むための期間が設けられている。それが「新歓期」である。

約二週間ほどの新歓期の間、新寮生はかなり厳しい指導を受けることになる。



廊下で人に会うたびに「こんにちは！」と大きな声であいさつしたり、「部屋廻り」と呼ばれる先輩の部屋への挨拶回りをしたりと、上下関係にかなり気を配った生活を強いられる。

もちろん、新歓期が終われば和気藹々とした雰囲気は漂いはじめる。

開催期間1ヶ月！！オリンピックより長い体育祭

和敬塾最大のイベントといえば、体育祭である。毎年9月頃に行われ、寮生は球技も含め様々な種目で競う。

中でも毎年最大の盛り上がりを見せるのが騎馬戦であり、数々のドラマを生んできた。

騎馬戦といっても、ただの騎馬戦ではない。みな上半身裸になって、互いに騎馬を崩しあう。頭についた帽子を取るなどといった軟弱なのではなく、物理的に相手を倒せば勝ちという単純なルールである。

プライドをかけた漢たちの闘いは、見る者の心を動かす。

さて、ここで実際に和敬塾に住んでいる学生に話を聞いてみよう。和敬塾での生活の実態はどんなものなのだろうか？

（図 2）

画像元：<https://collegino.jp/app/media/80>

塾に関するごく簡単な説明と出身者の紹介とともに、「和敬塾を動画で見よう」といって、Youtube（*3）にアップロードされた動画が掲載されている。和敬塾の四大事（塾祭、山手線一周ハイク、体育祭、予餞会）に焦点をあてたこの動画のサムネイルには、騎馬を組む上半身裸の男たちと共に「漢気を見せる時。」とある。サムネイルから容易に想像されるが動画の多くの部分を体育祭が占め、その中でも騎馬戦のシーンは和敬塾の一年間のクライマックスであるかのように、動画の中で長い尺がとられて紹介されている。結局この記事を全部見たときに強く印象を受けるのは体育祭であり、外部の人からみた和敬塾のイメージを物語っている。広告主が伝えたい内容——創立者である前川喜作が目指した「共同生活を通じた人間形成」の場としての和敬塾——は、ブログやTwitterなどの情報発信ツールでの広報によって、「体育祭に燃える熱い漢たちが集う

場」としての和敬塾にすり替わって、情報受容者に発信されている。表1にもあるように、広告よりも広報の方が情報の説得力は高い。広告が見せるものは、広告主の主観的な情報である一方、広報で伝わる内容は客観的な情報で、よりリアルな情報であるように思えるからである。このため、和敬塾を何らかの方法で知った学生やその親は、広告主が伝えようとしている「和敬塾」ではなく、それとは異なるイメージや印象の「和敬塾」を思い描いているかもしれない。

塾事務所は新入寮生の減少原因として「少子化」「地方から首都圏大学進学率の低迷」などを挙げている。しかし、多くてもせいぜい三桁後半の人数で満杯になるこの和敬塾において、ここで挙げたことだけが原因で寮生が減っているとするのは誤りだろう。平成二十六年の時点で東京の大学生（大学院生も含む）は七十万

人以上いる。この母数が徐々に減ってきているとしても、三桁の人数集めに大きな影響が出るとは思えない。

むしろ学生やその親のニーズの変化や和敬塾に対するイメージ・魅力の低下などが原因であると考えた方がよさそうである。そしてニーズの変化や和敬塾の魅力の低下が原因であるとして学生募集活動を強化するならば、情報受容者が受け取る広告と広報との内容の隔たりは深刻な問題になる。ニーズの変化によって、漢達が集う暑苦しい場を求める人が減り、逆にそういう雰囲気 GOODMAN 好まない人が増えているならば、広報によって伝わっている「和敬塾」のイメージはあまりいいものではない。広報が逆に学生を遠ざけてしまっている。これはあくまで、「もし」や「ならば」の仮定の話ではあるが、とにかく学生の減少理由を「少子化」や「都市大学への進学率の低下」として募集活動を行うことに待ったをかける必要がある。学生が減っている理由

を真剣に検討した上で、出てきた減少要因に対して効果的な広告や広報をしなければならぬ。

広告は、広告主の意向によって容易にその内容を変えることができるが、広報はそうはいかない。和敬塾から発信される情報に基づいて広報ができている以上、広報を変えるためには、まず和敬塾の内部から変化させ、それから外に向かって発信される情報を変えていかなければならない。幸いにも和敬塾には、様々な人たちが集まっており、必ずしも「上半身裸の漢達」ばかりではなく、文化的・学問的な面で外に情報発信していくことができる人たちがいる。体育祭ばかりが広報されるのではなく、和敬塾の様々な面を情報発信していく広報の存在が必要である。この情報発信の一翼を担うものとして、たとえば「和敬塾小劇場」なる芸術のための施設があつたら面白いのかもしれない。

終

1 : collegino「日本一男臭い学生寮！？60年の歴史を持つ「和敬塾」の生活に迫る！！」

<https://collegino.jp/app/media/80>

2 : NAVER まとめ「50校,600名！！男子大学生オンラインの学生寮「和敬塾」が話題！！」

<http://matome.naver.jp/odai/2135599757930549801>

3 : Youtube「和敬塾 東寮 PV 公式四大行事編」

<https://www.youtube.com/watch?v=j1B3IGseMnU>

論考 和敬塾を考え直すに当たって

伊藤 圭基（乾寮第七期）

あなたは和敬塾が好きですか？

きつと、好きな人もいれば嫌いな人もいるでしょう。しかし、たとえ好きだとしても、和敬塾に対する不満を全く持っていないという人はいないのではないのでしょうか。逆に、たとえ嫌いだとしても、和敬塾について気にいっているところが全くないという人もいないのではないのでしょうか。

ここで不思議なことは、和敬塾を総合的に見て好きだと判断している人にとって、上記のような不満は取るに足りないことのように思われるでしょうし、和敬塾を嫌いだと判断している人にとっては、上記のような気にいる部分は目に入りにくくなっているというこ

とです。

このように考えると、あるものが好きか嫌いかという総合的な評価は、そのものに関する部分的要素それぞれに対する評価を歪めてしまうということが言えると思います。

では、あるものが好きか嫌いかという判断は、何を根拠にしているのでしょうか。最も妥当だと思われるのは、そのものに関する部分的要素のうち、プラス評価のものとマイナス評価のもののどちらが多いかということとで判断する方法です。しかし多くの人々の好き嫌いは、そのような理想的な形で判断されないことがほとんどなようです。

まず大きく関わると思われるものは、第一印象です。人は一度思い込んでしまったら、そこから考え方を変えることはなかなかできないものです。これはおそらく、脳に一度神経伝達回路を作ってしまったら、無意識的にそれを使ってしまうことだと思います。第一印象を変えるには、新たに神経伝達回路を構築し、前の回路よりもさらに多く新しい回路を使い続ける必要があります。これはそれほど容易なことではないでしょう。確かに、第一印象に大きく左右されてしまうというのは合理的な判断だとは思われませんが、これが人間の性質なのだとしたら、それを考慮して対処していく必要があるでしょう。

次に大きく関わるのは、自分の周りの人たちの評価です。人は自分で判断するよりも他人に同調して判断する事が多いのです。これはおそらく、そうする方が

エネルギーを使わずに済むという事を長年の経験から学習してしまっているのでしょう。自分自身の評価を持つためには、ある程度の知識・経験が必要ですから、それらを習得する努力に比べれば、他人の評価を踏襲する方がよっぽど楽なのは言うまでもありません。また、周りの人という実例があることによって、その価値判断でも十分やっていけるということは保証されています。このように、他人の評価を踏襲することは手っ取り早く無難な方法であるため、多くの人が無意識的に他人の評価を自分の評価だとしてしまうのです。

すべての評価が、上記の二点だけでおこなわれるとは思いませんが、少なくとも上記の二点はほぼすべての評価に関わっているように僕は思います。人間の好き嫌いというのは、思いのほか不純な理由で形成されているなど常々思うのです。それが自分を含め、人々の行動に大きな変容をもたらすのですから、人間って

愚かなものですね。

それはさておき、話題を和敬塾に戻したいと思います。今の乾寮生の中で、和敬塾を好きだと胸を張って言える人がどれほどいるのでしょうか。見た所、それほど多くないように思われます。せつかく四年間も住む場所であり、これほど設備も整った歴史ある場所なのにも関わらず、どうして多くの人が和敬塾に誇りを持てていないように見えるのか、これは大きな疑問です。ではどうにかして「自分は和敬塾に在籍しています」と誇りを持って言えるような場所にできないのでしょうか。

和敬塾に誇りを持つているといえ、**「和敬右翼」**と呼ばれる方々がすぐに連想されます。この人たちは、和敬という場所を愛し、誇りを持っているように思われます。自分が愛し、誇りを持てる場所に住んでいる

という点において、**「和敬右翼」**の人々はそうでない人々に比べてよっぽど幸せな生活を送れているのではないかと僕は思うのです。

おそらく数年前までは、多くの人が迷いもなく和敬塾の**「伝統」**と呼ばれるものに誇りを持っていたことでしょう。確かにこの**「伝統」**は、社会的にはいろいろな問題があるのかもしれませんが、本人たちにとってみれば、自分が誇れるものなわけですから、それに染まることはきっと幸せなことに違いありません。しかし、社会的な問題が取り上げられて、寮事務からも色々と規制されるようになり、それまでの**「伝統」**が壊れていくと同時に、自然と塾生の間の和敬に対する誇りも薄れてしまったのではないのでしょうか。

ここで強調したいことは、和敬塾としての誇りはあって良いのではないかということです。いやむしろあるべきなのだ、ということです。なぜならば、その誇り

が塾生の自信となり、無意識的に生きる活力を生み出し、また和敬塾の求心力にもなると思うからです。（これは和敬塾に限った話ではなく、自分が属するコミュニティ全般の話だと思います。）これまで「和敬塾のアイデンティティ」と呼ばれてきたものは、社会的にそぐわなかったことが問題なのであって、アイデンティティを持つこと自体が問題なのではありません。だったら、塾生が誇れるような新しいアイデンティティを作ればいいのではないのでしょうか。それこそが真の和敬改革だと僕は思います。

では、現状乾寮生の多くが和敬塾に誇りを持てていないという事実がある中で、この先どうやったら和敬塾のアイデンティティを再形成することができるでしょうか。確かに、人間は一度思ったことをなかなか変えられないため、新しいアイデンティティの形成は容

易なことではないでしょう。しかし、条件さえ揃えば人の評価は変わりうると思うのです。

その条件とは、和敬塾の外部から、和敬塾を高く評価してもらうことです。先ほど、人の評価は周りの評価に大きく左右されるということを述べました。現在、寮の中に和敬塾に誇りを持っている人が少ないならば、おそらく和敬塾内部からプラスの評価を生み出すことは不可能でしょう。しかし、もし和敬塾の外部から和敬塾が高く評価されるのであればどうでしょうか。内部の人間も次第に外部の人間に同調し、和敬塾を高く評価するようになるのではないのでしょうか。

例えば、和敬塾生がまとまって社会貢献をし、その活動をメディアに取り上げてもらい高い評価をもらったりしたらどうでしょう。たとえその活動に自分が参加していなかったとしても、和敬塾内の活動が周りから高く評価されるということは塾生にとって嬉しいこ

とだと思えます。その積み重ねによって、塾生が和敬塾に対する誇りを再び持てるようになるのではないのでしょうか。

このように、たとえ一部の人々による活動だとしても、社会的に評価されうる活動を継続していき、実際に評価を受けるということが新たな和敬塾のアイデンティティの形成への第一歩だと思います。そしてその具体的な活動内容こそ、これからの和敬塾内で話し合うべき事柄なのではないでしょうか。

またもう一つ大切なことは、入ってくる新入生にいい印象を持つてもらおうということです。新入生はこれまでの和敬塾の経緯を知らないわけですから、和敬塾に対してプラスの評価を持つてくれる可能性が大いにあります。そのためにも和敬塾の第一印象となる新歓行事をますます有意義なものにする必要があると考えます。

乾寮では、他寮ほど新歓が厳しくなくなってきたため、第一印象はそれほど悪くはないのではないかと考える人もいるかもしれません。しかし、「厳しくない」や、「悪くはない」といった評価は「マイナスイメージではない」というだけであって、プラス評価ではありません。新歓をやるのであれば、新入生だけではなく先輩も含め、誰しもがプラスの評価のイベントだと言えるようにしなくてはなりません。特に、以前までは新歓は面倒で大変なイベントであったため、先輩方の中にはそのイメージが根強く残っているように思われます。先輩方がそういう認識で新歓を行っている以上、新入生にも新歓は面倒で大変なものだというマイナスイメージが伝わってしまいます。このままでは、どのような新歓を行ったとしても、入ってくる新入生にはプラスのイメージを持つものとして認識されにくいでしょう。先輩の和敬塾に対する印象が後輩に伝わって

いくという自覚を持って、新歓を行う必要があるでしょう。

ここで書きたかったことは、ただ和敬塾のことだけではありません。良い環境とは何か、またどうやらそのよい環境を構築できるかを考えてまとめたつもりです。どんなにいい設備や人材がいても、ちょっとした人間関係の傷や方向性の相違で居心地が悪くなってしまうとまりがなくなってしまうたりするものです。そんな時にちよつと考え方を変えれば状況は変わるものだと思います。和敬塾はその典型に思えてなりません。個々の要素を見ていけば和敬塾は他の寮に負けないくらいいい環境だと思います。ただ中にいる人々の認識がマイナスの方向に働いているがゆえに、その環境が十分に利用されていないのでしょうか。これまでの「伝統」から解き放たれるだけではなく、これか

ら先を見据えて和敬改革を続けていくべきなのではないでしょうか。

それでは、この文章を通じて寮生の皆さんとさらに意見を交わせることを願って終わりとします。

※

久しぶりに福岡に帰って 井手孝信(北寮1年)

ゴールデンウィーク以来とはいえ久しぶりに地元に戻ってみると、思った以上に落ち着いた。まだ帰ってきてから数日しか経っていないが、今回地元に戻って多くの人と会ったことは、東京で送っていた生活を振り返ったり、(あえて?) 考えることを放棄していたこれからの自分自身の人生の指針を少しでも考えたりする良いきっかけとなった。

ここ5日間の福岡での生活で一番教訓となったことは「自分でつけた優先順位の高いものを大切にしながら行動しなければならない」ということだ。「自分にとって〇〇は大切だ。」と言うならば、それを大切にしていると言うにふさわしい行動をしなければ、いずれ大切にしようとしていたものが自分から離れていき後悔することになるのだろうとかなり深く思った。だから、「大切なもの」を「大切なもの」として自分の中に維持し続けるために、大変なことだが、優先順位が低いものは自分から遠ざけていきたいと思う。とどのつまり僕は、口だけ人間にはなりたくないのだ。 終



論考 豊かさとは何か——YAP島プログラムを終えて 草原 広樹(乾寮六期)

二〇一六年二月、私は太平洋に浮かぶ小島、ミクロネシア連邦のヤップ島へ旅立った。大学を通じた短期留学プログラムに参加するためである。テーマは「豊かさとは何か」。二週間に満たないプログラムであったが、異文化のコミュニティの中に入れてもらい、生活を共にさせてもらうことは本当に貴重な体験であり、毎日が驚きの連続だった。早くもプログラムを終えて半年経ったので今回は振り返りを兼ねて、その報告をしたい。もしこれを読んでこのプログラムに参加したいと思ってくれる仲間がいると大きな喜びである。

そもそも、ミクロネシア連邦のヤップ島(以下 YAP)をご存知の人が果たしてどれくらいいるだろう

か? 私も偶然本プログラムに出会って初めて知った。しかし、その文化と美しい自然から、NHKで「神秘の島」あるいは「楽園」という言葉で特集されていたりしてご存知の人もいるかもしれない。また常夏の島でダイビングスポットとしても有名なため、マリンスポーツをしている人も知っている場合が多い。以下簡単に紹介しよう。

YAPに行くためには、リゾート気分を味わうために訪れる多くの旅行者と共に一度グアムでトランジット(一度アメリカに入国し、すぐ出国する)し、週にたった二本しか就航しない飛行機に乗り込まなければならない。YAPは人口一万に満たない小さな島であるから当然かもしれない。言語はYAP語である。これは

単純に考えても、世界に一人しか話せる人がいないことになる。しかし小学校から英語教育が重点化されており、高学年以上であれば流ちょうに話すことができるため、コミュニケーションに支障はない。

気候は年間を通して摂氏二五度前後で、日陰だと海風が心地よい。植生が本当に豊かで、コナツツやマンゴーが自生している。また文化人類学的には、昔パラオで切り出され運ばれた、贈与経済の象徴にもなっている石貨が存在しているので有名である。しかし豊かな自然はあるものの、如何せん島嶼経済で人材や資本がハワイやグアムに集中するため、経済的には豊かではない。日本人にとっては海外だが、伝統色が色濃く残っており、村長（チーフ）制度が残っている村に入れてもらったことは、「グローバルだが非常にローカル」といえる不思議な体験であった。

※ミクロネシア連邦は四つの州から構成され、YAPはその一つの島に過ぎないのだが、歴史的に異なる文化を各

自持っているため、今回はYAPと記す。

YAP島プログラムの概要

今回のプログラムの概要について説明する。そのためにまず本プログラムを長年主導してきた高野孝子教授を紹介したい。高野先生は環境教育の分野の専門家であり、大学で教鞭をとる傍ら、NPOの理事をしている。主に子どもや大人に自然体験の機会を提供すること、環境について考えることができる人材育成を目指す。ここには彼女の信念があり、それは「人として大事なことは自然の中で身につく」というものである。「人として大事なこと」というのとはとも広範だが、それゆえに普遍的であるかもしれない。自然環境は思い通りにコントロールできないため、自身が変化し、適応、対応することを迫られる。したがって自然環境に身を置くことは、自分を知り変化をする

うえて有効であると私も考える。

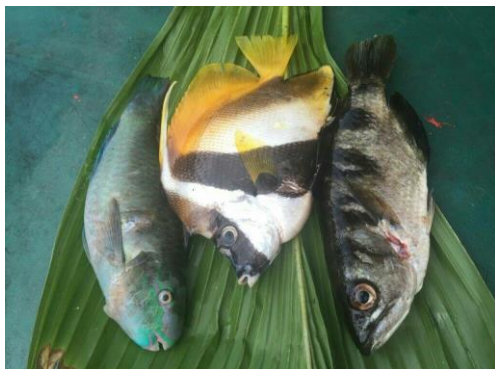
今回のプログラムの概要に話を戻すと、大きな柱は二つあった。一つはYAPという、グローバルだが非常にローカルな地域で生活することで、人と自然との関係性を再考すること。そして二つ目は異文化に触れ、自身の生活や価値観を相対化する事であった。以後この二つの事柄について体験と考察を述べる。

日本との違い

プログラム参加者は先生を除けば自分を含め男子三人、女子一人の超少数人数であった。YAPに十一ある村の中でも、特に伝統を守っている村とそのコミュニティに入れてもらい、ゲストハウスに泊めてもらった。八十人ほどが暮らす村で、まず村の人々に生活を教えてもらうことになった。それはまず木や枝を切り出してシャワーの囲いを作ったり、ココナツの葉でバス

グを作ったり、食材を周囲から探しだし、調理することなど、一見単純だが生活の知恵が詰まった自然との付き合い方だった。

YAP島では男女がそれぞれ別の仕事を任されている。かつての日本の規範とおおよそ同じで、男性は力仕事や漁、会議、女性家事、育児である。しかし日本との違いの一つには、家族の概念が広いことがある。日本で家族というと、基本は核家族を意味し、祖父母と同居していればそこに彼らが加わって二世帯になるのが私達の常識ではないだろうか。だが、YAPでは日本で言う親戚もすべて家族に含まれる。だから「あなたの家族は何人ですか？」と聞くと、「うーん……Manny（笑）」みたいな答えが返ってくる。婚姻は基本的に隣の村など別のコミュニティ間で結婚するが、全体で一万人にも満たない島なので、あちこち親戚だらけである。そして彼らは食べ物のおすそ分けなど助け合いの精神にあふれている。だから私達の食卓にはいつ



(図1) 漁の収穫と、ある日の食卓。日本では見慣れない食材が目立つ。かつて日本が占領していた影響で「sashimi」と言い、醤油とライムで食べる。主食はライスではなくタロイモ。買ったものはない。

もおかずがたくさんあった。もちろん漁がうまくいったりすれば、三等分して二つの親戚に配る。ホームステイをするということは、その輪の一つに加えてもらうことに他ならない。心理学者の河合隼雄の言葉を借りれば、YAPは非常に強い母性主義の社会と言える。また、「本当の豊かさ」に關係する話なのだが、YAP

Pの大きな特徴は、お金が単にお金でしかなく、貨幣のように「万能」ではないことである。というのは、新鮮な魚やフルーツは身近な自然にはあるが、それを販売する市場がないからである。またYAPでは狭いコミュニティゆえに、経済的な格差がさほど人間関係を規定しない点もある。お金を稼げるのも魚が取れるの

と同様に、共有されるべき能力の一つとみなされる節がある。例えば日本だと、祖父母がこっそり孫にお小遣いを上げる場合はともかく、家計をシエアする、という考え方はないだろう。私のホームステイ先の家族はお父さんがグアムで働いているため、経済的に裕福であつた。（電気が通っており、Wi-Fiが飛んでいて、自動車と東芝の冷蔵庫があつた）しかしステイ先の母は裕福なために気取っているわけでもなく、少し遠出する時には車を出し、ガソリン代も負担していた。しかしお父さんが漁や農作業をしないために、ココナッツや魚介を取ることができない。そこで上記のような助け合いの精神が発揮される。今は物や情報が入ってくるのでお金もより重要になってきている。一番使うのは学校と病院である。私立の学校だと月百ドル程度と聞いたが、公務員の給料が時給一ドルのYAPではとても厳しいと言わざるを得ない。

こうした日本との違いは、やはりコミュニティの大

きさ故なのだろうと思つた。また経済が村全体に波及する仕組みがないので、経済力が各家庭で異なるのも、かつて国全体が高度経済成長を遂げた日本と異なる。古くからの文化と現代の文化が混じっているため、トイレがある家庭とない家庭がある。とはいえ、トイレがないことが一概に問題なのではなく、この場合便器はあつても、下水処理場がないせいで、かえって自然に悪影響を与えることが問題となつている。YAPは今、トイレのみならず全体的にこうしたかつての伝統から近代化を遂げる過渡期にある。法制度に関しても同様で、例えばチーフ制度が残る傍ら、裁判所や各省庁が存在している。難しいのは、近代化の問題点や限界がすでに先進国では顕在化していることだ。したがってYAPにはより新しいビジョンが求められることとなり、それはある意味日本も同様であると気がつく。しかし今日YAPも単なる「楽園」の島ではない。海面上昇、異常気象などの環境問題にも晒されている。

ここでは漁獲量の激減の問題を取り上げたい。彼らの漁は船で大型網を展開するものではなく、基本は小さな網か銚を使って漁を行う。しかし近年彼らは漁獲量が減ったことを受け、禁漁区を設定したのである。私は正直、日本や中国を含む先進国の乱獲が明らかに原因であるから、彼らの取り組みはあまり意味がないのではないかと思っていた。しかし実際にその海域の調査に同行させてもらうとやはり魚が少し他の海域より多く、気のせいかなサンゴ礁も一層色鮮やかに見えた。何より彼らのヒューマンスケールでの当事者意識とプライドには感銘を受けた。日本の地域の町おこしに通ずるものを感じた。

ローカルな村で見たグローバルな事象

このような村だから、人々はとても穏やかで時間はゆったりとしている。勿論コミュニティの中での仕事



(図2) 男性が漁をするときに使う伝統的なメンズハウス。一般住居ではない。海面上昇の被害に合い移転を迫られるものも。

はあるから、暇をしているわけではない。ただ日本のようにせかせかしていないし、家族や友人関係をとっても大事にしている。彼らにとって最も大きな存在は家族であり、YAPである。自分にとって大事なものを大事にできていることは本当に素晴らしいことだと思う。YAPは社会の仕組みがとてもシンプルで見えやすい。環境こそ日本と大きく異なれど、人が暮らす「社会」の在り方を考える上では縮図として参考になる。

しかし今は近代化が進行中で、負のスパイラルが機能しかけている。例えば学校へ行かせるお金を稼ぐために、お母さんも働きたしとしよう。そうすると従来の生活Ⅱ家事に充てる時間が短くなり、地元食材を使った食事を作れなくなる。主食であるタロイモの場合、調理に一時間以上かかり、冷蔵庫に入れないとすぐに傷んでしまう。すると主食がライスになり、さらに忙しくなれば炊く時間も無くなってラーメンになる。(サツ○ロイチバンはとても有名で、かつ愛されていた)

しかし健康に良いのがどちらかは、火を見るより明らかである。島の外から輸入するものは、運送コストが高つくのでもとても高い。生活費を稼ぐために始めたものが生活費を稼ぐものになってしまう。食事はその地域の文化が最も顕著に表れるということを肌で感じた。そもそも利便性というのは、自分にとって大事なものを最大化するための手段であるはずである。今やカップ麺は非常に多彩だし、確かにおいしい。しかし地元の食材を使わずに遠くからわざわざ運ばれてきた缶詰やカップ麺を食べるのは、やはりどこか間違っていないだろうか。

大きな時代の変化の中で

YAP島の歴史は古いが、二十世紀は列強の占領下にあった。第一次世界大戦を機にドイツから日本に統治が変わり、日本が敗戦するとアメリカがとって代わ

った。戦後七十年を迎えた二〇一五年に天皇陛下がパ
ラオを訪問された意味はここにも同様にあった。今で
も日本軍の塹壕やマシンガンや爆弾の後のクレーター
がそのまま残っている。(一方でアニメのワンピースやブ
リーチが一部学生に人気だったりする。)

すでにアメリカから独立はしたものの、経済的には
アメリカの補助金に依存している状況が続いている。
その補助金の打ち切り期限はもう十年を切った。こう
した状況を受けて、いかに外貨を稼ぐかという話をし
ていくと、今ある観光資源をいかに生かすかという議
論にシフトしてゆくことになる。そこにある大国が登
場する。「百年借款でリゾート開発しませんか? 悪い
ようにはしないから」という話を持ち掛けるのは、他
ならぬ中国である。ここでも、自分たちが変化する時
代の渦中にいることを改めて知ることとなる。

果たして、一体どうするのが彼らにとって幸せなの
だろうか? 文化人類学も観光を大きなテーマとして

扱っている。YAPの事例を一つ例として取り上げた
い。「YAP DAY」という、YAPで最大級の祭典が
ある。YAPは石貨と共に、その伝統的な衣装で有名
である。というのも下世話な話だが、女性がトップレ
スなためである。ハイビスカスを原料にして緑に染め
られたグラススカートに、全身にココナッツオイルを
塗る。これは当初YAPの伝統的な唄、踊りなどを継
承するための場であった。しかし、規模の拡大と共に
観光客が訪れるようになり、コミュニティにおいて儀
式として機能していた舞踊がカーニバルの見世物とな
り、商業化していつている。参加する若者もそういつ
た本来の精神性よりも、純粹な娯楽としての祭典を楽
しむように変化している。だが、村により状況は異な
るらしく、私達が訪ねた村は保守的で観光客に対する
パフォーマンスは行っていないかった。

上記では変化する様子に否定的な視線から述べたが、
こうした共同体の伝統は必ずしも固定的なものではな

い。例えばハワイは様々なダンスで有名だが、始めからあのようなものだったのではなく、合衆国への統合と共にハワイのアイデンティティが問われ、現在の評判と完成度を得るに至った。今日純粋なハワイアンは少ないが、白人でも自身をハワイアンだと認識する人が多いことは予想がつくだろう。開発と保全とは難しいジレンマであるが、変化し続ける時代に対してひたすらノスタルジーに浸ることは避けたいものである。

また先進国こそがこうした困難を抱える国と協力できればよいが、もし自分が後進国側であればどうしたいか、ということを主体的に考え続けることが重要ではないだろうか。

今振り返って思うことは、YAPに行っただけで何かが変わることはありえない、ということである。そういう意味では、自分は今変化の過程にいると思っていて、自身の気持ちが一クリアになったと感じているし、将来を考える機会にもなった。今私にとって関心があ

るのは、いかんして人の健康を支えるか、ということである。YAPでは穏やかな時間が流れていて、皆が助け合える人間関係が作られていた。ハーバード大学の有名な幸福度研究において、人生の幸福度を決定する最大の要因は、親密な人間関係にあることが分かっている。理論ではなく実感として、そのことをこのプログラムは教えてくれたように思う。自分が将来どんな企業でどんな風に働くかまだ見えず正直焦るが、健康や安心を届けられる仕事ができたらと思う。日本はうつ病などメンタルヘルスの問題が依然として深刻だが、人間関係が維持され、健康でいられる社会こそが私は本当に豊かな社会だと思う。「豊かさとは何か」という問いはより良い社会のあり方を構想する為に必要な問いであると思うので、これからも考え続ける。

乾



(図3) YAPで作ったハイビスカスの首飾り(上)とマングローブガニを捕った(ポーズをとる)筆者(下)。

隨筆 俺の駅——北綾瀬駅——

中村 慧(乾寮第四期)

この記事は、私が学部時代に所属していた、鉄道研究会の卒業に際して寄稿したものを加筆・修正したものです。卒業するメンバーが各々のお気に入り駅を、「俺の駅」として紹介するという形をとっていて、私は今年から一人暮らしをしているマンシヨンの最寄りである、北綾瀬駅について紹介しました。それでは、気楽に読んでみてください。なお、写真は特記するもの以外、全て私が北綾瀬で撮影したものです。

北綾瀬駅——盲腸線の端の駅——

基礎データ

- ・開業年 ……一九七九年
- ・所属事業者…東京地下鉄（東京メトロ）
- ・所属路線 ……千代田線
- ・駅番号 ……C30
- ・駅の形態 ……高架駅。一面一線。
- ・停車する種別…各駅停車。



(図1) 北綾瀬駅西側出口 (2016.04.17)

・概要 …一九六九年十二月に、綾瀬車庫への車両入出庫を取り扱う信号所として開設された。この時点で既に、需要が増加した場合にはこの地に新駅を開業させる計画が存在していた。そして、一九七九年十二月二十日に北綾瀬駅として開業した。二〇〇二年にはホームドアの稼働が始まっており、また二〇〇四年四月一日をもって帝都高速度交通営団(営団地下鉄)の民営化に伴い東京メトロの駅となった。

・駅構造…綾瀬車両基地への引き込み線と環七通りが交差する地点の南側に存在する高架駅で、線路は複線だがホームが設置されているのは西側の線路のみである。ホームの有効長は綾瀬―北綾瀬駅間運用の三両編成分である。二〇〇二年三月から開始されたワンマン運転対応のため、ホームドアが設置された。環七側の一箇所のみにある改札口を出て左右にそれぞれ出口がある。



(図2) 横断歩道橋から眺めた車両基地。左が北綾瀬駅側で、
右が車両基地奥側。(2016.04.17)

一押しポイント

(イ) 綾瀬車両基地の存在

北綾瀬駅の最大の特徴は、隣駅である綾瀬駅とは逆方向に存在する綾瀬車両基地だろう。北綾瀬駅からは徒歩五分ほどで到達する。もともと北綾瀬駅が存在する千代田線北綾瀬駅支線は、綾瀬駅から本車両基地への引き込み線であり、本支線の主役ともいえる施設である。綾瀬車両基地は綾瀬検車区と綾瀬工場から成り立っており、その広大な敷地は東京地下鉄としては最大である(約一四万²㎡)。この車両基地が担当する車両は、有楽町線や副都心線、南北線、埼玉高速鉄道、小田急電鉄というように、千代田線以外のメトロ車両や他会社車両も含まれる。そのため次頁でも述べるが多彩な車両を見ることができる。なお、本車両基地では毎年公開イベントが行われ、多数の来場者が訪れている。



(図3) 北綾瀬駅に入線する小田急 60000 形「MSE」。(2016.04.17)

(ロ) 他路線車両との遭遇

さて、前項で少し触れたように綾瀬車両基地が隣接する影響で、北綾瀬駅を通過する車両は多種である。上の写真に示したように「メトロさがみ」や「メトロホームウェイ」に運用される小田急六〇〇〇〇形「MSE」をはじめ、綾瀬工場での検査のために有楽町・副都心線の七〇〇〇系や一〇〇〇〇系、南北線の九〇〇〇系や埼玉高速鉄道の二〇〇〇系などが見られる。余談であるが、私が三月から居住を開始したマンションが、北綾瀬駅のすぐ横にあり車両基地への引き込み線を望む絶好のスポットとなっている(先頁の画像はマンション廊下から撮影したもの)ことも、この駅の一押しポイントの一つであることを加えておく。

（ハ）今後の発展

現在、北綾瀬駅では利便性の向上のために拡張工事を行っている。この拡張工事によって、十両編成対応できるホーム有効長とそれによる代々木上原方面への直通列車の運行を可能にし、また出入口を新たに二

か所設置することを目指している。ただし工事の完了予定は平成三〇年となっており、私は順調にいかば修了しているためこの恩恵を受けることは叶わないことになるが。



現在の北綾瀬駅



改良後の北綾瀬駅(イメージ)



(図 4)

上：拡張工事のイメージ図。

(東京メトロ HP ニュースリリースより)

下：拡張工事が行われている箇所。

(2016.04.17)

「俺の駅」として寄稿した記事は以上です。以前乾文學に記事を書いた時も、交通系の話題でしたが、またしても交通系で少しディープ目に書いてみました。乗り物好きからすると、東京はとも興味深い街です。今年入寮した八期生のみなさんも、「ブラタモリ」の様に東京散策をしてみると、東京の面白い面を見つけられるかもしれませんよ？あと、車好き電車好きなどの方がいらつしやいましたら、私が乾を訪れた時にでも語り合いましょう。乾

参考資料

『鉄道ファン 2004年9月号』（交友社）

『あだち広報 第1679号（2014年2月25日）』（足立区広報誌）

「東京メトロHP ニュースリリース」（2016年4月17日閲覧）

http://www.tokyo-metro.jp/news/2014/pdf/metroNews20140228_kitayase.pdf

「会津SLの部屋 東京メトロ綾瀬工場綾瀬検車区」（2016年4月17日閲覧）

http://www.geocities.jp/aidusl/metro_ayase1.html

脱衣所で衣服をすべて脱ぎ、風呂道具を持って浴室に入る。浴室に入ったらまず、空いているシャワーと風呂椅子を探し、その椅子に座わってシャンプーを使い、頭を洗い、タオルで体をゴシゴシ。洗顔して髭が伸びているなら剃刀で落とす。一通り体を泡に包んでそれを洗い流してから、やっと湯船に入る。一連の動作に早くても五分以上はかかり、浴室に入ってから湯船に浸かるまでにはやや時間を要する。

以上が和敬塾のお風呂に入るときの湯船に浸かるまでの工程であるが、私が実家に帰った時の「温泉」の入りは随分と異なる。

脱衣所で裸になるところまではもちろん同じである

が、浴室に入ってから最初の行動が決定的に違う。入ったらまず桶を手に取り、桶に浴槽のお湯を満たし、その桶のお湯を体にかける動作を三四回繰り返し、かく体の汗を洗い流す程度で、さっそく湯船に入る。寮のお風呂の時のように、手ぬぐいやタオル、石鹸を使って体を泡まみれにして、洗い流してから入浴するわけではない。浴室に入ってからお湯につかるまでせいぜい一分たらずである。そして湯船に気の行くまで浸かったら——私はだいたい一時間は浸かる——、やっと洗い場へと向かい、泡まみれになるのである。泡を洗い流したら、再度湯船に浸かり体を温め、最後に冷たいシャワーを浴びるか、水風呂に入ってから浴室

をでる。

このように、寮のお風呂の入り方と、温泉の入り方とを比べてみることで、二つの行動が何を目的としているかがわかる。つまり、寮のお風呂に行くという行動の目的は体を洗い流しキレイにすることであるが、温泉に行くのは湯船に浸かることを目的としている。

前者は体を洗ったついでに湯船に入り、後者はお湯に浸かったついでに体も洗うのである。もしも温泉に行く理由が、体をキレイにすることだけであつたら、湯船に一時間も浸かる意味は見いだせないし、そもそも洗うだけが目的ならば、わざわざ外出までして温泉に行かなくとも、家や寮のお風呂に入れば十分である。

また、湯船に入るまでの過程を考えれば、銭湯は寮や家の風呂に近いといえる。「温泉旅行」という言葉は聞くが、「銭湯旅行」という言葉を耳にしたことがないのはこのためかもしれない。体を洗うだけのために時間

とお金を費やして旅行には行かないであろう。

では、移動にいくらか時間をかけ、ましてや旅行に出てまで温泉に行き、「温泉に浸かる」ことで私たちは何をしようとしているのであろうか。

私は八ヶ岳の麓——山梨と長野の県境——にある北杜市というところの出身だが、北杜市は温泉に恵まれており、実家から十分以内の範囲に温泉が三つはある。家から温泉が近いものだから、小さい頃からよく温泉に行ったもので、今でも実家に帰れば、週に二回は温泉に行くほどである。そんな北杜市の中に、「増富ラジウム温泉」という温泉通の間では有名な温泉がある。その温泉のウェブページ（＊１）に「世界有数のラジウム含有量を誇る増富温泉峡」と表示されているように、温泉にラジウムが含まれていることを売りにしている。これが私たちを温泉に惹きつけものであり、得ようとしているものの一つである。ラジウム温泉は「尿酸か

ら尿を出し、痛風や神経痛に効果がよい」とされている。(＊２)増富の温泉のように有名な温泉でなくても、温泉には必ず泉質とその効能を書いた表が脱衣所にある。これは「温泉分析書」といい、温泉法の規定により揭示が義務づけられている。基本的に入浴者がこれを細部まで見ることはないと思うが、温泉には水を沸かしただけのお湯にはない、何か身体に良さそうなものが含まれており、それが冷え性や腰痛、痛風などに効果があり自分の健康に良さそうなのだと皆認識している。私たちが温泉に行くことで得ようとしているものは、この何か身体に良さそうな効能が一つである。

Google 画像検索で「日本 温泉」と「北欧 温泉」を検索して見比べてみると、二つの地域で同じ「温泉」——どちらも英語で *hot spring* と表記される——でも明らかにその性質が違うことに気付く。北欧の温泉の画像を見ると、まず水着を着用して男女が同じ空

間にいることが分かる。そして、浴槽が小さな湖かと思ふくらい大きく、浴槽内ではまるでそこがビーチであるかのように仰向けに寝ている人もいれば、うつ伏せになっている人もいる。また寝転がっている人以外は、立っているか泳いでいるかしており、とにかく人が多い。対して日本の温泉の画像は、北欧のものと比べると浴槽の小ささとそこにいる人数の少なさが目につく。そして「混浴温泉」と検索をかけない限りは男性だけ、または女性だけの写真、そしてたまにサルが温泉に入っている画像が出てくるだけである。人が写っている画像のいずれも入浴者は尻を浴槽の底につけて座っている。両者の違いに注目すると、北欧の温泉は「レジャーとしての温泉」、日本の温泉は「くつろぎの場としての温泉」と定義され区別できる。日本の温泉で人が泳ぐ姿を見ると私たちは不快感を抱くが、これは、そこがくつろぎの空間だからである。もし日本の

温泉が温水プールのようなレジャー施設の延長線上にあるならば、泳ぐ行為に対してそれほど不快感は示さないだろうし、むしろ泳いだり遊んだりすることがその空間の使用目的になるだろう。日本の温泉がくつろぎの空間であるからこそ、私たちは泳いだり、騒いだりすることなく、湯船に座り、ゆったりとした時間を過ごすのである。レジャーのためではなく、「くつろぎのひと時」を求めて私たちは温泉に行くのである。

私たちは時間とお金をかけてわざわざ温泉に行く。それは体をキレイにすることが目的ではなく、身体に良さそうな効能とくつろぎを得ることが目的である。体を洗うのはついでに過ぎない。人によっては、温泉に行っても体を洗いお湯で温まったら二三十分もしないうちに出てしまう人がある。少し勿体無い気がする。もちろん温泉の入り方はそれぞれの自由ではあるが、効能を得るためにも、そしてゆったりとくつろぐため

にも、ゆっくり時間かけて温泉に入ってほしい。ただし温泉が混んでいない時に行くべきである。

浴槽に注がれるお湯の音を聞き、静かに揺れる水面を眺めて、浴室の湯気と湿度を肌で感じながら、たまには温泉に浸かって日常を忘れてみるのはどうだろうか。

東京で暮らしていると実家の温泉が恋しくなる。幸いにも通学のために満員電車を使う必要はなく毎日歩いて大学まで行っているが、それでも人の多さに疲れてしまう。日々の生活が特段忙しいわけでも辛いわけでもないが、ゆったりとした時間——時間を気にしなくてもいい時間——が欲しいものだ。そして、その時間くらいは頭を空っぽにしたい。勉強とか課題と人間関係とか、あとは経済や国際関係など、普段自分の頭

を悩ませているもの、そんなことは一切忘れて露天風呂に浸かりながらぼーっとしたいものだ。健康に良さそうなお湯に浸かりながら、ゆったり静かにくつろぎたい。

ああ、温泉に行きたい。

乾

*1 <http://masutoninoyu.com/>

*2 古川 颯 『温泉学入門 有馬からのアプローチ』

（関西学院大学出版会 二〇一四年）三十一頁



皆さんは素数というものをご存じだろうか。そんなもの知ってるよとか、なんだそれはうまいのか？ など様々な反応があるだろう。そのため始めに素数とはいったい何なのかについての話をしようと思う。

素数の性質

素数とは「自然数かつ正の約数が1と自分自身だけである数（ただし、1は素数ではない）」のことである。このようにして日本語で素数の性質を書いてみたが、イマイチ感覚が掴みにくいだろう。したがって、実際にどんな数が素数なのかを考えてみようと思う。まず、大前提として素数は「自然数」であるから自然数全体

を考えれば済む。

ここで自然数は以下のように定められる。

$$\mathbb{N}^+ := \{1, 2, 3, 4, 5, \dots\}$$

次に自然数 \mathbb{N}^+ から好きな数字をとってこよう。例えば、3や8をとってきたとする。それではまずは、3が素数であるかどうかを確かめよう。これを確かめるためには3の正の約数を調べればよいはずである。3がもし1より大きく3より小さな自然数で割り切れたのなら3はその自然数を正の約数に持つが、そんなことはないことにすぐ気づくだろう。よって3は正の約数が1と自分自身だけである数であると言え、素数である。次

に ∞ が素数であるかどうかを確かめよう。やり方は ω の時と同様である。すると ∞ は1より大きく ∞ より小さな自然数 ω で割り切ることができることが分かる。よって ∞ は正の約数に ω を持ち、素数の定義に反する。したがって ∞ は素数ではない。

このように実際に例をあげてみると素数がどんな性質を持つ数なのかわかるだろう。だが、例の中で用いたやり方で素数かどうかを判定するのはあまり賢いやり方ではない。なぜならば、自然数 \mathbb{N} からとつてくる数が大きくなればなるほど、どの自然数で割り切れるかどうかを判定するのは困難になるからである。(勿論、偶数を除いてだが) 例えば、319039293821は素数ではない。なぜならば、21517で割り切れるからである。しかし、これを調べるのは大変な事である。この程度の数ならパソコンを使えば一瞬だが、手で調べるとなるかなりの時間がかかる。ではもっと効率のいいやり

方はあるのだろうか。実は今のところこれより簡単で精確なやり方は存在しない。素数の判定法はいくつか存在するが、必ず誤差が存在してしまい精確には判定できない。もし、誤差の生じない効率的な素数判定法を見つけることができればフィールズ賞のものであろう。

さて、素数判定法のことはいくらにしても、次は素数のもう一つの重要な性質について考えることにしよう。その性質とは「無限性」である。簡単に言えば、素数は無限に存在するということである。無限性については感覚的に分かるであろう。そのため今回はそのことを簡略的に証明してみようと思う。

「素数の無限性の証明」

自然数の中からある程度自明な素数をすべて持つてくる。例えば、2,3,5,7,11,13である。

ここでこれらすべての素数を掛け合わせ、1を加えてみ

ることにする。

$$2 \times 3 \times 5 \times 7 \times 9 \times 11 \times 13 + 1$$

この自然数は、自明な素数 2, 3, 5, 7, 9, 11, 13 では割り切れることはできない。したがってこの数は、非自明な素数であるか、非自明な素数を約数に持つ合成数のどちらか一方である。よって自明な素数から非自明な素数を発見することができたので、この操作を繰り返していけば無限に非自明な素数が発見できる。

以上より素数は無限に存在する。

[Q.E.D.]

思い付きで証明してみたので合っているかどうか分からない。多分合っているだろうと思う。(大学の友人にも聞いてみたが、概ねいいと言われた。)このように数学的にも素数が無限に存在することは証明できた。

今回の証明では、敢えて背理法を使わずに直接証明を用いたので、よく考えてみれば必ず理解できるはずである。もし、理解できなくても焦る必要はない。一つ一つ言葉の意味を丁寧に追いかけていけば辿り着けるはずである。

さて、これで素数が無限に存在することは理解していただけただろう。ではなぜ、素数が無限にあることが重要なのだろうか。それは、次に記すゼータ関数というもので非常に重要となるからである。

ゼータ関数

ここからは素数から少し離れてゼータ関数というものを取り上げる。読者のほとんどが「なんだそれは!」と思っているだろう。しかし、これを取り上げるのはきちんとした理由がある。それは、この投稿をすべ

て読んだときに繋がるので、それまで待つてほしい。
最初はある程度飛ばして、後から見直してもらっても構わない。

では、これからゼータ関数の話をしていこうと思う。
ゼータ関数とは、次の式で表される関数である。

$$\zeta(s) = \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n^s} = 1 + \frac{1}{2^s} + \frac{1}{3^s} + \frac{1}{4^s} + \dots$$

ここで s は 1 以上の実数としている。

この式を見ていくと、 $s=1$ であるとき、次のようになる。

$$\zeta(1) = \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n} = 1 + \frac{1}{2} + \frac{1}{3} + \frac{1}{4} + \dots = \infty$$

これは特別に調和級数と呼ばれ、受験でも一度は目にしたことはあるだろう。注目すべきはこれが無限大に

発散することである。なぜ無限大に発散するのだろうか。それをこれから示していこうと思う。これからは、紙とペンを用意していただいて実際に試してみてほしい。

「調和級数が発散することの証明」

$$\zeta(1) = \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n} = \frac{1}{1} + \frac{1}{2} + \frac{1}{3} + \frac{1}{4} + \dots$$

$$= \frac{1}{1} + \frac{1}{3} + \frac{1}{5} + \dots + \frac{1}{2} \left(\frac{1}{1} + \frac{1}{2} + \frac{1}{3} + \frac{1}{4} + \dots \right)$$

$$= \frac{1}{1} + \frac{1}{3} + \frac{1}{5} + \dots + \frac{1}{2} \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n}$$

$$= \frac{1}{1} + \frac{1}{3} + \frac{1}{5} + \dots + \frac{1}{2} \zeta(1)$$

$$\left(1 - \frac{1}{2}\right) \zeta(1) = \frac{1}{1} + \frac{1}{3} + \frac{1}{5} + \dots$$

これを分母の 3 の倍数, 5 の倍数…… (素数の倍数だけ) と続けていき, その数で全体を割ると次のように変形できる.

$$\begin{aligned}\zeta(1) &= \frac{1}{\left(1-\frac{1}{2}\right)\left(1-\frac{1}{3}\right)\left(1-\frac{1}{5}\right)\cdots} \\ &= \frac{2}{(2-1)} \cdot \frac{3}{(3-1)} \cdot \frac{5}{(5-1)} \cdots\end{aligned}$$

ここで, 各項は 1 よりも大きいので, $\zeta(1)$ の値はどんどんと大きくなることが分かる. また, 素数は無限に存在するので, $\zeta(1)$ は無限に大きくなることができ, 無限大に発散する.

$$\therefore \zeta(1) = \infty$$

[Q.E.D.]

多少大雑把に書いてみたが, そこは勘弁していただきたい. 証明が詳しく分からないという人もいるだろう. しかし, ここで重要なのはゼータ関数, 素数, 無限大の 3 つが結びついているということである.

ゼータ関数と解析接続

さて, さきほどの説明でゼータ関数と素数に何か関係性がありそうだということ述べていた. この節では次節に書く内容の一部分の用語をピックアップして話をしていこうと思う.

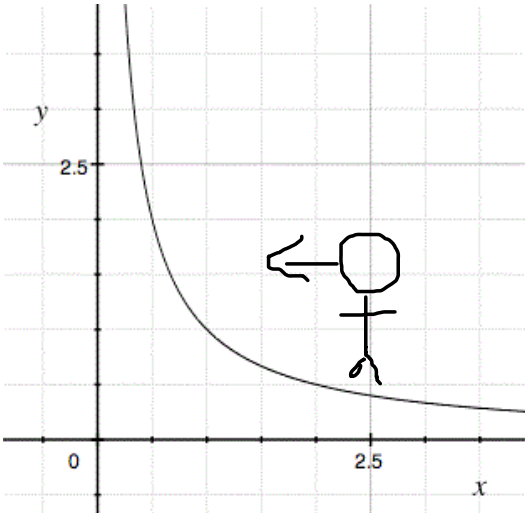
まずみなさんは, この節の名前の中に「解析接続」という新しい単語が出てきたために大変驚き, 身構えていることと思う. ただ, すごく簡単に言ってしまうと, 「解析接続」とは関数の定義域を実数の範囲から複素数の範囲に拡張することを言う. では, そうするこ

とで何がいいのかと疑問に思うだろう。しかし、これにはゼータ関数と無限大の結びつきを無くし、ゼータ関数と素数だけの関係にしてしまう大きな役割がある。では、ゼータ関数とよく似た形の $\sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n^s}$ のグラフを見てみることにしよう。

これは x を正の数からどんどん0に近づけていくと無限大に発散してしまう。まさに $\frac{1}{0}$ と同じ状況だ。

ここで図のように棒人間の視点に立って想像してみよう。棒人間の目の前には無限大という大きな山が邪魔をして向こう側に行くことができない。そこで棒人間はこの山を迂回することにした。その迂回する方法として「解析接続」というものを使うのだ。

同じことをゼータ関数にも施してみよう。ゼータ関数を「解析接続」というツールを使って、複素数の範囲に拡張する。するとゼータ関数は次のように書き換えることができる。

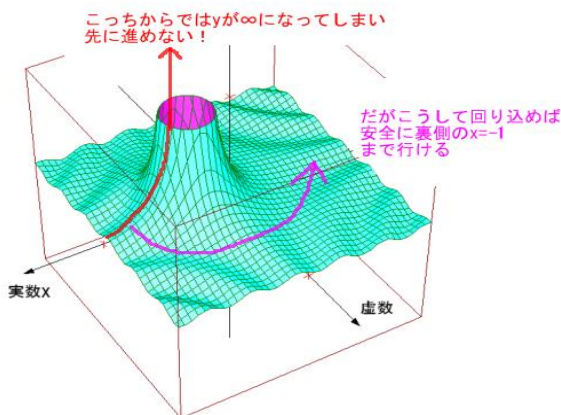


(図1)

$$\zeta(s) = \frac{1}{1-2^{1-s}} \sum_{m=1}^{\infty} \frac{1}{2^m} \sum_{n=1}^m (-1)^{n-1} \cdot \binom{m-1}{n-1} \cdot \frac{1}{n^s}$$

ここで注意してほしいのは、 s が複素数であることである。そしてこのゼータ関数のグラフを見ると迂回する様子が想像できるだろう。

こうして、虚数の軸をぐるっと回って、向こう側の世界を見ることができるようになった。次節では、いよいよ向こう側の世界に行ってみよう。



ゼータ関数とリーマン仮説

(図2)


画像元：<http://mathcentral.uregina.ca/qq/database/qq.09.08/h/lyric1.html>

<http://samidare.halfmoon.jp/mathematics/ZetaAnalyticContinuation/>

無限大の山の向こう側には、実はリーマン仮説という大きな世界が広がっている。その主張とは、「 $\zeta(s)$ の自

明でない零点^αは、すべて実部が $\frac{1}{2}$ の直線上に存在する。」である。多分読者の人は、この主張がほとんど分からないうだろう。僕にも詳しく説明することはできない。しかし、このリーマン仮説における零点とは $\zeta(s)=0$ となる s のことである。しかも、ありとあらゆる数学者がこの主張を調べていったところ、この零点はどうやら素数の位置との強い関係性があるそうなのだ。つまり、零点がどこにあるのかを決定するとそれに対応して素数の位置が決定するのである。これはまさしく、素数を判定する魔法の計算式である。 $\zeta(s)$ はコンピュータで簡単に計算でき、誤差も含まないので、完璧な素数判定法となるのだ。

しかし、この素数判定法は未だ確立されていない。なぜかというとリーマン仮説が証明されていないからだ。もし、リーマン仮説が証明されたらこの素数判定法も確立し、世界的な偉業となるであろう。

リーマン仮説は150年以上解かれておらず、ミレニアム問題として100万ドルの賞金がかけられている。読者諸君が100万ドルを手にしたいのなら是非とも挑戦してみよう。

※なお本稿では、証明には背理法を用いていないが、これには宗教上の深い理由がある。あまり深く関わらない方がいいだろう。

参考文献

Marcus du Sautoy 著 富永星訳『素数の音楽』（新潮社 二〇一三年）

人類にとって、未だに解決されていない謎はたくさんある。なぜ我々は生まれてきたのか、生きているとはどういう事か、神とはいったい何なのか……。

しかしその反面、世の中には必ず成立する法則や規則が存在し、その法則から先述の謎を解明する糸口が見えることがある。今回は熱力学の枠組みを定めている二つの法則を紹介し、最終的に生活観につなげていきたいと考えている。

今回の文章は、読者の対象が理系の大学生だけではなく、和敬塾ホームページの「乾文學」の箇所をクリックした全ての人が読みうることを考慮して、理系の用語に関しては厳密な定義は避け、大雑把な説明をする

に留めた。読者にはこの点をご了承願うとともに、厳密な定義を求める読者がいれば私か、その他の理系の学生に尋ねることを推奨する。

第一法則

我々は、ある程度小さいものであれば、物体に力を働かせてそれを動かすことができる。

加えられた力によって物体の位置が変化する。ここで、仕事（Work、 W と略す）という物理量を導入する。物体を始点 A から終点 B 迄動かした場合に、始点 A から終点 B までの経路 C 上の各点において力と移動した方

向に沿った微小なベクトルの内積を取り、経路 Γ 上の仕事はその総計と定義される。大雑把に言えば、物体を動かした距離と物体に加えた力を掛け合わせたものである。

よく学生が物理における仕事とは何か、その本質は何かと疑問に思うことがある。しかし物理の仕事 Δ とは高々先ほど説明しただけのものであって、それ以上に面白い話があるわけではない。仕事とは、非常につまらない物理量なのである。

だがしかし、ここから面白い。物体に力を加えて動かすと、力を加えて物体を動かした側(仕事をした側。以下労働者と呼ぶ。)は、疲れる。つまり物体に力を加えて動かせば動かすほど、労働者の、更に続けてしうる仕事の量が減少する。しかし、仕事をされた側、つまり力を加えられて動かされた側(以下では対象者と呼ぶ)は、これからしうる仕事の量が増大する。仕事によつ

て、将来的にしうる仕事の量が労働者から対象者側に移ったということである。

例えば、ばねを押し縮めていくと、力を加えたほうは更に力を加えて押し縮めるといふ仕事の量は減少するが、押されたばねのほうは押された分だけ押し返す能力が高まっていく。

ここで、労働者であれ対象者であれ、これからしうる仕事の量を「エネルギー」と定義する。労働者は仕事をする度に、さらに続けてしうる仕事の量、つまりエネルギーが減少していく一方、対象者は仕事をされるたびにこれからしうる仕事の量、つまりエネルギーが増大していく。しかも、両者側でもエネルギーの変化分は、なされた仕事量にそのまま等しい。これが非常に大事な結果であつて、仕事によりエネルギーは移動するが、労働者側のエネルギーと対象者側のエネルギーの総計は、仕事前後で変化しない。

例えて言うならば、仕事とエネルギーの関係は金融取引に似ている。例えば労働者Aが対象者Bに五六〇〇円支払った(≡仕事をした)とすると、労働者Aの所持金(≡労働者側のエネルギー)は五六〇〇円減少し、対象者B側の所持金は五六〇〇円増加する。しかし取引の前後では、お金は移動したものの両者の所持金の合計は変化しない。取引の中で、勝手にAの所持金が一〇〇〇円増えたりする事がないように、仕事によるエネルギー変化量は仕事量に等しいから、勝手にエネルギーを作り出すことも破壊することもできない。これが熱力学第一法則の言わんとすることである。

種々の用語の導入

「系」とは今自分が注目している部分であり、「外界」とは「系」の外側、宇宙全体である。先ほどの例で「労

働者」を系にとると、系が外界(対象者を含む宇宙全体)に対して仕事をした場合、系のエネルギーは減少し、外界のエネルギーは増加する。外界は系に対して同じ量の仕事をする能力を持っている。或いは対象者と労働者をまとめて系と捉えた場合は、外界に対して仕事はしていないため、系も外界もエネルギーが変化することはない。なぜならば、エネルギーは作り出すことも破壊することもできないからである。

次に、エネルギーの解釈を広めていこう。エネルギーは、系がこれからしうる仕事の量と考えられるが、エネルギーの増減は仕事のほかに、熱にも依存している。

仕事とは物体に力を加えて動かした際に、力と距離の積で定義される。ここで物体は空間中で明確な位置を占める必要があり、物体を構成する原子や分子はすべて仕事によって同じ様に力を受けて、同じ方向に移

動する。言わば仕事とは組織的な物理量である。

一方容器内の気体分子を考えればわかるが、すべての気体分子は乱雑な方向に動いている。この乱雑さを増していけば（＝熱を加えれば）、個々の分子の運動エネルギーが増大して、結果として系全体のエネルギーを増やすことができる。いわば熱とは乱雑さを示す物理量である。エネルギーは組織的にも（仕事によっても）、乱雑にしても（＝熱を加えても）変化させることができる。

エンタルピー

エンタルピー（enthalpy、 H と略す）とは、圧力一定の条件下で系に加えられた熱量に等しい物理量として定義できる。そもそも我々が暮らす地球上は、およそどこでも気圧は一定であり、ゆえに一定の気圧の下で

実験するのがほとんどである以上、定圧条件下での物理量という前提は使い勝手が良いのである。

例えば、ある変化が起こるとする。この際変化前に系が持っていたエネルギーが変化後に系が持っていたエネルギーより小さいとすると、何らかの形で系にエネルギーを加えなければならぬ。定圧条件下で熱を加える、つまりエンタルピーを増大させることによって変化が起きる。系のエンタルピーが増大しなければその変化が起きないため、いわゆる自発的な変化とは言えない。

逆にある変化に対し、変化前に系が持っているエネルギーが変化後に系が持っているエネルギーより大きい場合、系はエネルギーを変化に伴って吐き出す。だから定圧条件下では、この変化ではエントロピーは減少する。外界が排出された熱を受け取ることさえできれば、この変化は自発的である。

エンタルピーの限界

ここで、外部とエネルギーの授受を一切行わず、体積が一定の密閉された容器を考えよう。この容器は外部と熱・仕事のどちらの形態でもエネルギーを取引せず、密閉されているゆえに物質も取引しないという点で孤立した系、つまり「孤立系」である。

この容器内で線香に火をつけ、生じた煙自体を系と考える。この煙は膨張と言う仕事をして、容器内と言う外界に熱を伝えるから、外部にエネルギーを与えることによって煙自身のエンタルピーが減少することとなる。煙が容器内で拡散するのは自発的な変化だから、自発的な変化により系のエンタルピーは減少する。

だがしかし、系のエンタルピーやエネルギーは減少するものの、外界は系からエネルギーを供給されるか

ら、そのエネルギーやエンタルピーは増大する。外界では自発変化によりエンタルピーが増大するから、エネルギーやエンタルピーの減少が自発変化の原動力ではない事が分かる。

また、容器全体を系と捉えたらどうだろうか。外界（容器外全体）に対してエネルギーも物質も取引しないため、系全体のエネルギーやエンタルピーは全く変化しない。しかし容器内の煙は自発的に拡散する。この例から、自発的な変化はエンタルピー減少だけでは吟味できないと言う事が分かる。

エンタルピーだけでは、その変化が起こるかどうかが可能性を探る事は出来ない。これがエンタルピーの限界である。エンタルピーで乗り越えられない壁を、新しい物理量を導入する事で乗り越えたい。

熱力学第二法則

こうしてエンタルピーやエネルギーの減少が自発変化の原動力ではない事が判明した。実を言うと、こういった現象については、**エネルギーが散逸した**というのが正しい解釈とされている。先程の例では、煙とともにエネルギーが容器内全体に散逸したということだ。

体育館の中でボールを上から落とす実験を仮定しよう。ボールはバウンドを繰り返した後、やがて床に静止する。つまり、初期位置の高さにあるボールが持っている位置エネルギーは、やがて床と接触する度に床に散逸してゆき、床はボールからエネルギーを受け取り、床を構成する原子が振動し、僅かに熱を帯びる。しかし床に熱をいくら加えても、床から静止したボールが飛び跳ねる事はない。これは、エネルギーは広がって行く一方、局所に集中する事がない事を示している。

エネルギーは自発的に散逸する。これが熱力学第二法則である。

エントロピー

ここで、物事の乱雑さを示す指標として、エントロピー (entropy、 S と略す) という物理量を導入しよう。エントロピーは、系に加えられる熱を温度で割る事により求められる。熱を温度で割れば、系がどれほど乱雑なのかを調べる事が出来る。

熱力学第二法則より、自発変化により物事は散逸するから、自発変化に伴いエントロピーは増大する。

ここで注意するべき点は、その変化が起こるかどうかは系のエントロピー変化だけではなく、外界のエントロピー変化も考慮に入れて、系と外界のエントロピー変化量の総和からその変化が起こるかどうかを吟味

しなければならぬと言う事である。自発変化の可能性を調べる時は、系だけではなく外界にも目を向けなくてはならないのである。

系に注目する

自発変化の起こる可能性を調べる時は、外界にも目を向けなくてはならない。そこで系のみを対象として、自発的变化が起こる可能性を調べるための工夫を述べていこう。それは端的に言うと、エンタルピーとエントロピーを結合する事である。

エンタルピーとエントロピーの結合の鍵となるのがギブズエネルギーなのであるが、それは以下の様に定義される。

「ギブズエネルギー」は、系のエンタルピー H から、系のエントロピー S と温度 T の積を引く事で求めら

れる。 $G = H - TS$

ギブズエネルギーを求める為に使う物理量は、全ての持ち物であるから、今我々は自発的に起こる変化の可能性を調べる為に、系のみに着眼している事になる。これは偉大な発明である。以下その詳細を述べよう。

ギブズエネルギーはしばしば以下のように解釈される。つまり、自発的变化により系のエンタルピーが減少し、エントロピーは増大する。だからエンタルピーからエントロピーを引けば、自発的变化によりギブズエネルギーは減少する事が分かる。自発的变化ではギブズエネルギーは負の値を取る。

しかし、この解釈は誤りである(式の覚え方としてはいいかもしれない)。ギブズエネルギーが低い方へ向かう傾向は、系と外界の全体のエントロピーが大きい方向に向かうという事だけである。系が変化するとき、系と外界のエントロピーが増大するのであればその変

化は自発的であつて、系のエネルギーが低くなることは理由ではない。ギブズエネルギーが低い方が安定であるという解釈を一見与えるが、それは誤りである。系のエントロピーの変化量は系に由来し、系のエンタルピー減少は外界のエントロピー増大に対応する。

準安定相の存在

ダイヤモンドが黒鉛に変化する際、反応ギブズエネルギーは減少する。だからこの反応は自発的に起こる。しかし我々にこの反応を観察する事は出来ない。確かに自発的にダイヤモンドは黒鉛に変化するが、この変化にはかなりの時間がかかる、つまり反応速度がかなり小さいのである。だからダイヤモンドは黒鉛より不安定であるにもかかわらず、安定に存在できるのである。このダイヤモンドの様な相を、準安定相と呼ぶ。

すなわちギブズエネルギーまで導入して、その変化が起こるかどうかは判定できるが、観測できる速さでその変化が起こるかどうかは調べられないのである。

その変化が起こるかどうかという問題と、変化の速度の問題は別問題なのである。これらは別々に調べる必要があるから、ギブズエネルギーにも限度はあるのだ。

我々の生活と熱力学諸法則

熱力学の法則は我々の生活にも影響を及ぼす。第一法則より、今自分が活動できるのは、すなわち仕事できるのは誰かが自分にエネルギーを与えたからである。そして自分がエネルギーを外界に放てば、外界はその刺激を受ける。例えば悟空がゲンキダマを放つためには、悟空自身仕事をしなければならぬ。

生きていくという事。それは即ち自分以外の他人とお互いに影響を及ぼしあいながら、地球上で一つの個体として存在し、生命活動（呼吸・生殖・消化活動）を続ける事なのだ。生きていく以上、誰かに影響を及ぼし、そして自分も誰かの影響を受けるのだ。

第二法則より、世の中は自発的に乱雑な方向に向かう。秦の始皇帝が国を荒らしたのも、戦争が起きて国が荒れるのも、人口が爆発的に増加するのも熱力学第二法則に由来する。秩序があり、その中で平穩に暮らすこと。そのためには熱力学第二法則に逆らい、秩序に向かおうとする誰かの絶えまぬ努力が必要なのである。

この事を理解していなければ、我々の生活は第二法則より無限に乱雑になり、荒廃の一途を辿る他ないのである。

終

論考 指導された者の観点から見る教育論

米井 滉太（乾寮第八期）

私は平成二八年三月末に和敬塾に入り、平成二八年五月末よりアルバイトを始めた。この二つの出来事から、二人の教育係（チューター）に出会った。二人とも、感謝してもしきれないほど、優しく丁寧私に教育をしてくれ、おかげで私はすぐにその社会集団のルールに慣れることが出来た。私も近くは平成二九年の四月に和敬塾でチューターとなり、将来的には部下に仕事を教える立場となる。そこで、この機会に二人の教育技術や手法について改めて考えていきたいと思い、このような文章を書くに至った。本編に入る前に、二人の教育者を軽く紹介したいと思う。一人目は、和敬塾で私のチューターである「井田有俊様（以下井田先輩）」

である。二人目は、バイト先の「紀伊国屋本店五階医学書コーナー」にて指導してくださった「星様（フルネームを聞いたことがないので、名前は省略させていただきます。以下星さん）」である。では、これから二人の共通点とそれぞれの特徴を述べていきたいと思う。

一つ目は、初めて出会った時から、自分を受け入れてくれたことである。一人目の井田先輩は、初めて出会った日から笑顔で接してくれた。そして、初日から夜遅くにも関わらず、丁寧に時々笑いを交えて、部屋周りや和敬塾のルールを教えてください、更には同班の先輩と部屋周りを始めるきっかけを与えてくださった。星さんも初めて出会った日から、笑顔で対応し

てくださった。バイト初日から、下痢と腹痛に襲われ、バイトの登録に支障を与えてしまったのにも関わらず、「お腹痛いのは辛いよね。ゆつくりトイレに行つてきな。きつかったら、登録は次回でも大丈夫だから、早退する？」と優しく接してくださり、安心して初日の業務をこなすことが出来た。

二つ目は、どんな時も笑顔で楽しそうに接してくれたことである。一人目の井田先輩は、私が和敬塾に入りの頃に、昼夜を問わず問題や不明点が生じてしまい、困ってしまったときに聞きに行くと、ゲームをしているときは中断して、寝ているときはわざわざ起きて、的確な回答を教えてくださいました。自分自身だったら、ゲームをやっている時や寝ている時に、邪魔されたら不機嫌な態度になってしまい、相手を不快にしてみようかもしれない。しかし、井田先輩は嫌な顔一つせず、教えてくださいました。廊下や食堂・風呂で偶々出

会った時も、「おう！」と笑顔で挨拶してくださり、和敬塾の目的とする挨拶の意義を大変感じることが出来た。また星さんは、バイトははじめから終わりまで、挨拶や問いかけをすると笑顔で答えてくれた。また、仕事中も軽快な仕草で楽しそうに仕事をしているため、声がかけやすく、また現場が明るくなり、楽しくアルバイトすることが出来た。

三つ目は、積極的に様々な体験をさせてくれたことだ。井田先輩は、一年生間の会話や円滑なコミュニケーションを重視して、自分の判断で食堂や風呂に行くことを許可してくださった。そのおかげで、同期との仲は勿論の事、様々な先輩との会話を通じて、同期や先輩とのコミュニケーションをすることが出来、知識見分を広めることが出来た。星さんは、レジ係において他の人よりも早く、様々な仕事を体験させてくれた。例えば、領収証や郵便サービス・ポイントカードの説

明だ。これらは操作や手順が少し難しいため、多くのアルバイトの方々は一か月程バイトを経験してから教えらるのだが、私にはバイト三日目からやらせてくださった。最初は辛かったが、後ろや横からサポートをいただきながら作業することが出来、おかげでほかのバイトの方より早く、様々なバイトの技術を学ぶことが出来た。

四つ目は、心配をさせない努力や励ましをしてくれたことだ。井田先輩は、部屋周りやお酒の問題で悩んでいる私に、部屋周りの時は「今回の部屋周りの礼儀は、一年生が自分で考えるものだから、米井の考える礼儀をすればいい。大丈夫！ 米井なら出来る！ まあ……もし何かあつて呼び出しくらったら、呼んでくれ。俺が謝れば済む話だ。だから米井は、自信をもって部屋周りに行つてこい！」と励ましてくれた。お酒の問題の時は、「乾には酒を無理やり飲ませる人はいないか

ら安心していいぞ。まあ……もし断れないような状態になったら、俺に渡してくれば代理で飲んでやるよ（笑）。だから、安心していいぞ。」と心配している私の気持ちを安心させてくれた。ゲームやりながらのアドバイスだったから、もしかしたら井田先輩は覚えてないかもしれないが、私は上記のような励ましを心の支えにして、部屋周りや飲み会に安心して臨むことが出来た。そのようなアドバイスを、さらりと出来る井田先輩の人間性の高さがよく感じられた。星さんは、私が初めてクレーマーに出会い、混乱と不安に陥ったときに「新宿の大きな書店だから、様々なお客様がいるよね。でも安心して。米井さんのサポートは私たちがしっかりするから。君は自信をもってレジ係の仕事を行いなさい。それで困ったことがあつたら、私たち社員を呼んでくれればいいから。はい！ 笑顔で接客！」と、励ましてくれた。その言葉の通り、私が少しでも困

惑すればすぐさまサポートに来てくれたため、迅速に且つ的確に処理することが出来た。このようなサポートがあるから、私は安心してアルバイトに臨むことが出来るのだと感じた。

以上の四点が、私の出会った人間性の高い教育者の共通点である。以上に述べた事は私の主観が多く含まれているため、他のケースと必ずしも比較することは出来ない。もしかしたら、真逆の教育論もあるかもしれない。しかし、私がここで強調したいのは、ここに挙げた二名が私の人間性を的確に把握し、私にあった教育を施してくれ、すぐに社会集団に適応させてくれた点である。私はこのお二人を尊敬し、彼らの行ってくれた教育を参考にして、今後の社会生活に生かしていきたいと思う。もし、現在教育をする立場にあり、指導方法に悩んでいる方がいたら、この文章を少しでも参考にしていただけたら幸いである。

井田先輩と星さんには大変感謝している。星さんとはアルバイトの採用条件上、平成二八年の七月末にはお別れとなってしまった。しかし、短期間の間に受けた恩はきちんと大切にしていきたいと思う。井田先輩とは、部屋も目の前で班も同じく、残り三年間を一緒に過ごす間柄にある。よって、残りの時間を使って、少しでも井田先輩に恩返しをしていきたいと考えている。最後に私も教育者としての立場に立ったとき、このように後輩や部下に感謝され、すぐに社会集団に適応できるような教育をすることが出来るように努力していきたいと思う。

〇〇

論考 人工知能は万古絶唱の夢をみるか？

伊勢 康平（乾寮第六期）

薇薇の衝撃——序章にかえて

春信香深雪 春信 深雪に香しく

冰肌瘦骨絶 冰肌瘦骨 絶ゆ

梅花不可知 梅花は知るべからず

何處東風約 何れの処ぞ 東風の約する

世界的な画像認識のコンペティションである「ILSVRC (Imagenet Large Scale Visual Recognition Challenge)」で、カナダのトロント大学がディープラーニングを用いた Super Vision で圧倒的な勝利を飾り、

世界に激震が走った二〇一二年から四年後の二〇一六年、中国の清華大学の音声・言語実験センターが、自らの開発した漢詩創作プログラム「薇薇」が「チューリングテスト（対話によって人工知能かヒトかを見極める試験）」に合格したと発表した。冒頭の詩は薇薇の制作した「早梅」という作品である。今回行われた、チューリングテストを兼ねた現役の中国詩人とのコンペティションにおいて薇薇は惜しくも敗北したものの、その作品群の完成度の高さは中国古典詩に関わる多くの人々に多大な衝撃を与えた。

さんざん指摘されてきたように、昨今の人工知能の

目覚ましいブレイクスルーは、ディープラーニングとビッグデータの処理によるところが大きい(*1)。言ってしまえば、二〇一二年以降ディープラーニングが発展して来たことに加えて、一九九八年の北京大学教授の李鐸らによる全唐詩解析システムの開発をはじめとする古典文学のデータベース化の成果を考えると、薇の衝撃は必然的であつたのかもしれない。

情報技術の飛躍的な向上によって、漢詩をはじめとする古典文学を取り巻く状況は著しく変化した。漢詩のデータベース化の先頭を行く学者の一人である李鐸や王毅は、現在の状況を「分析時代」と名付け、コンピュータの活用によって「詩歌や作者の風格、作品の時代の分析などの角度からの研究」の更なる進歩が期待できるとしている(*2)。それは間違いなし、別にそ

れはそれで何の問題もないかもしれない。だが、人工知能によって提示された漢詩の数々に対して、われわれはどのように向き合えばよいのだろうか。もしも「万古絶唱（永久不滅の傑作、という意味の決まり文句）」などと呼ばれるような作品が人工知能によって書かれてしまったら……。われわれは、普段から触れている漢詩文が一体何なのかという観点から——もはや普段から漢詩文に触れている人など絶滅危惧種なのかもしれないが！——漢詩と人工知能との関係について思いを巡らせる必要があるだろう。人工知能は、果たして万古絶唱の夢をみるのだろうか？ かくて、ここから小さな旅が始まる。漢詩の未来への小さな旅だ。

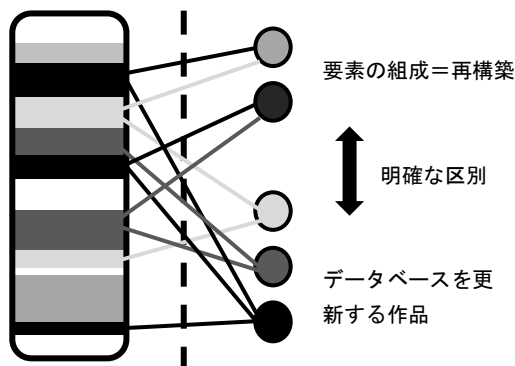
一章 データベース的文学

漢詩的データベース

作家の星新一の作品データをもとに星新一流の短編を人工知能に書かせるという公立はこたて大学のプロジェクト「きまぐれ人工知能プロジェクト 作家ですのよ」が星新一賞の一次審査を通過したのは記憶に新しいが、小説と比較したとき「有望な組み合わせを大量につくり、トライ&エラーで結果のレベルを上げていく作業」(*3)が大の得意である人工知能にとって漢詩創作の方が圧倒的に適しているのは間違いない。なぜなら、漢詩は本質的にデータベース的であるからだ。

データベース的とはなにか。ここでデータベース的と言うのは、先ほど言及した全唐詩解析システムや台湾中央研究所の漢籍電子文献などのようなデータベースのことではない。それは、作家で思想家の東浩紀が『動物化するポストモダン』(講談社 二〇〇一年、以下東氏の引用は同書による)にて提示したポストモダンにおけるオタク達のコンテンツ消費のモデルである「データベース消費」を念頭に置いたものである(*4)。

そもそも、われわれが漢詩を読む／書くときには、表層の作品(今風に言えば「小さな物語」とその背後にある詩語や表現の蓄積)データベース(東氏の所謂「大



表現・主題の蓄積

(図1) 漢詩的データベースのイメージ。データベースの概念そのもの及び図は東(2001年)79頁を出発点としているが、漢詩にはポストモダ的なシミュラクルも消費もないため、明確に区別されなければならない。

きな非物語」という二層構造が常に念頭に置かれている。作品はそれ単独では決して評価されず、常にデータベースとの関連において評価される。つまり、「どれほど先人の蓄積を巧みに利用したか」あるいは「どれ

だけ先人の蓄積に寄り添いつつ斬新な視点・表現を提示できたか」ということが——時に無意識的に——作品の評価を左右するということだ。

データベース性についても少し詳しく見てみよう。東氏はオタク達の主要なコンテンツ消費の要素である「キャラ萌え」に関して、「萌え要素」のデータベース性に着目しながら、次のように述べている。

秋葉原や新宿の専門店を覗けばすぐに分かるように「……」そこで流通している「キャラクター」は、作家の個性が造り出す固有のデザインというより、むしろ、あらかじめ登録された要素が組み合わせられ、作品ごとのプログラム(販売戦略)に則って生成される一種の出力結果となっている。(六七頁)

試みに、ここでいう「キャラクター」を（作品を構成する）詩句と置き換え、「要素」を（詩句を構成する）詩語と置き換えれば、それが実は漢詩の性質を的確に言い表した言説になることに気付くだろう。とはいえ、これではあまりピンと来ないかもしれない。そこで、実際に作品を見てみよう。

朝辭白帝彩雲間 朝に辞す白帝 彩雲の間

千里江陵一日還 千里の江陵 一日に還る

兩岸猿聲啼不盡 兩岸の猿声 啼いて尽きず

輕舟已過萬重山 輕舟已に過ぐ 万重の山（*5）

この李白の「早に白帝城を辞す」という詩の前半二句が、酈道元の『水経注』に「朝に白帝を発して暮れに江

れきとうげん

陵に到る。其の間、千二百里」とあるのを踏まえたのは

（少なくとも漢文界限では）よく知られたことであるが、同様に「兩岸（両側の岸）」「猿声（猿の鳴き声）」「輕舟（輕々と進む舟）」「万重（幾重にも重なった山々）」ともに（程度に差はあれ）一般的な詩語で全てに用例があり、三峡もまた猿声でなじみ深い。その上、猿声そのものも、悲哀の象徴として『楚辞』九歌の「山鬼」の「雷填填として雨冥冥、猿啾啾として狄夜鳴く」（*6）の句とともに人口に膾炙しており、これまでの言い方を以てすれば詩語のデータベースの中にと登録されている。ゆえに、この詩の優れた点は語彙の秀逸さや題材の新しさではなく、もっぱら詩語の組成、つまりプログラムそのものに集中しているというわけだ。

漢詩のデータベース性は、われわれの鑑賞態度にも

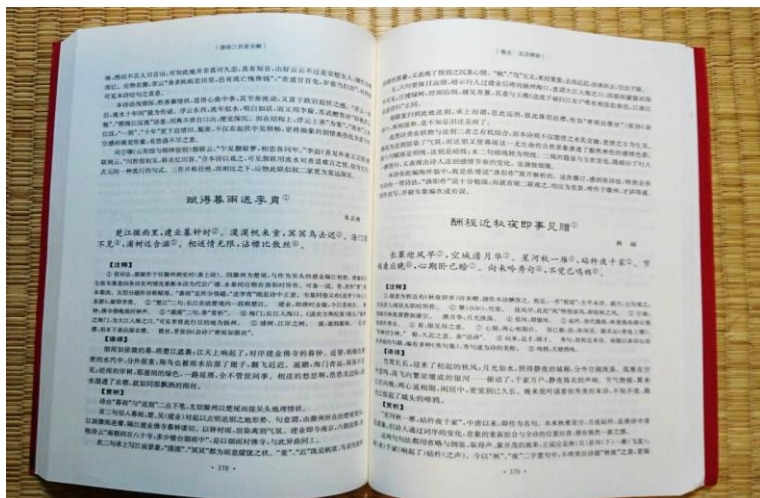
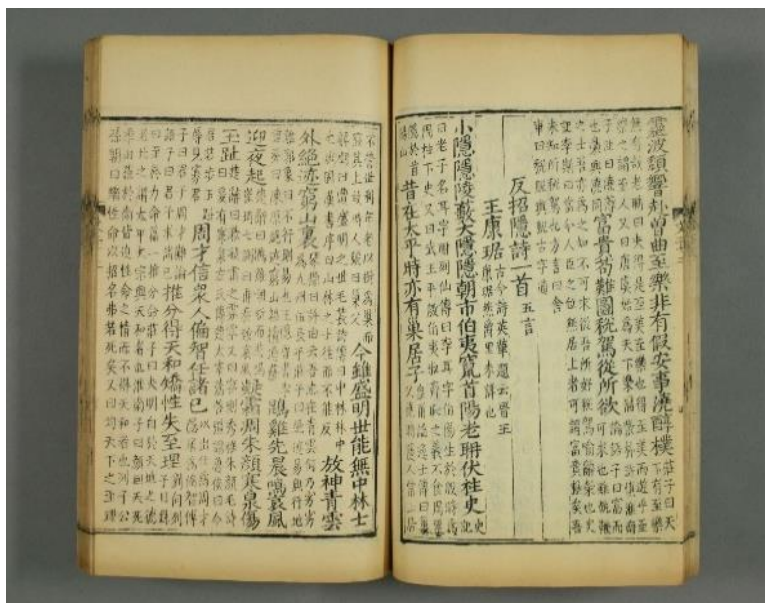
明確に表れている。われわれが手に取る漢詩集には、

ほぼ例外なく詳細な語釈や註釈が付いており、われわれは往々にして、作品の全体的な鑑賞を行うのと同時に、作品を各詩句および詩語単位に分解して、それぞれの意味を理解し、(多くの場合、その起源とともに)記憶する作業を並行して行っている。ここでは、東氏がオタク系作品に対して、「キャラクターは、もはや作品固有の存在ではなく、消費者によってただちに萌え要素に分解され、(データベースに——引用者註)登録され、新たなキャラクターを作るための材料として現れる」(七五頁)と言ったことと非常に近似した状況を見て取ることが出来る。繰り返しになるが、ここで「キャラクター」を詩句と、「萌え要素」を詩語と置き換えることで、われわれはその厳然たる事実を目の当たりに

することになるだろう。

ことほどさように、漢詩の優劣とは、蓄積されたデータベースに則った上での詩語の組成Ⅱプログラムの巧拙によって決定されるものであり、多くの場合そこに創造性が宿るとされている。この漢詩の背後に存在する詩語や表現、または主題の蓄積を、ここでは仮に「漢詩的データベース」と呼ぶことにしよう(*7)。

この章の冒頭で、漢詩がデータベース的であるがゆえに人工知能に適しているといったのは、まさにこの漢詩的データベースの特性においてである。つまり、「有望な組み合わせを大量につくり、トライ&エラーで結果のレベルを上げていく作業」とは、とりもなおさず漢詩的データベースに基づいて、詩語の組成Ⅱプログラムの精度を上げていく作業に他ならないからだ。



(図2) 上から、重刻宋淳熙本『文選』、趙昌平注解『唐詩三百首全解』(復旦大学出版社 2014年)。全てにデータベースの分解が見られる。

データベースの更新

漢詩的データベースとは、漢詩の背後に存在する詩語や表現、主題の蓄積のことであり、電子文献などの中国古典のデータベースとは全く異なるものである。

さきほど、このようにして漢詩的データベースの存在を確認したのは、決してひとり人工知能の漢詩への適性を指摘するためだけではない。それは、極めて難解な問題である「名詩（句）とはなにか？」という問いへの大きな鍵を提示してくれるからでもある。

名詩（句）とはなにか。この問いに端的かつ的確な解答を提示するのはおそらく不可能である。データベースを用いた組成プログラムの巧拙は、その重要な一つの条件としてすでに確認した。また、漢詩的データ

ベースの概念を用いることで、われわれは、更なる条件を次のように定めることができる。すなわち、漢詩的データベースを更新し得ることは、名詩（句）の条件であると。

漢詩的データベースの更新には、大きく分けて二つの過程がある。一つは逸脱からの定着による更新、もう一つは逸脱が「逸脱」となることによる更新である。以下、詳しく見てみよう。

「玉壺の氷」という言葉がある。すべすべと滑らかな玉で出来た美しい壺の中に輝く氷塊、という意味で清らかなもの、就中人心の清らかなさまを指すのに用いられる。しかし、詩人たちは初めからかくも美しい詩語を手に入れていたわけではない。一般的に、劉宋の鮑照（四一五？～四七〇）の「白頭吟に代ふ」の冒頭に

直如朱絲繩

直きこと朱糸の繩のごとくなお

清如玉壺冰

清きこと玉壺の氷のごとし（*8）

とあるのが初めだとされている。以後「玉壺の氷」という表現は、唐詩を初めとして様々な詩人に用いられていくことになる。唐代の主な例を挙げると、駱賓王（送別）、李白（「清漳の明府^{ていつ}任事に贈る」）、杜甫（「特進汝陽に贈る二十韻」）、李商隱（「薛岩賓に別る」）などがある。また、この表現を用いた最も有名な作品としては、王昌齡の「芙蓉楼にて辛漸を送る」が挙げられる。

寒雨連江夜入吳

寒雨江に連なつて 夜吳に入る

平明送客楚山孤

平明客を送れば 楚山孤なり

洛陽親友如相問

洛陽の親友 如し相い問わば

一片冰心在玉壺

一片の氷心 玉壺に在りと（*9）

洛陽に行く辛漸に対し、もしも都の友人が地方でくすぶる自身の身を案じたなら、「氷のように清く輝く心が、玉壺の中に入っているような……今はそんな心境なのだ」と伝えてくれ、と結ぶこの作品は鮑照の「玉壺の氷」を最も巧みに用いたものとして名高い。同様に、先に列挙した諸作品もまた鮑照の「代白頭吟」の冒頭を踏まえたと言っており、これを以て鮑照が唐代の詩人に大きな影響を与えたと言われることが多い。

確かに、鮑照の作風は李白や杜甫を初めとする多くの詩人に影響を与えたに違いないし（*10）、「玉壺の氷」の語を用いる全ての詩人が遍く「代白頭吟」の冒頭を知った上で用いていたのは、漢詩的データベースの特

性を考慮すれば——さらに言えば科挙を中心とする中国の文学的伝統を考慮すれば——間違いないのだろうが、しかし後世の詩人が用いた全ての「玉壺の氷」という表現に対して、これを鮑照の影響で片づけてしまうのはいささか強引である。

蓋し、そうした詩人たちが、鮑照の作風に影響を受けた結果「玉壺の氷」を用いたのだと言うよりも、むしろ、鮑照が「玉壺の氷」という比喻を用いたことによつて「清らかなるもの／＼」を表す詩的表現が増加した——換言すればデーターが更新された——結果、詩人たちが自身の詩作に用いるようになったと考えるべきだろう。盛唐の王維の「賦し得たり「清きは玉壺の氷の如き」を」にあるように、京兆府けいちやうふ（首都の役所）の役人登用試験の作詩問題に「玉壺の氷」が主題とし

て出題されたことがそれを如実に物語っている。試験問題となったということは、すなわち「玉壺の氷」はもはや鮑照の作風を好んだ影響を受けたかどうかという基準で用いられる詩語ではなくなっていたということに他ならない。そして、われわれは一般的にこのような現象を「詩語として定着した」と呼んでいる。

もう一つ、今度は詩語ではなく主題、或いは概念の例を挙げよう。

「古詩十九首」という作品群がある。南北朝時代に編纂された詞華集『文選』もんぜんの巻二十九の冒頭にまとめられている全十九首の五言古詩（一行が五文字で、句数や押韻などに制限のないもの）のことであるが、正確な年代や作者は不明である。

この作品群が文学史上において重要な意義を持つ

には、いくつかの理由がある。一つは形式面で、これは前漢の李延年の作品（「一たび顧みれば人の城を傾け、再び顧みれば人の国を傾く」と言つて漢の武帝に妹、つまり後の李夫人を推薦したもの、「傾国」の語の由来と言われる）などを早期の例とする五言詩が一応の完成形を見せたのがこの「古詩十九首」であると言われていることによる。

もう一つは内容面で、もはや漢詩の普遍的な主題の一つとも言える無常觀が初めに明確に描かれたのがこの作品群であり、それを受けた類魔的享樂志向が現れるのもこれが初めてであるとされているのだ。

この作品群に対して、漢学者の吉川幸次郎は、「人間が時間の上に生きること意識することによって生まれる悲哀の感情」つまり「推移の悲哀」が主題として

「はじめて顕著」となるものだとしている。また吉川氏は、この「推移の悲哀」を

一、不幸な時間の持続。

二、時間の推移による幸福から不幸への転移。

三、時間の推移の先には死という逃れがたい不幸があることへの悲しみ。

の三種に分類しており、先述の無常觀もまた、推移の悲哀のある種の言いかえであると言えるだろう（*1）

「古詩十九首」の詳細についてはここでは言及しないが、ここでは、この作品群にて初めて提示された主題がいかに漢詩に普遍のものとして定着したかを見ていくことにしよう。

初唐の劉希夷（りゅうきい、六五一〜六七九?）という詩人に「白頭を悲しむ翁に代わる」という余りに有名な七言古詩

がある。たとえこれであまりピンと来なくとも、「年年
歳歳 花 相い似たり、歳歳年年 人 同じからず」とい
う対句は教科書で見たことがあるという人は多いので
はないだろうか。以下、この詩を見ていくが、作品の分
量上、やや長くなることをご諒解いただきたい。

洛陽東城桃李花 洛陽東城 桃李の花

飛來飛去落誰家 飛び来たり飛び去って誰が家に落つる

洛陽女兒惜顔色 洛陽の女兒 顔色を惜しむ

行逢落花長嘆息 行くゆく落花に逢うて長く嘆息す

今年花落顔色改 今年 花落ちて顔色改まり

明年花開復誰在 明年 花開いて 復た誰かいる

已見松柏摧爲薪 已に見る 松柏の摧かれて薪と爲るを

更聞桑田變成海 更に聞く 桑田の変じて海と成るを

古人無復洛城東 古人復た洛城の東に無し

今人還對落花風 今人還た対す 落花の風

年年歲歲花相似 年年歲歲 花相似たり

歲歲年年人不同 歲歲年年 人同じからず

寄言全盛紅顔子 言を寄す 全盛の紅顔子

應憐半死白頭翁 応に憐れむべし 半死の白頭翁

此翁白頭真可憐 此の翁 白頭 真に憐れむべし

伊昔紅顔美少年 伊れ昔 紅顔の美少年

公子王孫芳樹下 公子王孫 芳樹の下

……

一朝臥病無相識 一朝 病に臥して相識無し

三春行樂在誰邊 三春の行樂 誰か辺にか在る

宛轉蛾眉能幾時 宛転たる蛾眉 能く幾時ぞ

須臾鶴髮亂如絲 須臾にして 鶴髮乱れて糸のごとし

但看古來歌舞地 但だ看よ 古來 歌舞の地

惟有黃昏鳥雀悲 惟だ 黃昏鳥雀の悲しむのみ有り

(*
1 2)

自分の容色のやがて衰えるのを静かに憂う少女、愁い
を知らない美少年、それを諭す白頭の翁——彼もまた、
かつては榮華を誇った美少年だった——をかわるがわ
る描いていくこの作品には、吉川幸次郎が「古詩十九
首」から発見した推移の悲哀が随所に見られる。

例えば、翁が「憐れむべ」きであるのは、以前は「紅
顔の美少年」であつた彼が、時間の推移とともに容色
も衰え、病によつて「相識無」き状態となつたからであ
り、また女兒が「嘆息」するのは、現在の「顔色」つま
り容色が時間の推移とともに衰えることを憂うためだ
である。これは吉川氏の挙げた第二の悲哀（しかし、女兒

のものは未だ至らざる不幸に対するものとしての）であ
り、主題として「古詩十九首」を淵源とするものである
と言えるだろう。

またこの推移の悲哀と深く関連する表現として「昔
……、今……」というものがある。これは「昔は……で
あつたが、今や……となつてしまつた」という意味で、
多く「昔日の幸福を、現在の不幸と対比する」(*
1 3)た
めに用いられる。「白頭を悲しむ翁に代わる」では、こ
の表現は見られないものの、翁の描写において同様の
対比が行われるのはすでに確認した通りである。

さらに、「年年歳歳——」の二句から分かるように、
この作品内で推移の悲哀を際立たせるものとして植物、
特に「花」が重要な役割を果たしているのは多く指摘
されてきたことである(*
1 4)。つまり、花は毎年春に

なれば美しく咲くが、人の容色は年々衰えていくと、
こういうことである。

しかしわれわれは、この作品で提示されているのは
必ずしも人間対自然という単純な対比の構図ではない
ことを銘記しておかねばならない。なぜなら「已に見
る 松柏の摧かれて薪と為るを、更に聞く 桑田の変じ
しようはく くだ たきぎ

て海と成るを」とあるように、大自然もまた絶えず変
遷するものであると説かれているからだ。つまり、儚
い人間の容色に比べれば永遠のように思われる花の美
しさもまた、大自然の変遷という視野で見た時、随分
と脆弱なものとなってしまうのだ。この作品を貫く無
常観（その無常観自体「古詩十九首」によって初めて主題
とされたものだった——為念）にはそうした階層的な構
造があるのだ。そして、就中象徴的なのは、その階層的

な無常観を演出するために用いられた「松柏の摧かれ
て薪と為る」という表現が「古詩十九首」第十四首の
「古墓は犁^すかれて田と為り、松柏は摧かれて薪と為る」
とあるのを踏まえていることである。

ことほどさように「古詩十九首」を起源とする表現や
主題に満ちている——こう言ってよければ重な^ふつてい
る——以上、「白頭を悲しむ翁に代わる」と「古詩十九
首」との関連は、常に明確に指摘されるべきだろう。

しかるに、「松柏摧爲薪」という表現の起源として、
という点以外でこの作品と「古詩十九首」の関連が特
に指摘されることはほとんどない（*⁵）。当然、概説
書において紹介されることも極めて稀である（*¹）。

だがこれに対して、決してこれまでの読み手が鈍か
ったのだとかそういう風に考えるべきではない。ここ

ではむしろ、「古詩十九首」以降、南北朝時代の仏教傳來も相まって、こうした無常觀または推移の悲哀という主題が余りに多くの詩人に用いられた＝一般化しすぎた結果、主題として無常觀を詠むことそのものと「古詩十九首」との関連が特別に意識されなくなつたのだと考えるべきなのだ。これもまた、新たな主題及び概念が定着することで漢詩的データベースが更新された例だと言えるだろう。

こうして「玉壺の氷」と無常觀／「推移の悲哀」を例に漢詩的データベース更新の第一の過程を見てきたわけであるが、ここで最も重要な点は、このように漢詩的データベースを更新するためには、一度そこから逸脱しなければならぬということである。つまり、漢詩的データベースを更新させるためには、本来データ

ベースには存在しなかつた詩語や表現、主題を提示し、尚且つそれを定着させなければならぬのだ。かくて漢詩的データベースを更新し得た作品や詩句は、多くの場合、名詩（句）として記憶されることとなる。これが、逸脱からの定着による漢詩的データベースの更新である。

「逸脱」という制度

元來漢詩的データベースに存在しなかつた表現や主題が、その秀逸さを以て後人の用いる所となり、やがて一般的な表現及び主題として定着すること。これが漢詩的データベースに起こりうる第一の更新の過程であつた。次に、第二の更新の過程として、われわれは逸

脱が「逸脱」となることによる更新を考えていくことにしよう。

これは一体どういうことか。端的に言えば、つまりこういうことである。すなわち、漢詩的データベースからの逸脱とは、いまここにおける高度に刹那的な体験として要請されなければならない、それゆえ、その刹那性を失った瞬間、それは「逸脱」という制度として漢詩的データベースに併呑されてしまうということだ。

例を挙げよう。

李賀という詩人がいる。字は長吉、昌谷（河南省宜陽県）の人で、二十七歳にて早逝した詩人だ。作風は奇異で難解、好んで超自然的な要素を扱い、「鬼才（霊的な異能の天才）」「詩鬼（詩の亡霊）」などと呼ばれた。

彼の「鬼才」を最も象徴的に表した作品の一つに、

「感諷五首 其の三」がある。

| | | |
|-------|--|--|
| 南山何其悲 | 南山 | 何ぞ其れ悲しき |
| 鬼雨灑空草 | 鬼雨 | 空草に灑ぐ <small>そそぐ</small> |
| 長安夜半秋 | 長安 | 夜半の秋 <small>やはん</small> |
| 風前幾人老 | 風前 | 幾人か老ゆ |
| 低迷黃昏徑 | 低迷 | 黃昏の徑 |
| 裊裊青櫟道 | <small>じようじよう</small> 裊裊 <small>せいれき</small> | たり青櫟の道 |
| 月午樹立影 | 月午にして | 樹影を立て |
| 一山唯白曉 | 一山 | 唯だ 白曉 |
| 漆炬迎新人 | <small>しつきよ</small> 漆炬 | 新人を迎え |
| 幽壙螢擾擾 | 幽壙 螢 | 擾擾たり（* ⁷ ₁ ） <small>じようじよう</small> |

——終南の山は、どうしてこんなに悲しげなのだろう

か。雨は亡霊のうめき声のような音を立てて、寂しげな草原に降り注いでいる。夜深い長安では、秋風が吹くままに、いくたりということもなく人々が年老いていくことだろう。そこはかたなく薄暗い小道をたどっていくと、なよなよと揺れ動く青いくぬぎの並木道。月は真上に上って、木々の影が根元からまっすぐに立っている。真夜中だというのに、まるで山全体が夜明けのように青白い光に包まれている。墳墓のあたりでは、漆のように黒く暗いたいまつがともって新しい亡者たちを出迎えており、おくまった暗い墓穴のまわりには蛍がうじゃうじゃと乱れ飛んでいる——和訳をざっと読んだだけでも十分にその異様さがうかがえるのであるが、以下少し詳しく見てみよう。

冒頭からすでに奇怪である。というのも、南山

つまり終南山とは、長安の南にある山で、当然墳墓はあるにはあるが、例えば現存する最古の詩集である『詩經』小雅の「天保（天の加護の意）」に「南山の寿の如く、騫^かけず崩れず」（*¹₈）とあるように、古来——すなわち漢詩的データベースに則って言えば——不老長寿の象徴、あるいは隠者の住む清らかな場所として詠まれてきたものであるからだ。この李賀の作品は、そうした終南山に対して、「鬼雨（亡霊のうめき声を思わせる不気味な音を立てて降る雨。李賀の造語とされる）」、「漆炬（墓前に灯される暗いたいまつ。また、これを鬼火と解する見方もある）」、「蛍（中国では、ホタルは腐草から生ずる陰湿な虫の形象を持ち、ここでは鬼火の比喻でもある）」といった死²を連想させるものを無数に重ね合わせることで、不気味極まりない場所へと変貌させている。

つまり、いくら長寿と言っても死ぬことに変わりはなく、死ぬ時は死んでしまう。だからこそ長寿の象徴である南山は却って悲しげに見えるのだということだ。

他に異様な作品としては「秋来（秋来たる）」が挙げられる。「桐風 心を驚かして壮士苦しむ」と始まる前半は、自らの不遇を嘆いて平常であるが、後半四句に

思牽今夜腸應直 思牽きて今夜 腸応に直かるべし

雨冷香魂弔書客 雨冷にして香魂 書客を弔す^{ちよう}

秋墳鬼唱鮑家詩 秋墳 鬼は唱う 鮑家の詩

恨血千年土中碧 恨血 千年 土中に碧なり（*₁₉）

とあるのは極めて異様である。まず、「思牽今夜腸應直」とは、不遇を嘆く思いの強さの余り腸がぴんと真直ぐ

に硬直しそうだという意味だが、「断腸の思い」の語から

も分かるように、一般的に（＝漢詩的データベースに

基づけば）胸の張り裂けそうな状態は「腸断」や「腸回

（腸回る）」と表現するのだと相場が決まっている。続

いて「死んだ先人の魂（香魂）が私（書客）を慰めに来」

たという。やがて寂しげな秋の墓場から鮑照（九頁参照）

の嘆きのうたが聞こえ、そこでは死者の恨みをこめた

血が凝り固まって千年経った今も土の中で碧玉となっ

て残っているのだと結ぶ。（最後の二句については、「慰

めに来た女性の魂に魅せられ自らも亡霊となつて墳墓で

歌い、自身の血は土中深く沈んで碧玉になる」とみる解釈

もある。こちらの方がより不気味で異常ではある（*₂₀）

ことほどさように、李賀の作品には、奇怪な新語や、

死・鬼・血・魂などの不気味な字がやたらに登場する。

これらの表現や詩語もまた、漢詩的データベースから逸脱したものに他ならない。では、これらは例えば「玉壺の氷」のような定着を見せたのだろうか。

はつきり言ってしまうと、そんなことはない。というのも、例えば「鬼雨」という語は以後あまり頻繁に用いられることはなかったし、また、後世終南山は悲しげなものだという認識が定着したわけでもなければ、自分の不遇を嘆くために死者の魂をあちこち飛ばすのが一般的になったわけでもないからだ。

しかし、これは当然ながら李賀の作品が以後の詩人に全く影響を与えなかったという意味ではない。李賀の作風は、李商隱を始めとする晩唐の詩人や、南宋末期の謝翱、或いは日本の近代作家諸氏などに影響を与えたとされている。李賀の表現や主題もまた、漢詩的

データベースに登録されてはいるのだ。従って、ここで問題とされているのは、そうした李賀に関わる要素がデータベースに登録されたか否かではなく、どのよう^うに登録されたか、ということなのである。

そこで、例として南宋の詩人の謝翱（一二四九～九五）を見てみよう。

謝翱、字は皐羽^{こうう}、南宋末期のいわゆる愛国詩人と呼ばれる一群の人々の一であり、元軍^元北モンゴル帝国軍との戦いにも従事した人物であるが、漢文に関わりのない人にとってはかなり馴染みの薄い人物であると思われる。彼には、祖国の滅亡を目の当たりにしてきたからか、散文「西台に慟哭するの記」や詩「西台にて思う所を哭す」、「知る所を哭す」、^{ひしゅう}「邳州にて哭す」それから「肯齋李先生を哭す」など、溢るる激情をぶつけるよ

うに表した作品が多い。何かにつけて哭さずにはいられないこの熱血詩人は、また一方で李賀に大きく影響を受けた人物としてしばしば挙げられる(*²₁)。では、ここで実際に「知る所を哭す」を見てみよう。

總戎臨百越

総戎^{しゅう}百越に臨み

花鳥瘴江村

花鳥瘴江の村

落日失滄海

落日滄海に失われ

寒風上薊門

寒風薊門に上る

雨青餘化血

雨青くして化血を余し

林黒見歸魂

林黒くして帰魂見る

欲哭山陽笛

山陽の笛に哭さんと欲すれど

隣人亦不存

隣人も亦た存せず(*²₂)

知る所||総戎(將軍)||文天祥の死を嘆くこの詩の、頸

聯(五・六句)の部分に当たる「雨青くして化血を余し、

林黒くして帰魂見る(真青に降りしきる雨のなか、恨み

を残して死んだ將軍の血は碧玉となつて地中に残り、闇黒

の森林に帰りついた魂がおぼろに姿をあらわす)」という

対句が、特に李賀的な形象を持つ名句として知られて

いる。確かに恨みのあまり血が碧玉となつて地中に残

り続けるというのは(もともと『莊子』外物篇などを起

源とするもの)李賀の用いた異様な表現の一であるし、

真つ暗な林に死人の魂が帰つて来るといふのも、「秋来」

詩と似た雰囲気を感じさせる。

さて、謝翱に關してもう一首「梅花 其の二」を見て

みよう。

吹老單于月一痕 單于吹老して 月一痕

江南知是幾黃昏 江南 知んぬ 是れ幾黃昏ぞ

水仙冷落瓊花死 水仙冷落して 瓊花死せるに

祇有南枝尚返魂 祇だ南枝の 尚お魂を返す有り

(* 3
2)

夜空に浮かぶ一片の三日月の下、單于の曲に「吹老」、つまりしおれた梅の花を描いたこの詩は、單于が北方の異民族匈奴の王を指すこともあつて、元軍が南宋を制覇したことを仄めかして悲しげである。また、後半部分の「水仙冷落して 瓊花死せるに、祇だ南枝の 尚お魂を返す有り（水仙はさびしく枯れ果て、瓊花——アジサイに似た極めて稀な植物。揚州にただ一つ咲いていたが、そこが元軍に制圧された際に枯れたとされる——も死に絶えた今もなお、南を指して伸びる梅の枝のみは、花を

咲かせ、死者の魂を呼び返すのだ」という二句にも、梅の花が元軍に殺された者の魂を呼び戻すとあり、「瓊花死」という表現と相まって矢張り不気味な切なさを演出している。

謝翱がこうした表現を多用したのには、実際に従軍した者として多くの死に向き合つて来たことも起因しているだろうが、それ以上に、彼自身の強い激情は、ありきたりの詩語では描くことが出来ず、こうした表現を用いざるを得なかったのだという見方が強い。漢学者の山之内正彦は『宋詩鑑賞辞典』の中で次のように述べている。

彼の詩は言葉につりあうほどの内容がないという批評（せんしやう 餞鍾書『宋詩選註』も、こういうところ（特異な

詩語の使用、前後の脈絡の不明確さなど——引用者註）から生まれてくるのだろうが、これは当たらないと思う。「……」既存の宋詩の表現力（ことに、すぐ先行する江湖派の俗調）では、どうにもならなかったこの詩人の苦しさ、たぶんこのような事態を招いているのであり、だからこそ、難解さが確かな詩的魅力となりえているのである（*⁴）。（傍点伊勢）

してみれば、謝翱は李賀の用いた特異な語彙や表現を作品に用いることで、自身の尋常でない激情を効果的に表しているのだと言えるだろう。

確かに、こうした傾向に対して「李賀に影響を受けた」という寸評が与えられるのは至極正當なことのようにも思える。しかし、ここでわれわれが考えなければ

ならないのは、どうして謝翱と李賀の影響関係は毎度決まって指摘されるのに、先述の「白頭を悲しむ翁に代わる」と「古詩十九首」については全くと言っていいほど指摘されないのだろうか、ということだ。

後者の、強い普遍性を獲得した結果、起源と要素とのつながりが弱まっていったのだというこの関係については、先ほど確認した通りである。それならば、謝翱と李賀の関係については逆に次のようには考えられないだろうか。すなわち、李賀の語彙は相対的に一般性に欠けていたために、その起源とのつながりがより強く意識されたのだと。

もう少し掘り下げてみよう。そもそも、漢詩的データーベースから逸脱したところから提示される詩語や表現、主題の数々が、何ら一般性を持たないままにデー

タベースに取り入れられる。後人に参照される時、人々はそれを「特異な表現、主題」だと認識する。つまり、そうした逸脱した要素は、「逸脱した要素」として、つまり詩語や主題として定着しないままに、漢詩的データベースに併呑されてしまうのである。李賀が「詩鬼」と呼ばれ、何かにつけて特異な存在とされるのは、これゆえである。

李賀が「鬼雨」という語を用いた時は、それは確かに奇怪であり逸脱した詩語であつた。しかし、後人が自身の奇怪さ（或いは異常に強い気持ち）を示そうと李賀的な語を用いたところで、それはもはや逸脱ではなく、「逸脱した李賀」の模倣でしかない。さらに言えば、李賀の奇妙な新語を多用し、死・鬼・血・魂といった不気味な語をやたらに使ったとしても、それは瞬く間に特

異性のない「李賀的な作品」という烙印を押されてしまい、全く逸脱しない作品となってしまう。そこに固有名は残りがたいばかりか、「李賀的な作風」という紋切り型が離れがたく付き纏つて来ることになる（*^{2,5}）。謝翱の例は、それを顕著に物語っているのだといえるだろう。

従つて、逸脱は、常にいまここにおいて瞬間的に遂行されなければならない、後から逸脱者の模倣をしたところで——なるほどそれは全く一般的な作品でないかもしれないが——それは「逸脱」という、漢詩的データベースに組み込まれた要素の一でしか有り得ず、なんら特異性を担保してくれるものではない。これこそが、「逸脱」という制度にほかならない。

何が書かれようとしているのか

これまでわれわれが見て来たように、漢詩とは、常に表層の作品と背後の漢詩的データベースという二層構造の中で作られ、鑑賞されてきた。一般的に優れた作品とされるものは、漢詩的データベースの枠組みの中で優れた組成を提示したもののか、或いはその漢詩的データベースそのものを更新しうるものであった。

また、漢詩的データベースを更新するために最も重要なことは、まず一度そこから逸脱してみせることであつた。そして、逸脱した詩語や主題が定着するか「逸脱」となるかを分ける最大の要素は、まさにそれが一般化したかどうか、換言すれば後人にどれほど用いられたかという点に尽きる。これまで見てきたように、

「玉壺の水」という詩語、または無常観／「推移の悲哀」という主題などの要素は、後人に幾度も用いられたために、一般性を獲得して、漢詩的データベースに登録された。ゆえに多くの場合、詩人たちはその起源を知りながらも、各要素とその起源とのつながりを強くは意識しない。

一方で、逸脱した要素が後人たちによって多く用いられなかった時、それは「逸脱した要素」として登録され、常にその起源とのつながりが強く意識され続けることになる。そこに生じる後発的な模倣の動きは、よしんば詩人が逸脱を意図した所で、それはただの「逸脱」でしかなく、決して逸脱たり得ることはできない。こうして漢詩的データベースの概念を用いることで、漢詩をある程度整理出来たわけだが、しかし漢詩とい

う古典的な形態の文学に関して、データベースという比較的新しい概念を用いて語ることに少なからず違和感を覚える方はやはりいるものと思う。

しかしここで強調したいのは、漢詩的データベースとそれを取巻く二種類の更新²創造という概念は決して突飛なものではなく、むしろ、以前から言われていたことを整理したにすぎないということだ。例えば、民国初期の漢学者王国維が『人間詞話』にて宋の周邦彦について「但だ創調の才多かれども、創意の才少なきを恨むのみ（格律や表現技法の才能に秀でていたが、オリジナリティを出す方面の才能が乏しかったのをただただ残念に思うのみだ）」（*²₆）と述べているが、ここまで議論を進めて来たわれわれは、この言説がどのよう⁶に換言出来るかを知っている。つまり、周邦彦は漢

詩的データベースを用いた再構築に優れていたが、一方でデータベースの更新を苦手としていたのだと。王国維の「創調」と「創意」の議論は、両者の背後に新たに漢詩的データベースの存在を据えることでアップデートされるのである。

さて、かくてここにわれわれが得た認識は、いわば漢詩に関する素描——あまりに大胆な粗描——である。そして、われわれはこの素描を手にする事でようやく次へと歩みを進めることが出来る。なぜなら、ここまで見て来たものは、いわば何が書かれようとしているのかであり、これから見てゆくものは、すなわち何が書こうとしているのかに他ならないからだ。

一章 脚註

- 1…ディープラーニングとは、機械学習の一種で、データをもとにコンピュータ自らが各データの特徴量を獲得し、それを繰り返すことによつて高次の概念を学習するシステムのことである。従来の機械学習における最大のボトルネックの一であった特徴量の能動的獲得を解決したことから、画期的な発見とされている。詳細は後述する。
- 2…李鐸 王毅「数据分析时代与古典文学研究的开放性空间」《中国文化研究》二〇〇六年夏の巻、九六頁〜一〇四頁所収
- 3…松尾豊『人工知能は人間を超えるか』(KADOKAWA 二〇一五年) 二五頁。
- 4…ここでも非常に重要な点は、本稿でデータベース的というのは、図一でも提示した通り、あくまで漢詩という文学の性質そのものに関して言うのみであり、その担い手が世界をデータベース的なものとして見ていたこと、もつと言えは漢詩を取り巻く世界がデータベース的であつた
- 5…吉明周 責任編集『唐詩鑑賞辞典』(上海辞書出版 二〇〇四年) 三四一頁。
- 6…漢詩大系三 藤野岩友『楚辭』(集英社 一九六七年) 百頁。
- 7…東氏のデータベースに関する議論において、実に重要な位置を占めるのが「シミュラクル」、つまり「オリジナルとコピーの区別が消え」た、「そのどちらでもない」「中間形態」(四一頁)という概念である。つまり、今やオタ
- ということを意味するものではなく、ということだ。
また、東はオタクたちがもはや個別の「小さな物語」ではなくキャラクターたちによつて構成されるデータベースの方にこそ魅力を求めていたとするが、漢詩の場合におけるデータベースは、これとは異なり、消費の対象とはならないことを銘記しておかねばならない。その意味で、本稿では漢詩のデータベース性に関して「データベース消費」という言葉の使用を意識的に忌避している。

クたちが原作もパロディも等価値で消費してしまっているのみならず、生産者にとつてさえオリジナルとコピーの区別が消えてしまっており、この「シミュラクルの全面化」と大きな物語の機能不全（四五頁）という現象が、そのままポストモダンの社会構造をきれいに反映している、という議論であつた。

これを受けて、たとえば李白の「古風」という古詩群や、白居易の「陶潜体に効う詩」などの、語彙や主題、作風における模倣対象を明らかにした（些か二次創作的とも言える）諸作品を挙げることで、シミュラクルの議論と結び付けることが可能なのではないか、と見る人がいるかもしれない。しかし、ここで銘記しておかねばならないのは、漢詩の場合はオ、ジナルとコピーとの区別が、到つて明確であるということだ。当たり前だと言えばそうかもしれないが、われわれはこの事実を確認することで、漢詩はデータベース的ではあるものの、やはり全くポストモダンのではないのだという、当然であり同時に絶対に混同してはならない認識を確かに得ることが

出来るのである。

8…漢詩大系五 星川清孝『古詩源 下』（集英社 一九一九年）

9…吉（二〇〇四年）一三三頁。

10…例えば、松浦友久編『漢詩の事典』（大修館書店 一九九九年）四七頁参照。

11…吉川幸次郎「推移の悲哀——古詩十九首の主題——」（『吉川幸次郎全集』第六卷 漢篇 筑摩書房 一九六八年

二六六—三三〇頁所収）二六七頁。

12…吉（二〇〇四年）二八頁。

13…吉川（一九六八年）二九二頁。

14…吉（二〇〇四年）二九頁など。

15…例えば、論文検索サイト「CINii」や中国で最大の学術データベースの1である「CNKI（China National

Knowledge Infrastructure）」などを用いて「劉希夷 古詩十

九首」「白頭翁 古詩」といったキーワードで総検索を

かけても、該当する文書はない。簡体字で試みても同様であつた。

1 6 ……対談形式で漢詩の紹介、解説を平易に行う宇野直人、江

原正士の『漢詩を読む②』（平凡社 二〇一〇年）一四

六頁に、江原「二十代でこのような無常観ですか……（後

略）「宇野」ただこういった無常観は、後漢の「古詩十九

首」ぐらいから観念的なかたちではしよつちゅう出て来

ましたし、南朝の後半頃から仏教思想が広まっています

ので、このようにうたうのは若い詩人であっても、変な

ことではなかったかも知れませんね」とあり、珍しい例

の一つとして挙げる事が出来る。

1 7 ……漢詩大系十三 齊藤响『李賀』（集英社 一九六七年）一七

二頁。

1 8 ……漢詩大系二 高田眞治『詩経 下』（集英社 一九六八年）

四一頁。

2 0 1 9 ……齊藤（一九六七年）八三頁。

……松浦（一九九九年）一一一頁。なお、ここでは、齊藤（一

九六七年）八四頁および吉（二〇〇四年）一〇一〇頁な

どを参照した結果、本文にあるような解釈を採ることと

した。

2 2 1 ……松浦（一九九九年）一七七頁。

2 2 2 ……前野直彬編『宋詩鑑賞辞典』（東京堂 一九七七年）一二

二頁。

2 2 3 ……前野（一九七七年）一二六頁。

2 2 4 ……前野（一九七七年）一二二頁。

2 5 ……確かに、そこに敢えて、特異性を見出そうと努力するのが

研究者であり、批評家であるとも言えるのだが、しかし

詩人が真に逸脱していない限り「逸脱」という制度は常

に逃れがたく纏わり付いてくる。それは、無常観は自明

とやり過ぎながら、一方で謝朓の作品に対して余りに

も容易に「李賀」という語を発してしまうその無邪気さ

の中に明確に見て取ることが出来る。

2 6 ……王国維『人間詞話』（上海古籍出版社 二〇一四年）三五頁。

二章 人工知能の「夢」

稻香の自動作詩システム

日本では余り知られていないが、中国での漢詩創作プログラムの研究にはある程度の歴史がある。初期のプログラムとして最も有名なものの一つに、二〇〇一年に稻香が開発したウェブサイト「稻香居電腦作詩機

網絡版 (<http://www.poening.com/web/index.htm>)」があり、

二〇一六年七月現在、Ver.5.02 まで更新されている。とはいえ、試しに中を見ると、サイトが恐ろしく文字化けしていて、とても利用できる状況ではなかった。そこで、同じプログラムを用いた稻香の漢詩創作アプリ

「詩神揺揺」で代用することにした。

このアプリは、主に詩と詞（宋代以降に発展した、より歌唱に適した漢詩の形態の一つ）に対応しており、利用者が体裁（七絶、五律など）、タイトル、風格（豪放、婉約、惆悵ちやうちやう）、韻の種類を選択することで、自動的に作品を作ってくれるというものだ。

しかし、マイクロソフトの研究員である周明らの指摘する通り、このプログラムは体裁やタイトル、韻律に依拠して、予め用意されたテンプレートを繋ぎ合わせて詩を合成する仕組みになっており、結果的に「不自然で、詩全体の意味が通りづらく、タイトルの作品へ



(図3)「詩神搖搖」の実際の画面。
作詩のスピードだけは異常に速い。

の反映（が希薄である——作者註）という点で利用者の目的とは一致していない」という欠陥を露呈するに至った（*²）⁷。

実際に見てみよう。タイトルは「九日」つまり九月九日の重陽の節句だ。この日は高殿へ登り、菊花を觀賞したり、菊を浮かべた酒を飲んだりする風習がある。体裁は七言絶句で、風格は惆悵（悲しげ）。韻は重陽の

節句に関わる王維の「九月九日山東の兄弟を憶う」詩と同じ上平声真韻にした。結果は以下の通りである。

白雪聽歌社樹春 白雪歌を聴いて 社樹春なり
清波把酒夜無人 清波酒を把りて 夜人無し
愁聞醉客無紅葉 酔客の紅葉無きを聞くを愁い
淚滿晴雲有白雲 淚晴雲に満ちて 白雲有り

「白雪」、「春」、「紅葉」などの様々な季節感を感じさせる言葉が入り乱れ、もはや幻想的という言葉の範疇を超えている。「酒を把りて」辺りは何とかタイトルの「九

日」とかすっついて一安心だが、結句の「涙晴雲に満ちて 白雲有り」なんぞはいよいよ意味不明である。また、再度「将酒進（将に酒を進む）」とタイトルを入力してみた時に「茶を煮て友を憶い、咽喉哽^ど（茶を沸しながら友のことを思っていると、鳴咽が漏れてくる）」と出力されたりもした。酒はどこへ行つたのだろうか。

このように、問題の多い稲香のシステムであるが、やはりこれも漢詩創作のプログラム研究のためには非常に重要な過程であった。では、次にこのシステムを大幅に改良した研究である統計的機械翻訳システム（Statistical Machine Translation System、通称SMT）

を用いた漢詩創作を見ていこう。

SMTによる漢詩創作

統計的機械翻訳システムとは、機械学習（Machine Learning）の一種で、統計的自然言語処理（Statistical Natural Language Processing）という領域に属する技術である。簡単に言うと、翻訳を行う時に、文法や意味の構造を考えずに、単に機械的に翻訳される確率の高い言葉を当てはめていけばよいとする考え方によるものだ。つまり、これまで言語学で研究されてきたような言語の構造に従って翻訳を行うのではなく、対訳コーパスと呼ばれる二つの言語（例えば日本語と英語）が両方記載されたテキストを大量に読み込ませることで、翻

訳の際に、ある単語・フレーズがもう一つの言語ではどのように翻訳される可能性が最も高いか、という基準だけで単純に当てはめて行くのである。これの発展した背景には、ウェブページが出来たことや「モザイク」などのブラウザやグーグルの検索エンジンなどの実装などのウェブ環境の大きな進歩がある。

先述の周明らの研究（*^{2）8}）は、その翻訳システムを近体詩（絶句、律詩のこと）の創作に応用したものである。つまり、大量の作品データを入力することで、どのような主題にどのような詩語、表現が最もよく使われるかを統計的に算出し、その通りに構築して行くということだ。当然、この研究の背景には漢籍のデータベース化の成果があることを忘れてはならない。

このシステムの具体的な方法は以下の通りである。

まず、作品構造のモデル・トレーニングとして唐・宋・明・清代などの計三五〇万首程度の作品をネット上のデータベースからダウンロードして読み込ませる。その際に絶句なら作品ごとに三組の句のペア（一・二句、二・三句、三・四句）を作り、同様に律詩の場合も七組のペアを作って読み込ませることで、 n 句で詠まれたものに対応する $n+1$ 句に最も相応しい表現を統計的に獲得することが出来るようになる。つまり、例えば絶句という「起・承・転・結」の自然な流れが再現できるようにするというわけだ。

また、語彙や表現のモデル・トレーニングでは、上記の約三五〇万首に加え、『文選』及び『唐宋八大家散文選』をモデルとして用いた。南宋の詩人陸游に「文選に爛しければ、秀才に半ばす（科挙には半分受かったよう

なものだ」(『老学庵筆記』)と言われた『文選』である。

これを全て読み込ませるとは、心強いことこの上ない。

そして、その実験結果の一つが、「春」と「琶」と「酔」

の三文字をキーワードとした以下の五言絶句である。

雙眸剪秋水 双眸 秋水を剪ち

一手彈春風 一手 春風を弾ず

歌盡琵琶怨 歌尽きて 琵琶怨み

醉來入夢中 酔い來たりて 夢中に入る

「春」がキーワードとされたものの、作品は秋の詩と

なった。「春風」は曲目のことである(本文では *the*

springtime lute と訳されている)。秋の川辺で酒を飲み、

流れを見ながら琵琶を弾いて「春風」を歌い、歌が終わ

れば酔いのままに眠りにつく……。機械学習によつて、

いかにも風流な「詩人」のひと時が描かれた、一応のま

とまりのある作品が出来た。

SMTによる作詩の方法は、与えられたキーワード

に対して最も関連する可能性の高い表現を提示し、ま

たそれに最も関連する可能性の高い表現をつなげ、ま

たそれに最も関連する可能性の高い表現を……と続け

ていくことによつて作品を構築することであつた。確

かに稻香の「詩神揺揺」から見ると素晴らしい進展で

あると言えるだろう。しかしこのシステムは、換言す

ると、**最もありふれた表現で最もありふれた作品を**

常に作り続けるということであり、いうなれば至極平

凡な作品を作ることにおいて最高の実力を發揮する技

術であると言えるだろう。これでは、折角『文選』を全

て入力したのに存分に利用しきれていない。周明らは自ら指摘してはいなかったが、これこそが、SMTによる詩作の限界に他ならなかったのだ。

しかし、われわれは既に人工知能がその限界を突破していることを知っている。そう、ここでもやくデイープラーニングの登場を迎えることになるのだ。

デイープラーニングについて——「夢」のまえに

さて、ここまで極めて簡単に人工知能による漢詩創作について見て来たわけだが、われわれの目的は、当然ながら漢詩にまつわる人工知能の進化の歴史を学ぶことではない。目的は、前章でも言ったように、何が漢詩を書くこととしているのか、換言すれば、いま、人工

知能には何が出来るのかということを明らかにすることにある。ただ、ひとり最新の技術のみ見るのでは、

それが如何に素晴らしいのかが分かりづらいので、いわば心の準備としてこれまで確認してきたに過ぎない。万古絶唱の「夢」は、ここから始まるのだ。

とはいえ、漢詩創作をめぐる最新技術を見ていくためには、最低限、今に至る人工知能のブレイクスルーを支える画期的な技術、すなわちデイープラーニングについて確認しておく必要がある。われわれは、「夢」の前にもうひと回り迂回しなければならない。無論、この辺りの事情について既に了解済みだという方はこの節を飛ばしてもらって構わない。

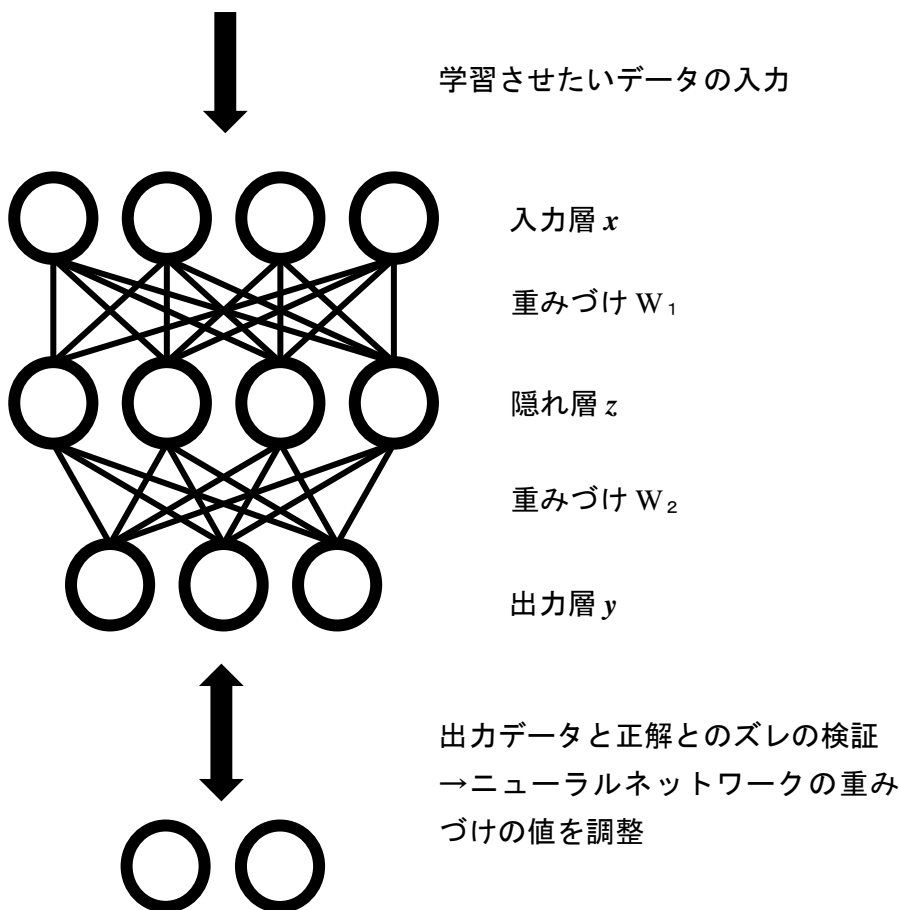
近頃よく聞くようになったデイープラーニングという技術であるが、これは端的にいうと多階層のニュー

ラルネットワーク (Neural network) で、全ての階層において学習が行われる (多層学習) ことと、自己符号化器 (Auto-encoder) を用いることにおいて従来の技術と異なっており、それによって入力されたデータの特徴表現を自ら獲得できる点を以て画期的とされている。以下少し詳しく見てみよう。

そもそもニューラルネットワークとは、人間の脳神経回路をまねることでデータを分類しようとする機械学習の方法である。人間の脳はニューロン (神経細胞) のネットワークで構成されており、あるニューロンは他のニューロンとつながったシナプスから電気刺激を受け取り、その電気が一定以上たまると発火して、次のニューロンに電気刺激を伝え、また次のニューロンが……という仕組みになっている。

これを機械学習で再現するとこのようになる。つまり、あるニューロンが他のニューロンから○か一の値を受け取り、その値に何らかの重みをかけて足し合わせ、その結果一定の閾値を超えると一になり、超えなければ○になる。そして、その値をまた次のニューロンに受け渡し、また次のニューロンが……というふうになる。

重みづけとは、人間でいうとシナプスの結合強度と同一ことになる。ニューロン同士をつなぐ線の太さ、と言ってもよい。人間が学習によってその強度を変えるように、機械学習でも学習の過程で最適な値を出力出来るように重みづけを調整してゆかねばならない。



(図4) ニューラルネットワークの模式図。例えば、手書き文字の「3」の画像を入力して、それが3であると認識させたいときに「8」と出力した場合、それは重みづけの調整に問題があるので、 W の部分の値を変えることで3であると認識出来るように人間が手を加えていくとうわけだ。また、図4の作図及びニューラルネットワークや以後のディープラーニングの説明は、少なからず松尾(2015) 114~178頁を参考としている。

松尾氏はこれを会社の構造に例えている。つまり、多くの場合、上司は部下からの情報を下に判断を下す

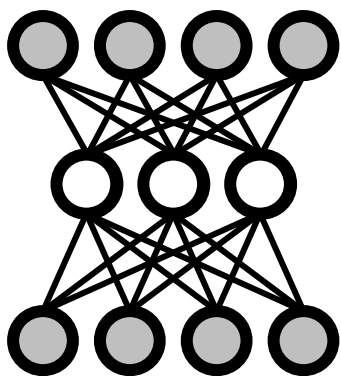
ことになるが、その時の判断が正しければその根拠となる情報を提供した部下との関係を強め、判断を誤った場合は、その部下との関係を弱めていく。そうして組織全体の判断力を上げていくのだというわけだ。こうして予測と正解の比較を繰り返しながら認識の精度を上げていく学習法を「誤差逆伝播（Back Propagation）」という（*⁹）。

ニューラルネットワークを用いた機械学習には、大きな課題があり、それは入力されたデータの特徴量（機械学習の入力に使う変数）をコンピュータ自ら発見出来なかったことだ。それゆえ、常に人間が考えながら調整してやらねばならなかった。そして、先ほども言っ

た通り、それを打開したのがディープラーニングであった。

そもそも人間の脳神経回路は何層にも重なった構造をしているので、ニューラルネットワークの精度を追求するにあたっては、当然これも多層적であるべきだとされていたのだが、従来の技術だとしても上手くいかなかった。多層的にすると、ネットワークが深すぎて重みづけの調整が行き届かなかった、つまり「誤差逆伝播」が上手く機能しなかったのだ。

これを可能にした技術が自己符号化器だ。これは左頁にあるように入力と正解を全く同じデータ（例えば、手書きの「三」の画像を入力した時、正解は三という概念ではなく同じ手書きの「三」にする）にする。普通に考えれば何の意味もないようにも見える。

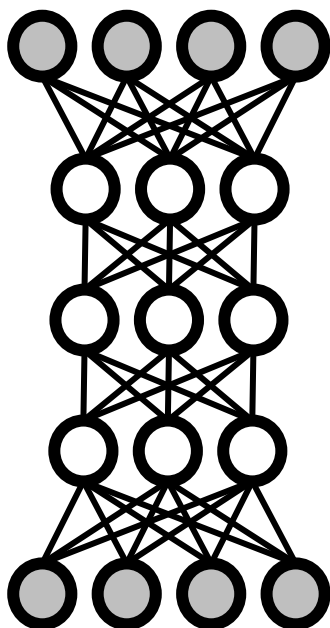


入力層

隠れ層：データを圧縮

出力層：入力層と同じ。

(図5) 自己符号化器のイメージ。圧縮されたデータを元にして、出力層に入力層と同じデータを復元する。「復元エラー」が限りなくゼロに近づいた時、隠れ層に残るものが適切な特徴表現であるというわけだ。



入力層

隠れ層 $\times n$ ：データを圧縮

出力層：入力層と同じ。

(図6) ディープラーニングのイメージ。隠れ層 n で圧縮されたデータを再現できる「更に圧縮されたデータ」を隠れ層 $n+1$ で作り、更に圧縮されたデータを……と繰り返すことで、高次の特徴量をコンピュータ自ら獲得出来る。

しかし、前頁の図にある通り、ただひたすら同じデータの圧縮（エンコーディング）と復元（デコーディング）を繰り返すことで、どのように圧縮すれば最も復元の精度が上がるかを学習することが出来る。これを多層的、つまりディープに行うことで極めて抽象度の高い特徴Ⅱ概念を獲得することが出来るようになるのである。あとは人間がその概念に名前を付けてやるだけである。これがディープラーニングの基本的なメカニズムである。

従来の機械学習では、入力されたデータの統計的な傾向は分かっても、そのデータの特徴に注目して情報や概念を獲得することが出来なかった。漢詩で例えると、従来は統計的に「別」という字と「柳」あるいは「酒」という字が一緒に使われる確率が高い、という

事までは分かっても、それらをつなげて「別れの詩には柳が詠まれる」あるいは「別れの際に酒を交わす」という特徴は発見できず、そうしたことは人間が入力するしかなかった。しかし、別れの時には酒を飲み、柳が詠まれるものだという特徴をコンピュータが自分で獲得してしまえば、あとは人間が、それは「送別」というジャンルであるのだ、と定義付けてやるだけで事は済む。一度「送別」というジャンルの概念を獲得してしまえば、あとはどんな「送別」の詩（例えば先述の「芙蓉楼にて辛漸を送る」などの、「柳」は出ないが「送客」などの表現がある詩）を読んでも、自分で「ああ、これは「送別」の詩だな」と理解することができるというわけだ。

詩を書く時に、例えば「別」という字がキーワード

で提示されたから、統計的に見て二句目に「柳」という字が使われなければならない」と判断を下すのと、「今書こうとしているのは送別の詩だから、どこかで「柳」を入れた方がいいだろう」という判断を下すのとの間には、凄まじい隔たりがあるのが分かるだろう。これが、ディープラーニングが可能にしたことである。

Attention-based Model による填詞

そして、これから紹介するのは、清華大学の音声・言語実験センター（CSLT）の王琪鑫^{おうききん}、駱天一らによる Neural Attention-based Model を用いた填詞に関する実験で、いわば徹徹以後の最新の成果である。

そもそも詞とは、先ほども言った通り、中国古典文

学の一形式で、狭義で言う詩（絶句や律詩など、一般に漢詩と言って日本人が想起するもの）よりも歌謡に特化した形態をしており、これを作るのを填詞（詞を填める）という。詞は、基本的に一句ごとに異なる文字数を持ち、よりリズムに対する制約が厳しくなったものだと単純に理解してくればよい。詞の大きな特徴は、曲目（これを「詞牌」という）がそれぞれあり、その詞牌ごとに一句の文字数、平仄（伸びる音とつまる音）の配置の規則が定められているということだ（*³⁰）。唐の後の宋代に最も発展した形式なので、中国では多く「宋词」と呼ばれている。本来曲に合わせて作られていたのだが、後々音楽が逸失してゆくと、先人の作品の平仄に合わせて作られ、普通に朗読されるだけになった。ここで北宋の蘇軾の「定風波」（*³¹）を見てみよう。^{そしよく}

定風波

せんりんだよう

1 莫聽穿林打葉聲

聴く莫れ 穿林打葉の声

×○○○●●◎

ぎんしょう

2 何妨吟嘯且徐行

何ぞ妨げん 吟嘯し且つ徐行するを

×●○●●○○◎

3 竹杖芒鞋輕勝馬

竹杖芒鞋 輕きこと馬に勝る

×●○○○●●

4 誰怕

誰か怕れん

○●

5 一蓑煙雨任平生

一蓑もて煙雨平生に任せんことを

×○○●●○○◎

6 料峭春風吹酒醒

料峭たる春風 吹きて酒醒め

×○○○○●●

7 微冷

微かに冷し

○●

8 山頭斜照卻相迎

山頭斜めに照らせば却って相い迎う

×○○●●○○◎

しょうしつ

9 回首向來蕭瑟處

首を回らす 向來蕭瑟たる處

×●●○○●●

10 歸去

歸りなんいざ

○●

11 也無風雨也無晴

風雨もまた無く 晴れもまた無し

×○○●●○○◎

(図7) ○は平音(伸びる音)、●は仄音(つまる音)、×はどちらでもない所で、◎が押韻する所である。1・2句／3・6・9句／4・7・10句／5・8・11句と見れば、厳格な音声規則のもとに填詞されているのが分かるはずだ。

前置きが長くなったが、つまりは人工知能に詩ではなく詞を書かせるということに関して大体以下のことが分かればよい。一つは音声規則が詩より複雑であるということ、その規則をクリアしつつ、完成度の高い作品を創るのが相応に難しくなる。それは人間も人工知能も同じだ。

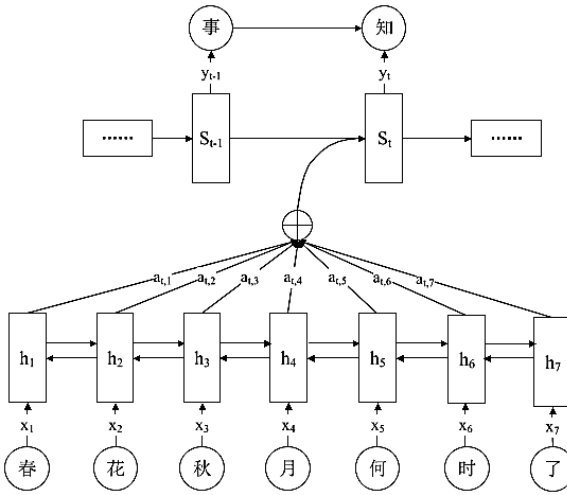
もう一つは、詩と比べて特殊な文学形態であるために、詩よりも作品の数が少ないということだ。それは単に作品総数が少ないということに加えて、詞牌によって規則が様々であるために、各詞牌あたりのトレーニングモデル数がかなり少なくなってしまうということも意味している。単に総数で見ても、前述のSMT（統計的機械翻訳）を用いた詩作実験の時で約三五〇万首のトレーニングモデルを使用したのに対し、

Neural Attention-based Model を用いた填詞の実験の際にトレーニングモデルとして使用出来たのがたったの一万五〇〇〇首程度しかなかった（*¹）上に、一つの詞牌にもいくつかのフォーマットがあり、音声形式は合計すれば千種を越えるとされるのだから、状況は推して図るべきだろう。

実際に、王氏らによれば「（機械翻訳などの）従来の技術では、例えば宋词といった複雑な制約を持つ作品を創作する際には、あまり上手くいかなかった（*³）」ようだ。そして、彼らはディープラーニングで使われているAttention-based Modelという技術を駆使することで先述の課題を克服することに成功した。以下、彼らの実験を見てみよう。

Attention-based Model はドイツ、ヤーコプス大

学の Dzmitry Bahdanau らによって提示された技術で、詳細は論文を参照してもらいたい^(＊3 4)、端的に言うと、従来は、あらゆる入力系列は一つの固定的



(図8) Attention-based Model を用いた填詞のイメージ図。Qixin Wang, Tianyi Luo, Dong Wang, Chao Xing. CSLT, RIIT, 2016. p.3

なサイズのベクトルにエンコーディング(圧縮)され、それをでコーディング(復元)の初期値として使用していたのだが、Attention は「データの出力ステップ t でそれに対応する隠れ層 h_t (特徴量を見出す所)を使い、入力側の各隠れ層(隠れ層が何層にも重なるのがディブラーニングの特徴であった)を荷重 a_t で加重平均した文脈ベクトルを使って出力 y_t を予測するというものである。簡単に言うと、入力と出力のアラインメント(調整)を学習する技術ということだ。王氏らの実験は、その Attention を填詞に応用したもので、これによって「各出力の段階において「……」最も関連性の高い入力データが発見されるようになったという^(＊3 5)。こうして、より少ないインプットでより精度の高い出力が可能となったのである。

そのほかにも、エンコーダーとデコーダーとにそれぞれ LSTM (Long-Short Term Memory 従来は不可能であった長期依存の記憶が学習可能) を使用し、それと隠れ層を連結させることで、文章生成(＝出力)のための初めの入力データとして使用する Global representation や、全ての詞牌に対して同一の Attention モデルを使用することで、モデル・トレーニングや文章生成の調整を行う Hybrid-tune training などの方式が提示されているが、¹⁾ここではこれ以上深く立ち入らず(詳細は論文参照)、Attention-based Model によって創作された詞を見てゆくことにしよう。論文に掲載されていた作品は一首で、詞牌は「菩薩蛮」^{ぼさつばん}。晩唐に流行した「菩薩蛮」がもととなった詞牌で、宮廷での男女の話が詠われることが多い。

| | |
|---------|--------------|
| 哀箏一弄湘江曲 | 哀箏一たび弄す 湘江の曲 |
| 風流水上人家綠 | 風流水上 人家綠なり |
| 小艇子規啼 | 小艇 子規鳴き |
| 不堪春去時 | 堪えず 春去るの時 |
| 花前楊柳下 | 花前 楊柳の下 |
| 紅葉滿庭撒 | 紅葉 滿庭に撒じ |
| 月落盡成秋 | 月落ち尽きて秋と成り |
| 愁思欲寄留 | 愁思 寄留せんと欲す |

——独り小舟に乗り、悲しげな気持ちで箏を弾きながら「湘江曲」を歌っていると、辺りにあるものは全て「緑」、つまりいきいきと栄えているように見える。(本文には *everything seems to thrive* とある) ほととぎすが鳴いているのが聞こえる。もう春も終わってしま

のだろうか……ついこないだまでそうして花に柳をうちながめていたというのに、今や紅葉が庭一面に散ら

ばる季節となつてしまった。月は西へ沈み、秋が訪れてもなお、この愁いはいつまでも消えようとしらないのだ——春の盛りの美しさと、それから取り残されたように「愁思」に沈む詩人との対比、そして時は瞬く間に過ぎるのだが、詩人の「愁思」は対照的にいつまでも晴れることがないというこの構図は、前章で見た吉川幸次郎の「推移の悲哀」の第一の悲哀——つまり不幸な時間の持続——が季節の慌ただしい移り変わりと対比されることで見事に際立っている。秋になるのがいささか唐突すぎる気もしないでもないが、いずれにせよ、これまで人工知能による（あまり良いとは言えない）作品を見て来たわれわれにとって、規則やモデル数とい

った制約の多い詞の制作においてこれだけの作品を提示されたことは十二分に驚嘆に値するだろう。

ちなみに、この *Attention-based Model* を用いた詞作では、薔薇の時と同様、中国の現役詩人とのコンペティションが行われた。宋詞専門家二四人による「格式」「流暢さ」「詞的深み」の三項目五点満点の採点方式による結果は、次頁にある通りだが、全作品の全項目平均で人工知能四・〇八対現役詩人四・四五点で人工知能はまたもや敗れたものの、「格式」においては勝利を収めるなど、大目に見れば互角に近い勝負をしたと言えるだろう。

| Model | Poeticness | | Fluency | | Meaningfulness | | Average |
|---------------|---------------|-------------|---------------|-------------|----------------|-------------|-------------|
| | Partridge Sky | Pusaman | Partridge Sky | Pusaman | Partridge Sky | Pusaman | |
| SMT | 2.96 | 3.96 | 2.05 | 2.85 | 2.09 | 3.00 | 2.82 |
| RNNLM | 3.19 | 3.88 | 2.50 | 3.02 | 2.42 | 3.10 | 3.02 |
| Attention-I | 4.68 | 4.98 | 3.00 | 3.40 | 2.73 | 3.37 | 3.69 |
| Attention-II | 4.71 | 4.80 | 3.27 | 3.06 | 3.15 | 3.22 | 3.70 |
| Attention-All | 4.68 | 4.92 | 3.52 | 3.88 | 3.60 | 3.90 | 4.08 |
| Human | 4.31 | 4.77 | 4.67 | 4.23 | 4.40 | 4.30 | 4.45 |

(図9) コンペティションの結果。SMT は統計的機械翻訳、RNNLM は Recurrent Neural Network Language Model の略で、今回は触れなかったが、Xiaoyuan Yi, Ruoyu Li, Maosong Sun. Generating Chinese Classical Poems with RNN Encoder-Decoder. DCST, 2016 などが参考になる。Attention に三種類あるのは、それぞれのトレーニング・メソッドの効果を検証するため、I、IIで別々のメソッドが導入されており、ALL はそれを全て用いた状態、いわば Attention の全力状態だと思ってもらえればよい。

人工知能は万古絶唱の夢をみるか？

こうしてわれわれは、大胆な、余りに大胆な二つの粗描を手にすることが出来た。片方の手には、本質的にデータベース的なとある文学の姿が、もう片方の手には、年々——いや、日に日にと言った方がよいかもしれない——学習の質を上げながら、日夜作品を作り続けている「詩人」の姿がある。われわれは、ここで今一度ははじめの問いに戻ることにしよう。人工知能は、果たして万古絶唱の夢をみるのだろうか？

それは、この章で設けた問題、つまり「いま、人工知能には何が出来なのか？」ということを考えることで自ずから明らかになる。これまで見て来た通り、人工知能における漢詩創作は、その技術の向上とともに、

より多く、より深く、より長く、よりスマートに学習出来るようになり、同時に、より多く、より複雑に、より美しく、より論理的に表現出来るようになっていった。

こうした科学者たちの試行錯誤の末に、今年の微微の衝撃があり、Attention-based Model による填詞の成果がある。われわれは、彼らの知の格闘の数々を前に深く敬服しなければならない。しかし、そうした人工知能による漢詩創作には、本質的な構造上の問題があることもまた事実である。

そもそも漢詩に限らず、現状人工知能によるあらゆる出力は、常に入力した情報によって規定されてしまいう。つまり、入力していないデータはどうあがいても出力出来ないのだ。これは当たり前のことかもしれないが、ここまで歩んできたわれわれは、その当たり前

の事実が漢詩創作においてどういう意味を持つかを知っている。すなわち、**今の人工知能では、漢詩的データベースを更新出来ないのだ。**いくら学習の精度が上昇し、人間のように詩や詞を書けるようになったとしても、人工知能にはデータベースから逸脱することは出来ない（「逸脱」は可能であったとしても）。これこそが、漢詩において人間と人工知能を大きく分ける点であり、いかなれば人工知能の限界である。

だが、われわれは、その事実が何ら人間の絶対的な優越を約束してくれるわけではないこともまた知っている。なぜなら、漢詩的データベースの更新は、名詞句への、更に言えば「万古絶唱」への唯一の条件ではないからだ。漢詩的データベースを記憶、駆使して、非常に優れた組成を提示すること。これもまた、「万古絶唱」

の極めて重要な条件の一つであった。二〇一二年にデ

イーブラーニングが世界に衝撃を与えてから、人工知能は目覚ましい勢いで発展して来た。たとえデータベースを更新するひらめきを持たずとも、組成の技術によって歴史に名を残すことは可能である。そして「万古絶唱」と呼ばれてしまう作品を生み出してしまうこともまた可能である。それが漢詩なのだ。

だから、人工知能は万古絶唱の夢をみる。それは、案外遠くない未来なのかもしれない。

醒者の為に伝ふる勿れ

小さな旅が一つの終わりを迎えようとしている。この旅の果てにたどり着いた結論は、人工知能にも「万古絶唱」と呼ばれるような素晴らしい漢詩を作ること
は可能だ、というものであった。

最近、ヒューマンビッグデータなどの研究によって、人間と機械との境界がどんどん曖昧になって来ている。いわゆる「自由意志」に基づいて行動しているつもりでも、人間の行動は、例えば腕が動くのは一分間に平均八十回程度で、歩いている時は大体二百四十回程度で、ネットを見ている時はおよそ五十回程度などと、実は非常に法則的に（それこそプログラミングされたかのように）動いていることが明らかになっている。

漢詩に關しても、同じことが言えるのではないだろうか。先ほど、現状人工知能には漢詩的データベースを更新出来ず、そこが人間との最大の違いだと言った

が、翻つて考えてみると、現在世の中に漢詩的データベースを更新し得る人間は果たして何人いるだろうか？ 一方で、ディープラーニングの登場によつて大いに勢い付いている人工知能はというと、大体この先十年くらいの間に、人工知能が人間の持つ「概念（シニフィエ）」のかなりの部分を獲得し、それに相応しい「記号表記（シニフィアン）」を割り当てさえすればいくらかでも言語を習得出来るようになるという。その時人工知能が、（例えば、外国文学特有の概念を漢詩上に応用するなどして）未だ漢詩的データベースに存在しない斬新で秀逸な表現を用いて来るかもしれない。そうなれば、

少なくとも漢詩創作において人間と人工知能を隔てるものは何もないということになってしまう。

漢詩を好む人の中には、人工知能が万古絶唱の夢をみると聞いて、あるいは人間と人工知能の違いがなくなると聞いてムツとする人がいるかもしれない。だが、もしこの状況を不満に感じるなら、メタ言語ばかり吐いていないで自ら詩を書き、積極的にデータベースを更新していくべきだろう。なぜなら、現状人間と人工知能を分けるものはそれしかないのだから。

最後に、僕の考えを言うと、僕は別に人工知能が人間よりよい詩を書くようになって構わない。なぜなら、文学するということとなみの根源的な動機と、人文知の優劣とは、根本的に無関係であるからだ。

それは、文学者の加藤典洋が『敗戦後論』で語った

「語り口の問題」(*³₆)と深く関連している。つまり、人々は本当に悲しんでいる時に「私は悲しい」などとは軽々しく口にしない。そういう時、人は余りにも容易にこう言ってしまうのだ、「私の悲しみは言葉で表せるようなものではない」と。しかし、それでもなお語られてしまった言葉たちのことを僕たちは文学と——いや、「**文學**」と！——呼ぶのではなかったか(*³₇)。

したがって、僕たちが思わずこのように口走ってしまふ限り文学がなくなることはない。それは書く場合も読む場合も同様である。そこに作品の巧拙は関係ない。書こうと思って書けないのが名作であるし、いまここにおいて発見したくても出来ないのが名作である。そして、世の中に漢詩という珍奇な文学形態を求めの人が少しでもいる限り漢詩は必要とされるだろう

(もちろん、中国にはそういう人が割合多くいる)。書くことで解放される人がいれば、読むことで救われる人もいる。たとえ人工知能が書いた詩でも、それが誰かの糧になるのであれば、僕はそれを「**文學**」と呼びたい。そもそも、人間が書こうが人工知能が書こうが「作者の気持ち」なんて読み手には知る術がない。畢竟、読み手が満足するならばそれでいいのではないだろうか。僕はしばしば余りに樂觀的だと言われることがある。確かにそうかもしれない。でも、僕が樂觀的であるのには理由がある。なぜなら、人工知能がどれだけ発展しても、人間にしか出来ないことを知っているからだ。

但得酒中趣 但だ酒中の趣を得んのみ

勿爲醒者傳 醒者(下戸)の為に伝ふるなかれ

終

二章 脚註

- 2 7 : Jing He, Ming Zhou, Long Jiang. *Generating Chinese Classical Poems with Statistical Machine Translation Models*. AAAI, 2012. p.1651.
- 2 8 : Jing He, Ming Zhou, Long Jiang. AAAI, 2012. 引用した詩は一六五六頁参照。
- 2 9 : 松尾 (二〇一五) 一三一頁。
- 3 0 : もちろん、詩にも曲目に似たものがあり、一般に「樂府(詩)」と呼ばれるものがそれにあたる。これは、前漢の武帝が設置した同名の官署に由来する。「樂府」という官署では、廟堂の祭祀や宮廷音楽のために諸々の歌曲が制作されたり、政治の参考とするために各地の民謡が収集、整理されたりしていたが、やがてそれらの作品自体が「樂府(詩)」、特に「古樂府」と呼ばれるようになった。
- 3 1 : 康萍責任編集『唐宋詞鑑賞辭典』(上海辭書出版二〇一二年) 六二三頁。
- 3 2 : Qixin Wang, Tianyi Luo, Dong Wang, Chao Xing. *Chinese Song Lyrics Generation with Neural Attention-based Model*. CSLT, RIT, 2016. p.1
- 3 3 : Qixin Wang, Tianyi Luo, Dong Wang, Chao Xing. CSLT, RIT, 2016. p.4 なお、使用した総数は一万五六八九首で、内一万五〇〇一首をトレーニングに使い、残りの六八八首をテストに使用した。

3 4 : Dzmitry Bahdanau, KyungHyun Cho, Yoshua Bengio.

Neural Machine Translation by Jointly Learning to Align and Translation. ICLR, 2015. または Yuta Kikuchi 「最近の Deep Learning (NLP) 界限における Attention 事情」

(URL : <http://www.slideshare.net/yutakikuchi927/deep-learning-nlp-attention> 二〇一六年一月十九日公開、同年七月六日閲覧) など参照。

3 5 : Qixin Wang, Tianyi Luo, Dong Wang, Chao Xing, CSLT, RITT, 2016. p.3

3 6 : 加藤典洋『敗戦後論』(一九九七年 講談社) 二二三～二七五頁。

3 7 : それは、換言すれば、小説において何行も続けられる美女の描写に対して、あるいは詩において何聯にも渡る大自然の描写に対して、それを「山が／女性が美しい」という一言で済ませることは出来ないが、しかし語らないではいられないとするあの心的傾向のことである。

参考

〈書籍〉

- 東浩紀『動物化するポストモダン』（講談社 二〇〇一年）三九～一四二頁
植木久行『唐詩物語 名詩誕生の虚と実と』（大修館書店 二〇〇二年）一三九～一五七頁
海猫沢めろん『明日、機械がヒトになる』（講談社 二〇一六年）
漢詩大系十三 齊藤响『李賀』（集英社 一九六七年）
呉企明箋注『李長吉歌詩編年箋注』上下（中華書局 二〇一二年）
蓮實重彦『物語批判序説』（中央公論社 一九八五年）
前野直彬編『宋詩鑑賞辞典』（東京堂 一九七七年）一一六～一二八頁
松尾豊『人工知能は人間を超えるか』（KADOKAWA 二〇一五年）

〈論文・ネット記事〉

- 川合康三「李賀とその詩」（一九七二年十月 『中國文學報』所収）
吉川幸次郎「推移の悲哀——古詩十九首の主題——」（『吉川幸次郎全集』第六卷 漢篇 筑摩書房 一九六八年 二六六～三三〇頁所収）

李鐸 王毅「数据分析时代与古典文学研究的开放性空间」《中国文化研究》二〇〇六年夏の巻、九六頁～一〇四頁所収）

王琪鑫、駱天一、王東編集「中国古诗词图灵测试」（CSLT Wiki.

<http://cslt.ruit.singhua.edu.cn/mediawiki/index.php/%E4%B8%AD%E5%9B%BD%E5%8F%A4%E8%AF%97%E8%AF%8D%E5%9B%BE%E7%81%B5%E6%B5%8B%E8%AF%95> 二〇一六年三月更新 同年六月二九日閲覧）

Qixin Wang, Tianyi Luo, Dong Wang, Chao Xing. *Chinese Song Lyrics Generation with Neural Attention-based Model*. CSLT, RIT, 2016.

Jing He, Ming Zhou, Long Jiang. *Generating Chinese Classical Poems with Statistical Machine Translation Models*. AAAI, 2012.

Yuta Kikuchi 「最近の Deep Learning (NLP) 界限における Attention 事情」（URL : <http://www.slideshare.net/yutakikuchi927/deep-learning-nlp-attention> 二〇一六年一月十九日公開、同年七月六日閲覧）

編集後記

前回の新入生號に引き続き編集を担当させてもらった。今回の特集である、「和敬塾の再定義」の記事では、より面白い学生寮にしていくために、どのような制度、イベントがあるべきか、先輩方と話し合いを重ねた。

この中で、先輩方がどういった視座でこの寮で生活をしているのか、あるいは、この寮に存在する問題点をどう解決すべきか、常に考えて生活していることが伺えた。

先輩方が、日々考えを巡らせ、よりよいものにしていこうとする努力は、きっとこの和敬塾に対してだけではないだろう。怠惰になりがちな大学生の日常で、自分を見つめ返し、よりよい自分になるために、常に考えて生活していきたいと思った。(鈴木)

今回生まれて初めて文芸誌の編集に携わった。編集会議では自分は持っていない独創的なアイデアが飛び交いついていくのもやっとであったが、諸先輩方の援助もありなんとか形にできたと思っている。

今回の主題は「和敬塾の再定義」であり、この題名は僕のアイデアである。初めて編集に携わったにも関わらず、特集の顔となる題名を任せてもらって嬉しい限りである。僕が「定義」という言葉を使ったのは、「和敬塾」というものを再構築しようというアイデアの下で考えているうちに数学でしばしば使う“well-defined”の言葉が浮かんだからである。「和敬塾」をよりよくしようと考えることと「数学」を考えることには似通っているものがある。「和敬塾のために」、「数学のために」と目的こそ違うもののその過程はどちらも同じものであると思う。

僕らのアイデアが「和敬塾」にとって“well-defined”になることを切に願うのみである。(齊藤)

寄稿者一覧

井手孝信(いでこうしん)…北寮一年、上智大学理工学部情報理工学科一年。福岡県出身。最近パソコンのCPUを購入するも取替え後に電源がつかなくなり涙目。

清田凜太郎(きよたりんたろう)…七期、早稲田大学国際教養学部二年。インターナショナルスクールに十二年間通った結果、日本語力が著しく欠如する。

田中朔也(たなかさくや)…西寮四年、慶應義塾大学文学部フランス文学専攻所属。趣味はサッカー。深夜に西寮前で一人でボールを蹴る毎日。

徳久達志(とくひさたつし)…乾寮職員、五五年高知市生まれ、一四年東・南・異寮の兼任副寮長、一五年乾寮副寮長。レッズサポーター、音楽・美術鑑賞、スキーが趣味。大学時代友人と同人誌を作っていたので乾文学に共感。

中村慧(なかむらさとし)…四期、東京大学大学院新領域創成科学研究科修士課程一年。元乾寮ドライ部員(今はもう無いか) 鉄道と車をこよなく愛する。

福西吾郎(ふくにしごろう)…六期、中央大学理工学部三年。千葉出身。東京の下町散策、鉄道模型と山歩きが趣味。

松村寿明(まつむらとしあき)…七期、早稲田大学社会科学部二年。京都府出身。変態行為が趣味。表紙デザインを担当。

米井凜太(よねいこうた)…八期、國學院大学法学部法律学科法律専門職専攻一年。将来の夢は千葉地方検察庁特別刑事部(通称…特刑部)の検事になること。

那須優一(なすゆういち)…乾坤舎初代代表。五期、東京大学文学部社会科学部四年。昨年ひょんなことからコペンハーゲン大学へ交換留学。敬虔な武道家信者。

伊勢康平(いせこうへい)…乾坤舎代表。六期、早稲田大学文学部中国語中国文学コース三年。九月から北京大学へ交換留学。夢は朝市に隠れる大隠。

草原広樹(くさはらひろき)…六期、早稲田大学社会科学部三年。離島や深山幽谷での極限生活経験多数。九月からポートランド州立大学へ留学。

伊藤圭基(いとうよしき)…七期、東京大学教養学部理科一類二年。将来の目標は科学者。

野中高亮(のなかたかあき)…七期、学習院大学経済学部経済学科二年。興味は多数、趣味はなし。乾のME器用貧乏。

齊藤和輝(さいとうかずき)…八期、東京理科大学理学部数学科一年。福岡市出身。趣味は脱背理法証明と艦これ。腐った脳を蘇らせよう!の背理法被害者の会。

鈴木啓介(すずきけいすけ)…八期、早稲田大学教育学部英語英文学科一年。横浜出身のベイファン。エヴァをみてアニメにはまり、年間千話以上を視聴。

お知らせ

◎編集体制が変わります！ 今回の八月特別號をもちまして、編集人の伊勢康平が留学のため編集人を辞任、新たに乾寮七期の伊藤圭基が編集人となります。次號の特集内容は未定ですが、引き続き『乾文學』が作りだす「公園」の言論空間をお楽しみください。

◎今回新たに西寮の田中さんと北寮の井手さんの、二名の乾寮外の学生が寄稿してくださいました。『乾文學』は、これから多くの皆さまのご寄稿をお待ちしております。また、原稿以外にも編集や芸術・構成の仕事も大募集しております。

kenkon28@gmail.com までお気軽にご連絡ください。その他にも、ご感想や気になった点などをご連絡してくださると幸いです。

乾文學八月特別號

2016年8月30日公開

編集人 伊勢康平

編集 齊藤和輝、鈴木啓介

表紙デザイン 松村寿明

発行所 乾坤舎

東京都文京区目白台1丁目21番地2

和敬塾乾寮

郵便番号 112-0015

<http://tmatsuwestern.wix.com/inuibungaku>

kenkon28@gmail.com（メール）

振替：tsubuan1525@gmail.com（編集人）

印刷 スピード印刷工房

※乱丁、落丁本はお取替えいたします。



WAKEI JUKU

Dormitory for male university students
in Tokyo, Japan